

# 快天山古墳発掘調査報告書

2004. 3

綾歌町教育委員会

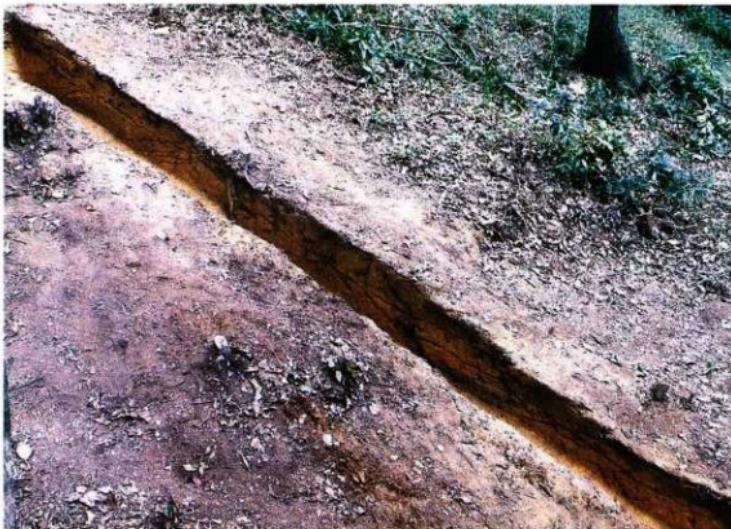
# 快天山古墳発掘調査報告書

2004. 3

綾歌町教育委員会



快天山古墳くびれ部段築：東側（東から）



快天山古墳後円部盛土（西から）

## はじめに

快天山古墳は、これまでに香川県教育委員会や京都大学考古学研究室が実施してきた発掘調査によって、県下でもとりわけ貴重な古墳であることが明らかになりました。しかし、それらの発掘調査の主は後円部頂部の主体部であり、墳丘の規模や施設・構造といったところについては確認調査が実施されておらず明確化されていませんでした。

そこで綾歌町教育委員会では、徳島文理大学文学部文化財学科のご協力を得て平成13年度から墳丘についての測量調査及び確認調査を進めてまいりました。

この結果、快天山古墳は全長100メートル近い前方後円墳で古墳時代前期に築造されたものとしては四国最大規模であることが確認されました。また、墳丘も段築構造で各段の斜面部には葺石が葺かれ、各段のテラスには円筒埴輪が立て並べられていることも確認されました。

さらに、後円部の上半部は非常に高度な技術を用いた盛土で構築されていることも判りました。

これらは、この地域では他に類がなく快天山古墳で初めて取り入れられた古墳築造技法のようです。このような地域の中でも特に突出した素晴らしい文化財が綾歌町に所在していることは、我々住民の誇りでもあります。

また、調査に関わった方々、ご指導ご協力くださいました方々、またきっかけをくださった地元住民の皆様方に深く感謝いたしております。

この貴重な文化遺産を、後世に伝えるため、今後の整備計画および活用計画が円滑に進められることを心から望んでいます。

平成16年3月

綾歌町教育委員会  
教育長 土岐道憲



## 凡　　例

1. この報告書は、平成13年度から平成15年度に綾歌町教育委員会が実施した香川県綾歌郡綾歌町栗熊東字若狭及び同町富熊字畠田に所在する快天山古墳の発掘調査報告書である。
2. 本文第4～6章は、平成13年度から平成15年度に綾歌町教育委員会が発行した『綾歌町内遺跡発掘調査報告書第6～8集』の本文から抜粋した。但し、図版等の番号については、本書全体で一貫するように変更した。
3. 本文第1～3章、第6章中第4～5節及び第7～8章の執筆は、綾歌町教育委員会主任事務近藤武司が行った。本文第4～5章及び第6章中第1～3節は徳島文理大学文学部助教授大久保徹也氏が行った。本書全体の調整は、近藤が行った。
4. 本書実測図の縮尺は、すべてスケールで表示した。また、実測図中の方位は、特に記載のないものについては国土座標第IV系によるものである。
5. 出土遺物及び図面は、綾歌町教育委員会に保管している。
6. 今回の報告書作成にあたり、以下の方々のご指導・ご協力を得た。ここに記して謝意を表する。  
大久保徹也（徳島文理大学文学部助教授）、丹羽佑一（香川大学教育学部教授）、小林謙一（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所文化財情報研究室長）、渡部明夫（香川県埋蔵文化財調査センター次長）、國木健司（香川県教育委員会事務局高校教育課指導主事）、藏本晋司（財団法人香川県埋蔵文化財調査センター文化財専門員）、信里芳紀（同主任技師）、乗松真也（同主任技師）、加納裕之（調査技術員）、片桐孝浩（香川県教育委員会文化行政課主任）、松本和彦（同主任技師）、東信男（丸亀市教育委員会副主任）、大野宏和（同嘱託）、阿河銳二（大川広域行政組合）

# 目 次

## 本文目次

報告書作成に至る経緯	1
第1章 序説	2
第2章 古墳の立地と環境	3
第1節 古墳の位置	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 快天山古墳の現況	5
第3章 調査に至る経緯と経過	6
第1節 調査に至る経緯	6
第2節 調査の経過	7
1. 平成13年度	7
2. 平成14年度	7
3. 平成15年度	8
4. 総括	8
第4章 平成13年度快天山古墳確認調査概要	12
第1節 調査の概要	12
第2節 各トレンチの概要	12
1. 第1トレンチ（第3図）	12
2. 第6トレンチ（第4図）	12
3. 第2トレンチ（第6・7図）	13
4. 第3トレンチ（第8図）	15
5. 第4トレンチ（第9図）	16
6. 第5トレンチ（第10図）	17
第3節 出土遺物（第11・12図）	18
第5章 平成14年度快天山古墳確認調査概要	23
第1節 各調査区の概要	23
1. 7トレンチ：前方部前端（第13・14図）	23
2. 8トレンチ：前方部前端（第13図）	24
3. 9トレンチ：前方部前面付近の東側面（第13・15図）	25
4. 10トレンチ：前方部前面付近頂部（第13図）	26
5. 11トレンチ：前方部東面（第16・17・18・19図）	26
6. 12トレンチ（第16・17・19図）	30
7. 13トレンチ（第16・17・19図）	32
8. 3トレンチ拡張部（第2図）	33
9. 14トレンチ（第2図）	34

第6節 埋葬施設 .....	9 6
第8章 まとめ .....	9 8

## 挿 図 目 次

第1図 快天山古墳と周辺の弥生後期～古墳中期主要墳墓 (S=1/5000) .....	4
第2図 快天山古墳トレンチ配置図 (S=1/600) .....	9
第3図 快天山古墳墳丘測量図 (S=1/600) .....	1 0
第4図 第1トレンチ 平・断面図 (S=1/60) .....	1 3
第5図 第6トレンチ 平・断面図 (S=1/60) .....	1 3
第6図 第2トレンチ 平・断面図 (S=1/60) .....	1 4
第7図 第2トレンチ 菁石平・立面図 (S=1/30) .....	1 4
第8図 第3トレンチ 平・断面図 (S=1/60) .....	1 5
第9図 第4トレンチ 平・断面図 (S=1/60) .....	1 6
第10図 第5トレンチ 平・断面図 (S=1/60) .....	1 7
第11図 出土遺物実測図1 (S=1/4) .....	1 8
第12図 出土遺物実測図2 (S=1/4) .....	2 0
第13図 前方部前面調査区配置図 .....	2 3
第14図 7トレンチ平・断面図 (S=1/60) .....	2 4
第15図 9トレンチ平・断面図 (S=1/60) .....	2 5
第16図 前方部東面調査区配置図 .....	2 7
第17図 前方部東面調査区 (1 1～1 3トレンチ) 平・立面図 (S=1/60) .....	2 8
第18図 前方部東面断面図 (S=1/60) .....	2 9
第19図 火葬墓平・断面図 (1 1トレンチ) .....	3 0
第20図 円筒埴輪 (S=1/4) .....	3 6
第21図 円筒埴輪 (S=1/4) .....	3 7
第22図 壺形埴輪 (S=1/4) .....	4 0
第23図 火葬墓関連資料他 (S=1/4) .....	4 1
第24図 1 5トレンチ平・断面図 (S=1/60) .....	5 1
第25図 1 6トレンチ平・断面図 (S=1/40) .....	5 2
第26図 1 7トレンチ平・断面図 (S=1/40) .....	5 4
第27図 壺形埴輪 (S=1/4) .....	5 6
第28図 円筒埴輪1 (S=1/4) .....	5 8
第29図 円筒埴輪2 (S=1/4) .....	5 9

第2節 出土遺物の概要 .....	3 5
1. 快天山古墳関係遺物（第20～22図） .....	3 5
2. 火葬墓関連遺物他（第23図他） .....	4 1
3. その他 .....	4 2
第6章 平成15年度快天山古墳確認調査概要 .....	5 0
第1節 くびれ部調査区の概要 .....	5 0
1. 15トレンチ：くびれ部西面（第24図 写真10） .....	5 0
2. 16トレンチ：くびれ部東面（第25図 写真11） .....	5 2
3. 17トレンチ：後円部北東斜面上位（第26図 写真12） .....	5 3
第2節 くびれ部調査区出土遺物の概要 .....	5 5
1. 快天山古墳関係遺物（第27～33図 表1 写真13～17） .....	5 5
第3節 平成14年度調査成果補遺 .....	6 3
1. 3トレンチ拡張部（第34図） .....	6 3
2. 14トレンチ（第35図） .....	6 4
第4節 後円部調査区の概要 .....	7 1
1. 18トレンチ：後円部南西面（第39図 写真18） .....	7 1
2. 19トレンチ：後円部南東面（第40図 写真19） .....	7 5
3. 20トレンチ：後円部南西面（第41図 写真20） .....	7 7
第5節 後円部調査区出土遺物の概要 .....	7 8
1. 快天山古墳関係遺物（第42図 写真21） .....	7 8
第7章 快天山古墳の構築 .....	9 3
第1節 立地 .....	9 3
1. 地形との関係 .....	9 3
2. 可視領域 .....	9 3
3. 旧地形観察 .....	9 3
第2節 墳丘形状 .....	9 4
第3節 墳丘の大きさ .....	9 4
第4節 構築 .....	9 5
1. 立地関係 .....	9 5
2. 前方部 .....	9 5
3. 後円部 .....	9 5
第5節 外表施設 .....	9 5
1. 莢石 .....	9 6
2. テラス面 .....	9 6
3. 円筒埴輪列 .....	9 6

写真2 ..... 2 2

- 図版3 第1トレンチ落ち込み部埴輪出土状態（北から）
- 図版4 第1トレンチ落ち込み（西から）
- 図版5 第1トレンチ落ち込み（北から）
- 図版6 第6トレンチ（西から）
- 図版7 第2トレンチ葺石（西から）
- 図版8 第2トレンチ埴輪樹立状態（南から）
- 図版9 第2トレンチ葺石と埴輪（南から）
- 図版10 第4トレンチ傾斜変換点（東から）

写真3 前方部前端調査区・前方部東面調査区1 ..... 4 3

- 図版11 第7～9トレンチ全景（北から）
- 図版12 第9トレンチ全景（東から）
- 図版13 第7トレンチ全景（北から）
- 図版14 第7トレンチ前端区画溝南肩（西から）
- 図版15 第12トレンチ第三段斜面葺石（東から）
- 図版16 第11～13トレンチ全景（南から）

写真4 前方部東面調査区2 ..... 4 4

- 図版17 第12トレンチ第一段斜面葺石（東から）
- 図版18 第11・13トレンチ第一・二段斜面葺石（東から）
- 図版19 第11・12トレンチ第一・二段斜面葺石（北から）
- 図版20 第一段斜面葺石（北から）
- 図版21 第11トレンチ第一段斜面葺石屈折部
- 図版22 第13トレンチ第一段テラス埴輪設置状況

写真5 前方部東面 火葬墓 ..... 4 5

- 図版23 火葬墓壙半碎状況
- 図版24 火葬墓壙掘下状況
- 図版25 火葬墓壙完掘状況
- 図版26 火葬墓壙完掘状況
- 図版27 第11トレンチ火葬墓検出位置（丸印の部分）

第30図 円筒埴輪3 (S=1/4) .....	60
第31図 円筒埴輪4 (S=1/4) .....	61
第32図 円筒埴輪5 (S=1/4) .....	62
第33図 円筒埴輪6 (S=1/4) .....	63
第34図 3トレンチ平・断面図 (S=1/60) .....	65
第35図 4トレンチ平・断面図 (S=1/60) .....	67
第36図 快天山古墳調査区配置図 .....	69
第37図 快天山古墳段築・埴輪復元推定図 (前方部) .....	70
第38図 前方部東面調査区平面図 .....	70
第39図 18トレンチ平・断面図 (S=1/60) .....	73
第40図 19トレンチ平・断面図 (S=1/60) .....	76
第41図 20トレンチ平・断面図 (S=1/60) .....	78
第42図 壺形・円筒埴輪 (S=1/4) .....	79
第43図 快天山古墳からの可視領域 (S=1/100000) .....	97

## 表 目 次

表1 遺物観察表 .....	68
----------------	----

## 図 版 目 次

### 巻頭図版

快天山古墳くびれ部段築：東側（東から）

快天山古墳後円部盛土（西から）

写真1 .....	21
図版1 第5トレンチ後円部南（南から）	
図版2 第3トレンチ：後円部西（西から）	

写真6 第3トレンチ拡張区・第14トレンチ ..... 4 6

- 図版28 第3トレンチ拡張区全景（西から）
- 図版29 第3トレンチ拡張区盛土断面状況（東から）
- 図版30 第3トレンチ拡張区填丘上部の盛土
- 図版31 第14トレンチ全景（西から）
- 図版32 第14トレンチ第二段斜面葺石・樹立埴輪（南から）
- 図版33 墓輪設置状況
- 図版34 第14トレンチ第一・二段斜面葺石（西から）

写真7 出土遺物1：円筒埴輪 ..... 4 7

- 図版35 円筒埴輪中位（第20図1）表
- 図版36 円筒埴輪中位（第20図1）裏
- 図版37 円筒埴輪中位（第21図3）表
- 図版38 円筒埴輪中位（第20図3）表
- 図版39 円筒埴輪中位 表
- 図版40 円筒埴輪中位 表
- 図版41 円筒埴輪中位（第21図1）表
- 図版42 円筒埴輪中位（第20図4）表
- 図版43 円筒埴輪中位（第20図5）表

写真8 出土遺物2：壺形・円筒埴輪 ..... 4 8

- 図版44 壺形埴輪口縁（第22図1）
- 図版45 壺形埴輪頸部（第22図5）
- 図版46 壺形埴輪口縁（第22図4）
- 図版47 壺形埴輪口縁（第22図3）
- 図版48 壺形埴輪口縁（第22図2）
- 図版49 円筒埴輪底部（第21図5）
- 図版50 円筒埴輪口縁（第20図2）
- 図版51 円筒埴輪口縁（第20図2）拡大

写真9 火葬墓関連遺物 ..... 4 9

- 図版52 藏骨器（第23図3）
- 図版53 墓壙内出土土師器皿（第23図2）表
- 図版54 墓壙内出土土師器皿（第23図2）裏
- 図版55 八稜鏡

写真10 15トレンチ .....	81
図版56 推定第二段テラス遺物出土状態（西から）	
図版57 推定第二段テラス遺物出土状態（東から）	
図版58 第二段テラス遺物出土状態（西から）	
図版59 第三段斜面葺石遺存状態（西から）	
図版60 第二段斜面葺石（西から）	
図版61 第二段斜面葺石と基底石掘方？	
図版62 第二段斜面葺石（南から）	
図版63 第二段斜面葺石（上から）	
写真11 16トレンチ .....	82
図版64 第三段斜面葺石残存状態（東から）	
図版65 第三段斜面葺石（北から）	
図版66 第三段斜面葺石（東から）	
図版67 第三段斜面葺石（南から）	
図版68 推定第二段テラス遺物出土状態（東から）	
図版69 第二段テラス遺物出土状況（西から）	
図版70 第二段テラス遺物出土状況（東から）	
図版71 第二段テラス遺物出土状況（南から）	
写真12 17トレンチ .....	83
図版72 17トレンチ全景（東から）	
図版73 17トレンチ南壁土層全景（北東から）	
図版74 南壁土層：中央部（北から）	
図版75 南壁土層：西部（北から）	
図版76 南壁土層：東部（北から）	
図版77 17トレンチ遺物検出作業	
図版78 17トレンチ葺石実測作業	
図版79 調査説明会風景	

写真 1 3	15トレンチ出土埴輪	8 4
図版 8 0	壺形埴輪（第27図-1）	
図版 8 1	壺形埴輪（第27図-2）表	
図版 8 2	壺形埴輪（第27図-2）裏	
図版 8 3	円筒埴輪口縁部（第28図-2）表	
図版 8 4	円筒埴輪口縁部（第28図-2）裏	
図版 8 5	円筒埴輪口縁部（第28図-5）表	
図版 8 6	円筒埴輪口縁部（第28図-5）裏	
図版 8 7	円筒埴輪中位（第31図-2）表	
図版 8 8	円筒埴輪中位（第31図-2）裏	
写真 1 4	15トレンチ出土埴輪2	8 5
図版 8 9	円筒埴輪中位（第32図-1）表	
図版 9 0	円筒埴輪中位（第32図-1）裏	
図版 9 1	円筒埴輪中位（第30図-3）表	
図版 9 2	円筒埴輪中位（第30図-3）裏	
図版 9 3	円筒埴輪中位（第31図-4）表	
図版 9 4	円筒埴輪中位（第31図-4）裏	
図版 9 5	円筒埴輪中位（第31図-4）拡大	
写真 1 5	15トレンチ出土埴輪3	8 6
図版 9 6	円筒埴輪中位（第29図-4）表	
図版 9 7	円筒埴輪中位（第29図-4）裏	
図版 9 8	円筒埴輪中位 表	
図版 9 9	円筒埴輪中位 裏	
図版 1 0 0	円筒埴輪基底部（第33図-1）表	
図版 1 0 1	円筒埴輪基底部（第33図-1）裏	
図版 1 0 2	円筒埴輪基底部（第33図-4）表	
図版 1 0 3	円筒埴輪基底部（第33図-4）裏	

写真16 16トレンチ出土埴輪1	87
図版104 円筒埴輪口縁部 (第28図-1) 表	
図版105 円筒埴輪口縁部 (第28図-1) 裏	
図版106 円筒埴輪口縁部 (第28図-3) 表	
図版107 円筒埴輪口縁部 (第28図-3) 裏	
図版108 円筒埴輪口縁部 (第28図-4) 表	
図版109 円筒埴輪口縁部 (第28図-4) 裏	
図版110 円筒埴輪口縁部 (第28図-6) 表	
図版111 円筒埴輪口縁部 (第28図-6) 裏	
写真17 16トレンチ出土埴輪2	88
図版112 円筒埴輪中位 (第29図-3) 表	
図版113 円筒埴輪中位 (第29図-3) 裏	
図版114 円筒埴輪中位 (第30図-4) 表	
図版115 円筒埴輪中位 (第30図-4) 裏	
図版116 壺形埴輪底部：穿孔部 (第27図-5) 表	
図版117 壺形埴輪底部：穿孔部 (第27図-5) 断面	
図版118 壺形埴輪底部：穿孔部 (第27図-5) 裏	
写真18 18トレンチ	89
図版119 作業風景	
図版120 置土検出状況 (北西から)	
図版121 置土検出状況 (西から)	
図版122 盛土確認状況 (西から)	
図版123 盛土確認状況 (北西から)	
図版124 盛土検出状況 (西から)	
図版125 塩輪据付壙？検出状況 (南西から)	
図版126 土壙検出状況 (北西から)	

写真19 19トレンチ	90
図版127 墓端付近から墳頂を望む（南東から）	
図版128 トレンチ全景（北東から）	
図版129 トレンチ全景（東から）	
図版130 推定テラス付近確認状況（南から）	
図版131 墳輪裾付壙？検出状況（南から）	
図版132 墳輪裾付壙？完掘状況（南から）	
図版133 墳輪裾付壙？検出状況（南西から）	
写真20 20トレンチ	91
図版134 出土遺物検出状況（北東から）	
図版135 碑等堆積状況（北東から）	
図版136 上壙検出状況（南東から）	
図版137 土壙堆積状況（南から）	
図版138 南東壁土層堆積状況（西から）	
図版139 南東壁土層堆積状況（北から）	
図版140 北西壁土層堆積状況（東から）	
図版141 北西壁土層堆積状況（南から）	
写真21 各トレンチ出土埴輪	92
図版142 18トレンチ円筒埴輪中位（第42図-1）	
図版143 18トレンチ円筒埴輪口縁部（第42図-2）	
図版144 18トレンチ円筒埴輪中位（第42図-3）	
図版145 18トレンチ円筒埴輪中位（第42図-4）	
図版146 18トレンチ壺形埴輪口縁部（第42図-5）	
図版147 19トレンチ円筒埴輪中位（第42図-6）	
図版148 20トレンチ円筒埴輪中位（第42図-7）	

## 報告書作成に至る経緯

1950（昭和25）年、地元中学生が地表に露出する石棺の蓋を発見したことにより、香川県教育委員会によって快天山古墳の発掘調査が実施された。この内容は、翌年に『史跡名勝天然記念物調査報告 第15 快天山古墳発掘調査報告書』として報告されている。また、2002（平成12）年には、綾歌町教育委員会によって復刻版が刊行されている。

1951（昭和26）年、京都大学文学部考古学教室によって再調査が実施された。この内容は、2002（平成14）年によく『岩崎山第4号古墳・快天山古墳発掘調査報告書』として報告された。

上記2回の発掘調査は、主に主体部の確認調査が主で墳丘構造や外表施設の確認に関するものではなかった。しかしながら、埋葬施設だけ見ても国内最古の刳抜式石棺を3基配列していること、そのそれぞれに銅鏡をはじめとする様々な副葬品を副葬することなどから、本町のみならず全国的に見ても非常に貴重な文化財と位置付けることができる。

以後、半世紀程快天山古墳の墳丘そのものに手をつけることは成されてこなかったが、近年になり文化財愛護に対する声が大きくなってきており、地元住民を中心に快天山古墳の適切な保護及び保存について呼ばれるようになってきた。

これを受けて綾歌町教育委員会では、平成11年2月に快天山古墳を町史跡として指定するに至った。更に、より良い保護・活用について検討した結果、国史跡として整備するのが適当であるとの結論に結びついた。

しかしながら、遺跡の重要性については申し分ないが、墳丘について説明する資料が整っていなかったため、平成13年度から平成15年度までの3ヵ年、墳丘についての確認調査を実施した。実施に際しては、快天山古墳調査検討委員会を編成し、充分な検討・協議を重ねての取り組みとなった。

これらの調査の結果、快天山古墳は古墳時代前期に築造された前方後円墳としては四国最大規模であり築造方法としても地域のものとしては特に秀でたものであることが確認された。

この墳丘確認調査の内容については、年度毎に『綾歌町内遺跡発掘調査報告書』に掲載してきたが、一連の調査が終了したことにより、ここに総括として報告する。

## 第1章 序 説

快天山古墳は、その墳頂部に石棺蓋の上部が露出していたことから、古くからその存在が知られていた。しかしながら、その構造について触れる調査はなされてこなかった。

1950（昭和25）年に、初めて香川県教育委員会内香川県名勝天然記念物調査委員会和田正夫、松浦正一氏らと当時の久栄中学校校長大林秀雄氏と学生達によって主体部の調査が実施され、翌年には京都大学文学部考古学教室梅原末治、横山浩一氏らによって再調査が実施された。

これらの調査によって、快天山古墳後円部墳頂には3基の埋葬施設が計画的に配置されておりそのそれぞれから獸面方格規矩四神鏡や石鏡などの副葬品が出土している。更に、石棺は刳抜式で国内でも最古の部類に属するものであることが確認されている。また、墳丘は簡易測量の結果、前方後円墳で墳長100m程の規模であることが有力視されていた。

これらのことから、快天山古墳は特に貴重な文化財であることが認識されるようになった。

その後、特に保護措置が成される訳でもなく近年に至ったが、地元住民の熱意ある文化財愛護運動の結果、平成11年2月に快天山古墳は町指定史跡としての認定を受けた。しかし、それは文化財保護についての網掛けが成されたに過ぎず、活用に向けたものではなかった。そこで、様々な検討を行った結果、有効な活用を図るには国指定史跡の認定を受け、適切な整備を図る必要があるとの結論に達した。

以前の調査によって、主体部の大まかな内容は確認・報告が成されているが、墳丘の規模・構造等についての確認調査は実施してされていなかったことにより不明な点が多くかった。そこで、平成13年度から綾歌町教育委員会によって墳丘の確認調査が実施されることになり、快天山古墳の全貌を解明するための調査に着手した。この調査は、平成15年度までの3ヵ年で実施された。

この墳丘確認調査の内容は、年度毎に報告されてきたが、新たな調査により新しい見解が生じたりする点もある。ここで、3ヵ年の成果をとりまとめ、快天山古墳の実態を明らかにしたい。

## 第2章 古墳の立地と環境

### 第1節 古墳の位置

快天山古墳は北緯 $34^{\circ}13'57''$ 、東経 $133^{\circ}53'30''$ に位置する。また、国土地理院第IV系で表示すると、後円部中心点がX: 137078.241m, Y: 36213.288mとなる。

四国北東部の讃岐地域は、燧灘に面した三豊平野、備讃瀬戸に面して東西に並ぶ高松平野・丸亀平野、および播磨灘に面した東部海岸平野群と後背内陸平地群から成り立つが、快天山古墳はこのうち丸亀平野の南部に所在する。平野東縁を画する城山・横山山塊最南端の丘陵上にあって、大東川、綾川のほぼ分水界に位置する。

山塊の南縁は細かく開析され小丘陵が手指状に並ぶが、本古墳はそうした丘陵先端部の一つを利用して築かれた大形の前方後円墳である。

東方の綾川水系上流域に広がる羽床盆地に対する眺望は堤山等に遮られその一部を垣間見るに過ぎないが、南～西方向の視界は概ね開け、大東川上流域の栗熊・富熊地域から岡田台地・帶を広く見渡すことができる。

古墳は後円部を南、すなわち丘陵先端に向け、前方部を北に向ける。後円部頂は標高75.4mを測り、周囲の水田面との比高はおよそ4.0mで、南方の平地側からは後円部の圧倒的な質感を仰ぎ見ることができる。

### 第2節 歴史的環境

北方の横山山塊の高所には、横山経塚、奥川内、陣の丸、地神山といった古墳群が分布する。このうち横山経塚古墳群は少なくとも2基の前方後円墳を含む積石塚墓群である。

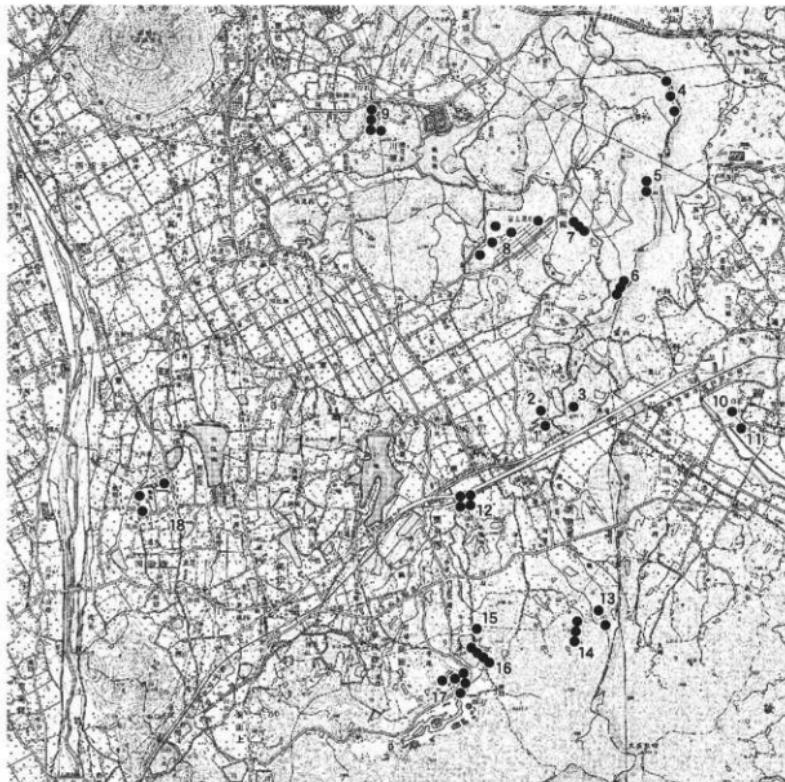
また、陣の丸古墳群では2基、奥川内古墳群では1基の盛上前方後円墳を含む。これらの前方後円墳はいずれも軸長4.0m以下で立地等から古墳時代前期に遡ると見られ、快天山古墳に先行する可能性が高い。地神山古墳群は中期後半～後期前半に下ると見られ、小型前方後円墳を含むというが、その内容は未だ報告されていない。

これに対して丘陵南縁にはより劣位の無墳丘箱式石棺もしくは小型古墳が散在する。快天山古墳に近接した尾根伝いの北方約100mの地点には、安山岩板石で構築した精美な竪穴石室を中心とする墳形・規模不詳の薬師山古墳がかつて存在した。東隣尾根先端の住吉神社背後からは箱式石棺が見つかっている。これらに関する情報は乏しいが、その多くは中期前半以前に比定しうるものと見られる。さらに快天山古墳前方部に接して5基の箱式石棺群が開墾時に確認されており、うち一基から小型倭製鏡が出土している。また後円部南斜面の開墾時にも硬玉製勾玉の出土が伝えられており、位置関係からこれらは本墳に從属する埋葬群と位置づけられる可能性が高い。

また栗熊低地を挟んで南方の高見峰山麓には小型前方後円墳を含む石塚山墳墓群・平尾墳墓群や、定連池東丘古墳群・畦田古墳群・休場池東丘古墳群・原竜王山古墳群などの複数の小規模墳墓・古墳群が分布する。これらの形成は古墳時代前期を中心とし、定連遺跡、

平尾墳墓群のように始点が弥生後期に遡るものも含む。現時点では横山山塊の墳墓群より形成開始が早いようであるが、やはり中期後半以降には継続しないようだ。

中期後半～後期前半の墳墓群は羽床盆地縁辺部と岡田台地に集中し、横山山塊・大高見峰北麓では希薄となる。羽床盆地では段丘縁辺部に円墳が群集し、その中には津頭東・津頭西・末則古墳などの規模・装備の点で他を圧倒するものも認められる。また最近になって3基の小型前方後円墳が確認されており、少なくとも内一基はこの時期に位置づけられる可能性が高い。津頭東古墳の築造が前期に遡るもの、大多数は中期後半から後期前半の所産となる。同様に岡田台地でもその時期に車塚古墳を盟主とする万塚古墳群が形成さ



- |              |            |             |              |           |
|--------------|------------|-------------|--------------|-----------|
| 1. 快天山古墳     | 2. 葉断山古墳   | 3. 住吉神社山頂古墳 | 4. 横山経塚古墳群   | 5. 横峰古墳群  |
| 6. 奥川内古墳群    | 7. 陣の丸古墳群  | 8. 地神山古墳群   | 9. 城山古墳群     | 10. 津頭西古墳 |
| 11. 津頭東古墳    | 12. 石塚山古墳群 | 13. 原塚王山古墳群 | 14. 休場池東丘古墳群 | 15. 定連遺跡  |
| 16. 定連池東丘古墳群 | 17. 平尾墳墓群  | 18. 阿田万塚古墳群 |              |           |

第1図 快天山古墳と周辺の弥生後期～古墳中期主要墳墓 (S=1/50000)

れる。

後期後半段階には、宇閑神社古墳などの横穴式石室墳が再び大高見峰北麓に築かれるが、大規模な群集は認められない。

いずれにしても快天山古墳に匹敵する傑出した規模の墳墓は、その前後には認められない。また、快天山古墳の築造時期に小型前方後円墳の築造が停止し、以後も円墳が主体となる点は注意しておく必要があるだろう。

### 第3節 快天山古墳の現況

快天山古墳背後の丘陵一帯は1970年代に大規模な農地開発の対象となり、その影響は残念ながら本墳前方部まで及んでいる。この部分では尾根頂部が削平開墾されると共に農道整備と養鷄場の設置で前方部の中程が切断され、この折に前方部に接した箱式石棺群も滅失したとされる。農道西側の前方部側面は厚い建設残土の堆積に覆われていたが、町教育委員会によって除去された。

また、近年では丘陵西裾に新興住宅地が広がっており、墳丘から旧地形が残っている区域に隣接するところまで開発が進んでいる。しかし、墳頂には本古墳の名称の謂れとなつた旧円福寺の僧侶快天以下の墓石が並び、後円部南斜面に住吉神社御旅所が設けられていることもある。後円部からくびれ部は戦前から戦後の一時期にかけて畠地化されたものの、現在は山林に覆われ、前方部ほどの極端な変容を蒙っていない。

後円部東から南斜面の広い範囲は墳頂平坦面に接する部分まで、かつて開墾されて細かな歎の痕跡が整然と並ぶ。また墳丘裾付近は連続的に切り込まれ、やはり畠地を造成した形跡が残る。西斜面では同様の痕跡は顕著ではないが、上半部の隨所に土砂崩落痕跡が認められ、畠地化していない分墳丘の自然崩壊が目につく。後円部斜面のこうした状況に比べ、東西両側面ともにくびれ部から前方部南半部は最も本来的な形状が保たれているようだ。

### 第3章 調査に至る経緯と経過

#### 第1節 調査に至る経緯

快天山古墳は、1950（昭和25）年に香川県史跡名勝天然記念物調査委員会、翌1951（昭和26）年に京都大学文学部考古学研究室によってそれぞれ発掘調査が実施されている。

それらの調査は、当時の中学生が後円部墳頂に露出する石棺の蓋を確認したことに起因するが、その調査は短期間に実施されたこともあり、墳頂の埋葬施設付近の発掘にとどまっていた。

調査成果としては、非常に良く100m程の巨大な前方後円墳で古墳時代前期のものとしては四国最大規模であることが確認された。また、後円部頂部の埋葬施設には剝抜式剣竹形石棺が3基計画的に配置されており、そのそれから銅鏡や石劍、鉄製品が出土しており当時の相当な権力者が被葬されていることが想定された。更に、当時の研究によってこれらの石棺は、国内最古の部類に属することも明らかになり、この地域のものとしては様々な面で突出していることから各方面から注目を浴びた。

その後、快天山古墳には半世紀ほど何も手をつけられない状態で時だけが過ぎていたが、時代も平成になりバブルが弾けたころから文化財愛護意識が住民の間で高まってきた。特に、平成7年度には町道西行末本村線改良事業に伴う行末西遺跡発掘調査や綾歌町総合会館アイレックスの建設事業に伴う佐古川遺跡発掘調査と、本町で初めて大規模な発掘調査が行われたことや、国道3号バイパス建設事業に伴う佐占川・塙田遺跡発掘調査でそれぞれ大きな成果があげられたことで住民の意識を大きく動かしたものと考えられる。

そういう背景の中、栗熊東住吉地区の住民たちの中で地元に所在する快天山古墳の保存についての関心が特に高まっていた。その結果として、地元から申請のあった町史跡への指定について綾歌町教育委員では平成11年2月5日付けで認定した。

住民たちの声は、町指定になったことだけでは收まらず、この貴重な遺跡の適切な整備・活用についての要望と化してきた。行政側としても快天山古墳の保存整備について考えてはいたが、経費面での不安を抱えていたため具体化にまでは至ってなかった。しかし、これらの地域住民の熱望に応えるべく平成12年度ごろから、快天山古墳の国史跡指定に向けた積極的な検討に入った。

まず、香川県教育委員会事務局文化行政課担当諸氏の指導を仰ぎ、快天山古墳調査検討委員会を編成した。構成は、香川大学経済学部教授丹羽佑一氏、徳島文理大学文学部文化財学科助教授大久保徹也氏、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター次長渡部明夫氏、香川県教育委員会事務局高校教育課指導主事國木健司氏、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所文化財情報研究室長小林謙一氏、綾歌町文化財保護委員会委員長内藤敏典氏の6名であった。内藤氏については、途中、他界されたため、以後は5名の委員で検討をいただいた。

調査については、昭和の調査時に簡易的な墳丘測量は成されているものの、それをその

まま使用するには、地形が改変を受けていたり、測量当時と状況が変わってしまっており無理が生じていたので、新たに地形測量を実施したうえで以後の調査方法について考えるということに結論づいた。

なお、当時は本町の調査体制が整っていなかったため、快天山古墳調査検討委員会委員でもある大久保氏に協力をいただくことにより調査を進めることが可能となった。

その後、13年度早期に実施した測量成果に基づき調査方法を検討した。以前の調査は、埋葬施設を主に実施したため墳丘規模を特定するようなものではなかった。地表調査で円筒埴輪が確認できていたことからその辺りで墳端を推定していたもので、発掘による施設等の確認ができていたものではなかった。そこで、まず墳端を確認し墳丘規模を特定する目的で、推定される墳端付近に試掘トレンチを設定していくことにした。その調査結果を検討しながら次期の調査計画を立てていくという進め方であった。

尚、平成14年度には綾歌町教育委員会に職員を配置し体制を整えた上で、大久保氏の協力を頂きながらではあるが調査に取り組んだ。

## 第2節 調査の経過

### 1. 平成13年度

昭和の調査以降、初めて快天山古墳の本体に手をつけるということ、遺跡の内容として非常に貴重なものであるということ、以前の調査以降で畠地への転換等による改変を受けていることがあげられることから、まず4～5月に現況の地形測量調査を実施した。なお、調査地内には測量基準点を数箇所設置した。

測量は、平板測量方式で周辺地形を重視しながら快天山古墳の周囲約南北150m×東西100mの範囲で実施した。縮尺は1/100、コンターラインは25cm間隔とした。その成果を十分に検討し、7～8月に第一次墳丘確認調査を実施した。この調査では、後円部南側・西側、前方部西側、北側の4地点に1～6トレンチを設定した。各トレンチは原則として幅1mでの設定であり、調査面積は約60m<sup>2</sup>であった。

### 2. 平成14年度

前年度に実施した前方部前端の再確認を目的とした小規模な第二次調査を4月に実施した。7～10トレンチの計4本を設定し、調査面積は25m<sup>2</sup>であった。

続いて5月に第三次調査として、夏に計画していた本格的な調査に備えて予備的に前方部東側面に11トレンチを設定した。調査面積は16.8m<sup>2</sup>であった。

7～8月には、前方部からくびれ部東側面にかけて墳丘構造を試みるための大規模な第四次調査を実施した。11トレンチの再掘削及び若干の拡張、12～13トレンチの設定であり調査面積は46.5m<sup>2</sup>であった。

この調査では、段築構造について確認できる遺構の検出等まとまった成果が得られたので、調査途中で現地説明会を実施した。350人ほどの参加者があり盛況であった。

年を明けて2～3月の第五次調査では、後円部墳丘西斜面に移動して昨年度に設定していた3トレンチを大規模に拡張した。また、前方部西側面に盛り付けられていた建設残土

を除去したことによって14トレンチを新たに設定した。

### 3. 平成15年度

平成14年度の調査で最低限の確認調査はできたものと考えていたが、快天山古墳調査検討委員会で検討した結果、少し足りないとのご意見を頂き、改めて調査区を設けることとした。

夏に2班体制で取り組むこととした。まず1班は、両くびれ部の確認を試みるための15～16トレンチと後円部の上半部の構造を確認するための17トレンチ調査区とし、7～8月に第七次調査を実施し、調査面積は51m<sup>2</sup>であった。

もう1班は、後円部墳端の再確認と外表施設の確認をするためのもので、6～8月にかけて、後円部南半部東西斜面に18～20トレンチを設定する第六次調査を実施した。調査面積は28.4m<sup>2</sup>であった。

また、調査最終段階ごろに現地説明会を開催し、200名近くの方々が参集した。

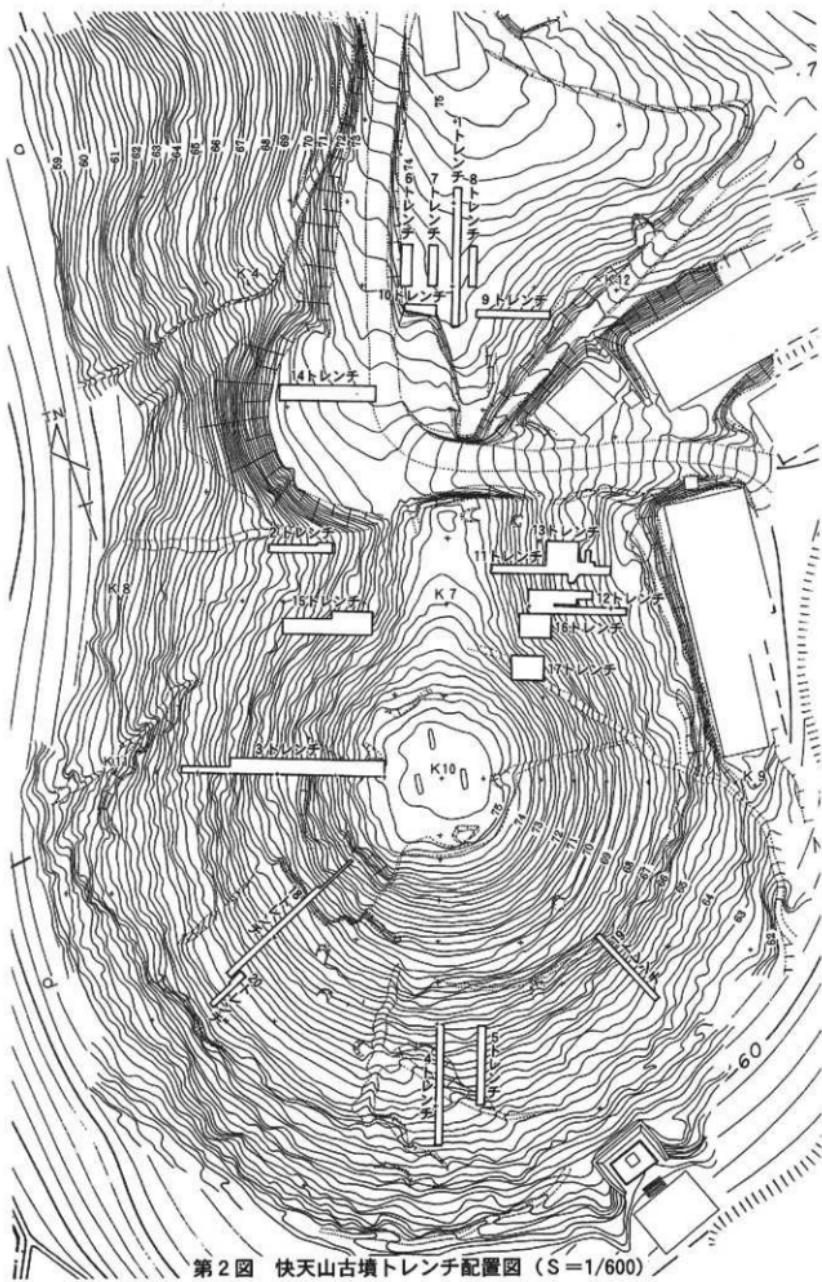
### 4. 総括

平成13年度から平成15年度までの3カ年計画で、墳丘規模及び構造を確認するための調査を、地形測量を含めると8回に渡り実施してきた。

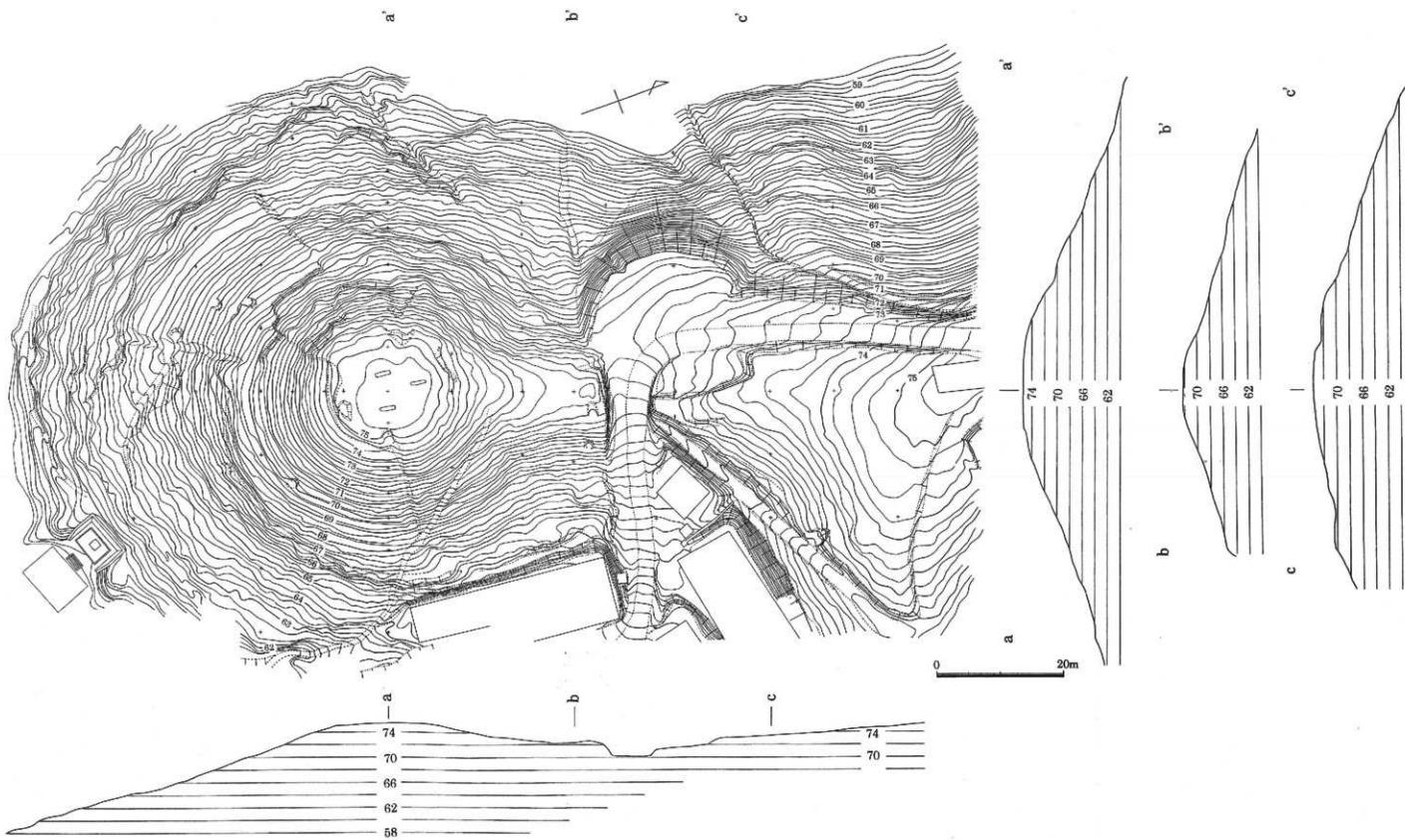
設定したトレンチは、20本にも及び拡張を含めると更に数は増加する。

結果的にみると、これだけの調査区を設けて調査を実施してきたにも関わらず、期待していただけのデータは取れなかったと思うが、最低限のことは成しえたと思う。

尚、年度毎およびトレンチ毎の調査内容については、第4～6章で報告する。



第2図 快天山古墳トレンチ配置図 (S=1/600)



第3図 快天山古墳墳丘測量図 ( $S=1/600$ )

## 第4章 平成13年度快天山古墳確認調査概要

調査期間 平成13年4月2日～8月10日

調査面積 60m<sup>2</sup>

### 第1節 調査の概要

第一次確認調査では当所4本の調査トレンチを設定したが、後世の改変によって充分な目的を達せなかつた部分についてさらに2本を追加した。設定したトレンチは次のとおりである。(配置は第2図参照)

第1トレンチ 前方部北 幅1m×延長1.7m 前端掘り割り残部(?)

第2トレンチ 前方部西 幅1～1.5m×延長7m 莢石下端および墳端傾斜変換点

第3トレンチ 後円部西 幅1m×延長6m 盛土層末端 墳端傾斜変換点

第4トレンチ 後円部南 幅1m×延長1.5m 墳端傾斜変換点

第5トレンチ 後円部南 幅1m×延長1.0m

第6トレンチ 前方部北 幅1.2～1.5m×延長5m

以下、各トレンチの調査所見について述べる。

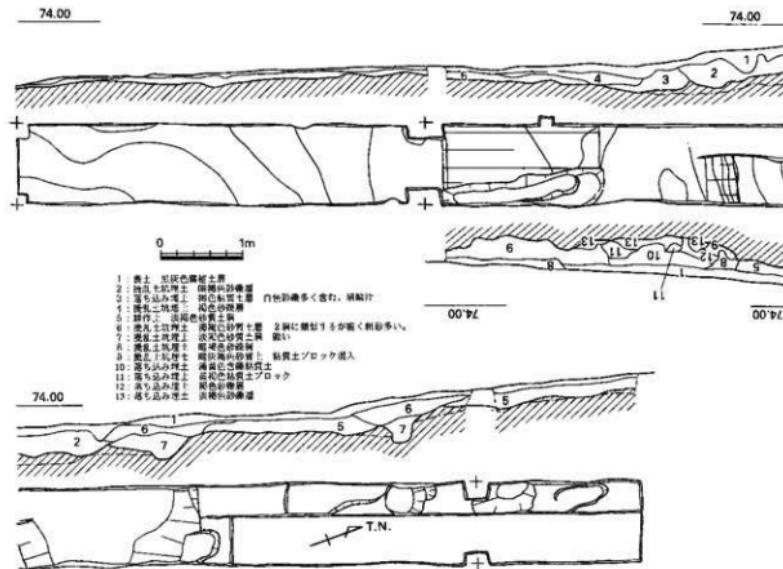
### 第2節 各トレンチの概要

#### 1. 第1トレンチ(第3図)

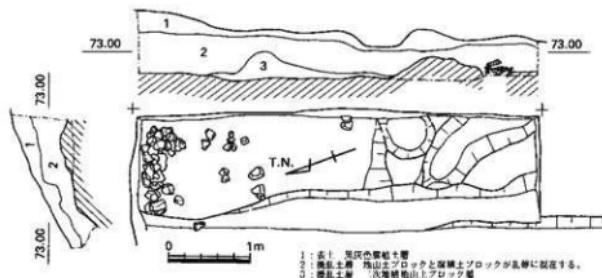
前方部前端の確認を目的として、主軸ライン上でK3杭北2mからK3杭南5mまで延長1.7mのトレンチを設定した。K3杭以南では表土直下で風化の進まない花崗岩バイラン土層が検出された。この部分では地山面は、地勢に応じてごくわずかながら南に下がる。ほぼK3杭を境にそれより以北では大小様々な不定形な擾乱壙が至る所に見出される。それらの多くではビニール断片なども見出されることなどからごく近年の所産と推測される。特にK3杭北3m以内ではそれが甚だしくほとんど旧状をとどめないことが判明したので、この部分では部分的な掘り下げにとどめた。このような擾乱と重複しつつ、K3杭を南端として幅3.8mで深さ20cmほどのきわめて浅い地山の落ち込みをかろうじて確認することができた。多数の擾乱壙と重なり合い、詳細な形状の復元は困難であるが、この落ち込み部あるいはこれに接した擾乱土壙に限って、埴輪片及び葺石様の石材を相当量包含することも留意して、断定しがたいもののこの部分が前方部前端を反映する可能性を想定しておきたい。なお落ち込み最深部は後円部中心点の北6.2m、標高73.1mとなる。

#### 2. 第6トレンチ(第4図)

第1トレンチで検出した落ち込み部分の延長を確認するためにK3杭の西5mを起点に北に延長5mで第6トレンチを設定した。前方部西半部を削って南北に延びる農道の法面部分に相当する。しかしながらこの部分では農道設置時の削平と残土の再堆積が著しく期待した落ち込みの連続は確認できなかった。ただし本トレンチにおいても再堆積土中に小



第4図 第1トレンチ 平・断面図 (S=1/60)

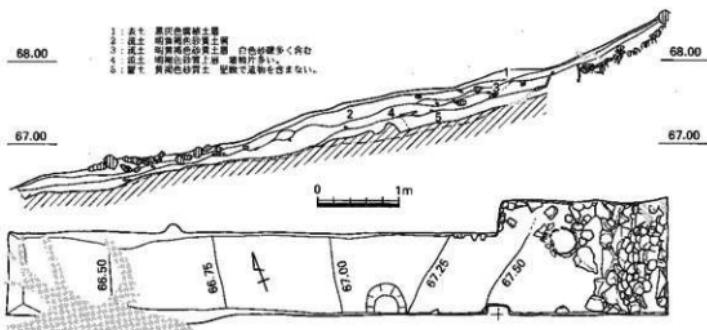


第5図 第6トレンチ 平・断面図 (S=1/60)

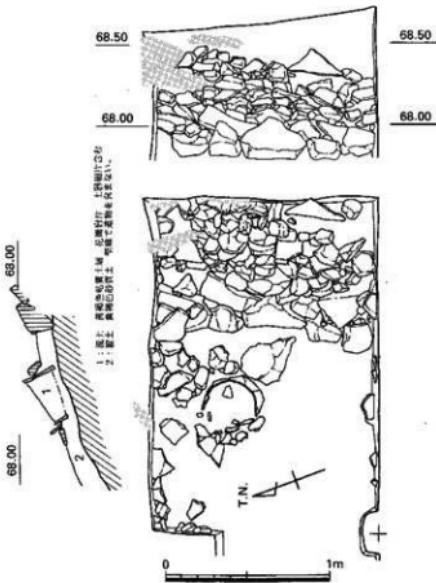
片ではあるが円筒埴輪片と拳大～小兒頭大の葺石様石材多数が含まれていた。

### 3. 第2トレンチ (第6・7図)

前方部西側面墳壠を確認するためにK7-K8ラインの北6mで主軸ラインの西1.4mを起点に延長7mで設定した東西方向トレンチである。前回調査ではこの付近で円筒埴輪列を検出している。



第6図 第2トレンチ 平・断面図 ( $S=1/60$ )



第7図 第2トレンチ 葦石平・立面図 ( $S=1/30$ )

径40cm強の大型品で底部はほぼ残存するが最下段突堤以上を失っている。トレンチ幅から考慮して少なくとも1m以上の間隔で据えられたものとみられる。検出した埴輪基底部は葦石外方の20°弱の傾斜を持つ地山面にそのまま置かれており、掘り方は検出できな

本トレンチでは葦石列とその外方に樹立された円筒埴輪1基、さらに下方で地山傾斜変換点を確認した。葦石はトレンチ東端で、約0.8m幅で検出した。全体として約25°前後の勾配をもち、礎を斜めに差し込むように並べている。下端には幅40cm前後の大形の石材を一列に並べるが、それより上方は拳大～小児頭大かそれよりもやや大形の礎を用いている。またトレンチ中央部で一列、継目地状の整った配列を見る事ができる。使用石材種は一様ではない。花崗岩もしくは凝灰岩質の亜円礎が多用されるが、それらに混じって安山岩板石も散見される。葦石列の下端は墳丘主軸から14.8m、標高67.8～67.9mとなる。

円筒埴輪は葦石下端列から30cmほど離れた位置で検出した。底

い。この部分には広がる層厚20cm弱の置き土（第6図-5層）に埋め込まれている。なお埴輪周辺では置き土上面に掌大の板状安山岩が多く検出された。樹立埴輪の根固めの可能性がある。

この埴輪基底部を埋め込む置き土は葺石設置後、その下端を覆うように最大層厚20cmで3.2mの範囲に広がる。埴輪周辺を除き表面に礫を敷き詰めているわけではない。本層末端付近で地山傾斜の変化を読みとることができる。その位置は墳丘主軸から1.8.2m標高6.7mとなる。なお第2トレーニチでは比較的多量の埴輪片を検出したが、円筒埴輪と共に二重口縁形態の壺口縁部片が認められる。出土状況から円筒埴輪同様に墳丘裾部に配置された可能性が高い。

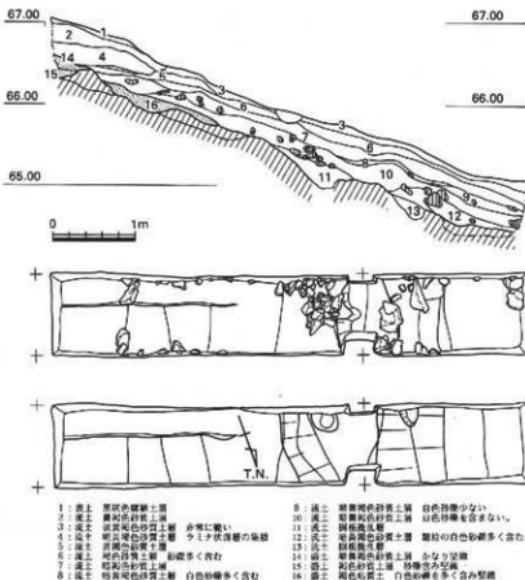
#### 4. 第3トレーニチ（第8図）

後円部西側墳裾を追求すべく後円部横断ライン上の3.2mを起点に延長6m、幅1mで設定した。既に述べたように後円部西斜面の墳端位置は地表面観察で明示することは難しい。この部分の墳丘上半部の随所で土砂崩落が生じており、この部分の墳裾は二次堆積土に厚く覆われることが推測された。

本トレーニチでは盛土端部と推測される堆積層、墳丘端部の可能性がある地山傾斜変換点および原位置からずれ落ちたと判断される葺石群などを確認した。以上は厚さ4.0cm～5.0cmの二次堆積層を除去し確認した。二次堆積層には全体に埴輪片・葺石様石材を包含するが、下位ほどに大形片がより多く含まれる傾向があった。

トレーニチ東端から2mの範囲では地山直上部分に最大層厚3.0cmの堅敏な堆積層（14～16層）を確認した。その一部を裁ち切ったが埴輪片その他はいっさい包含していなかつた。

またその表層に葺石様の石材が散発的に噛み込んでいることを確認した。これらの点と層序から同層を墳丘盛土と判断した。盛土末端のレベルは標高6.5.7



第8図 第3トレーニチ 平・断面図 (S=1/60)

m、後円部中心点(K 1 0 杭)から2.8mとなる。

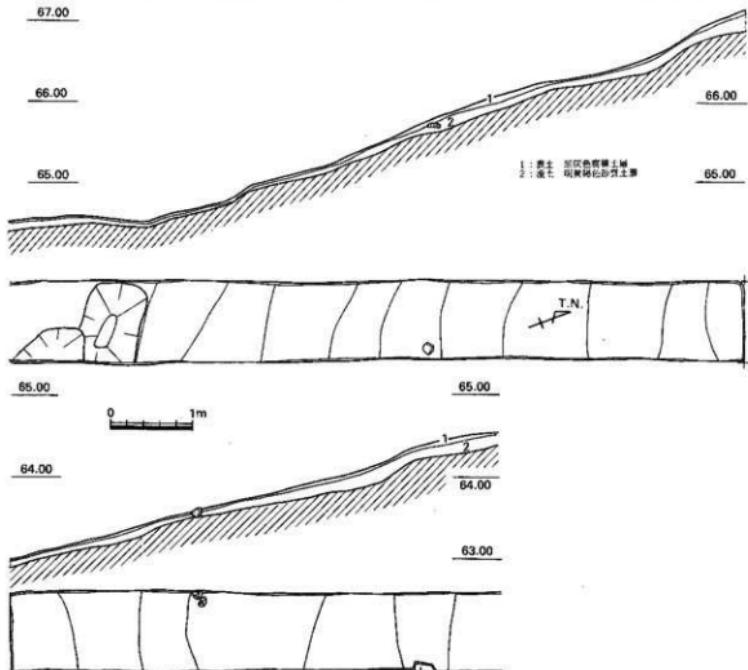
地山上面は上記の盛土部分を含めて、樹痕の影響と思われる不規則な凹凸が多く、トレーニング幅の調査で墳丘構築時の成形痕跡を確定することは容易ではなかったが、東端から3.2mの地点にやや明瞭な傾斜変換点を指摘することができる。その位置は標高6.5m、後円部中心点から2.9.2mとなる。

トレーニング西半部で図示したように葺石様石材の集積を認めた。これらはいずれも地山面より5~10cm程度浮いており下位より埴輪細片も検出しているので、原位置ではあり得ない。しかし集積部分下端に人頭大の大形礫が集中するなど、第2トレーニングで確認した本来的な葺石配列の様態をある程度とめている様に見受けられる。さほど隔たらない位置から地滑り状に葺石がずれ落ちたものと推測する。

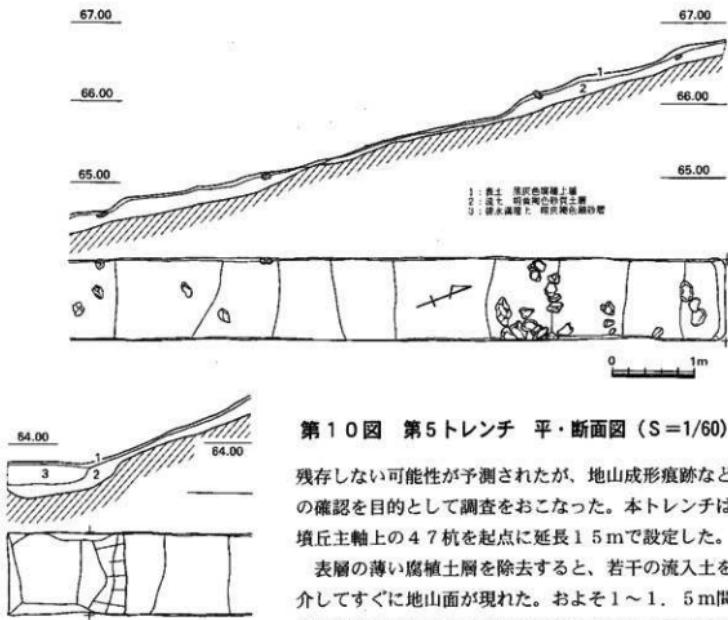
またトレーニング東端から2mの地点で盛土末端部の上面にほぼ相当する位置より、壺形埴輪底部片を検出した。この地点に据えた確証は得られなかったが、埴輪や葺石の配置を検討する上で注意する必要がある。

#### 5. 第4トレーニング(第9図)

後円部南斜面は全体が開墾され、墳頂部まで歓が連続しており、本来の墳丘表層部分は  
67.00



第9図 第4トレーニング 平・断面図 (S=1/60)



第10図 第5トレンチ 平・断面図 ( $S=1/60$ )

残存しない可能性が予測されたが、地山成形痕跡などの確認を目的として調査をおこなった。本トレンチは墳丘主軸上の47杭を起点に延長15mで設定した。

表層の薄い腐植土層を除去すると、若干の流入土を介してすぐに地山面が現れた。およそ1~1.5m間隔で地山面が規則的に階段状に整形された開墾形跡がほぼ全体にわたって見出され、当初の予測どおり葺石

その他の本来的な墳丘外表設備は遺存していないかった。

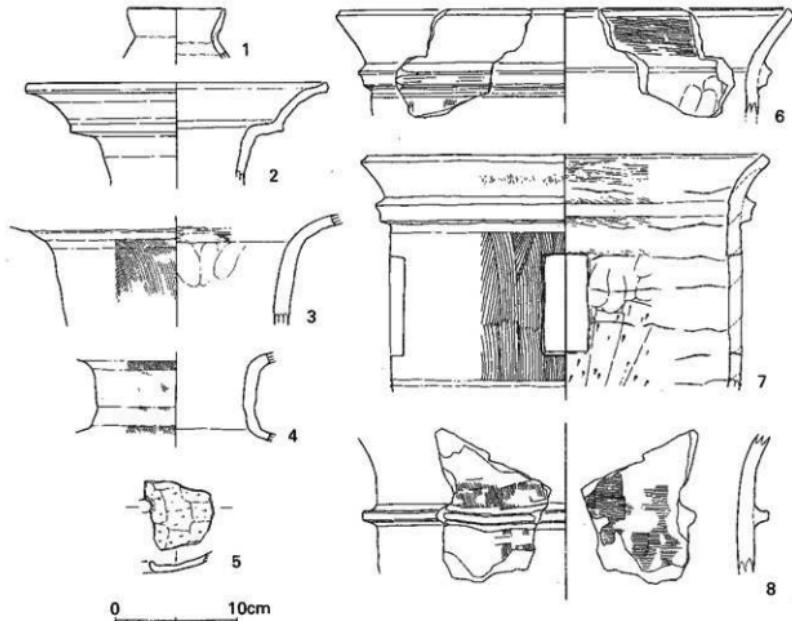
しかしながらトレンチ中程で上記の開墾段とは識別可能な、比較的明瞭な傾斜変換点を検出した。もとより全体の変化状況を考慮すれば厳密な墳端とは言い難いが、それを反映する可能性はさせるものである。変換点北側の地山面の勾配はほぼ $20^{\circ}$ 前後となる。また変換点位置は後円部中心点(K10杭)から37.2m標高64.5m付近である。

なお本トレンチではごく僅かな埴輪細片しか出土していない。

## 6. 第5トレンチ (第10図)

第4トレンチの所見を補足すべく、それと5mの間隔で並行する延長10mの第5トレンチを設定した。この部分では後円部南斜面としては珍しく地表面に葺石様石材が散見されたこともあって、葺石の部分的な遺存をも期待した。

第4トレンチ同様に表層直下の浅い位置で地山面が検出された。予想以上に開墾時の変化が甚だしく、全体的に均されており本来的な墳丘外表設備は全て失われていた。第4トレンチで検出した墳端を反映すると推測した傾斜変換点も本トレンチでは見出すことはできなかった。また葺石様の石材はトレンチ北半部で一定量見出されたが、いずれも地山面から浮いており、二次堆積と推測すべき内容であった。本トレンチでもごく僅かな埴輪細片以外の出土遺物はなかった。



第11図 出土遺物実測図1 (S=1/4)

### 第3節 出土遺物（第11・12図）

第11図-1は小型丸底土器（第2トレンチ）。明橙色で砂粒は多くない。短い口縁部はわずかに内湾して開きが弱い。口頭部横ナデ調整。体部内面には粘土帶接合痕をとどめる。2～5は壺形埴輪である。2は第2トレンチ出土の二重口縁部片。外面に赤色顔料を塗布する。口縁立ち上がり部は外反して長く引き延ばされている。端部は小さく肥厚する。頸部はやや外傾し中程が鈍く膨らむ。内外面全体に横ナデ調整が及ぶ。二重口縁壺としてはやや後出的な形態であろう。3は外傾する頸部から鈍く屈曲して口縁部は強く開く形体となりそうだ。単口縁壺でもよいだろう。4は短く直立する頸部から強く屈曲して口縁部は大きく開き赤色顔料の塗布を認める。外面縦ハケ調整の後に頸部を強く横ナデする。以上のように壺形埴輪口頭部では多様な形体が含まれている。5は第3トレンチ出土の底部片。接合未了のため焼成前穿孔部片のみ掲載した。底部中央に外側から径1.0mm前後の小円孔を穿つ。前期前半段階に本地域で壺形埴輪等の墳墓供献土器に多用される穿孔形態である。鶴尾神社4号墳・猫塚古墳で典型的に観察される方式で、本古墳壺形埴輪にも踏襲されている点は非常に興味深い。なお壺形埴輪の体部片では実用的な中形壺の形態と調整手法がそのまま観察され、製作手法上の省略はいささかも認められない。

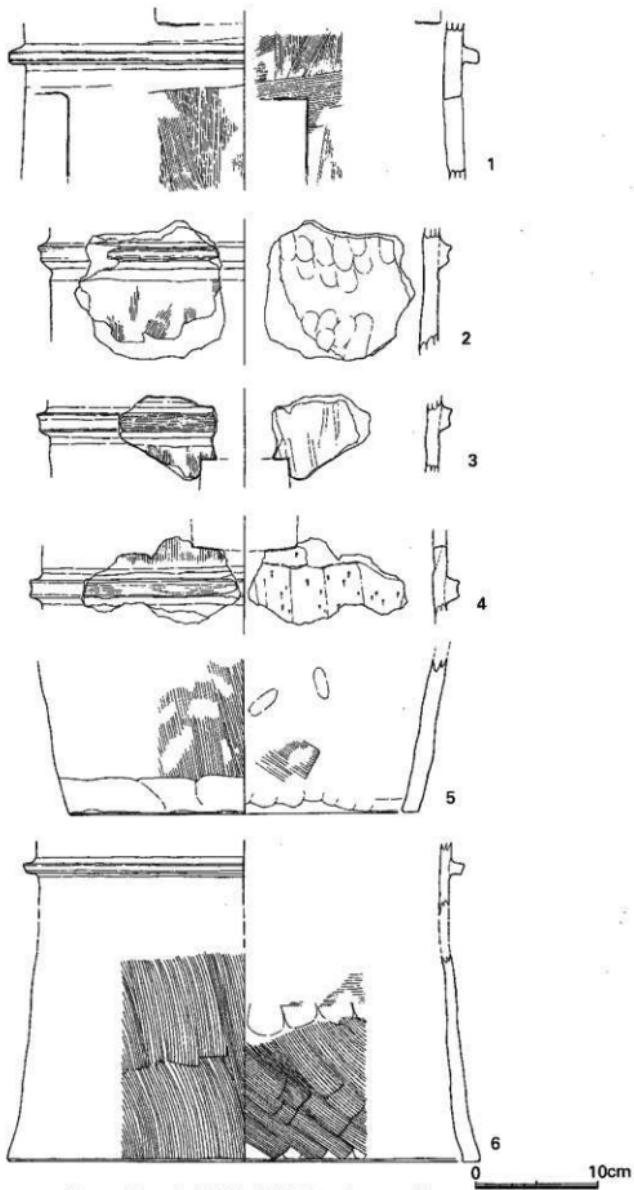
6～8は円筒埴輪口縁部片である。いずれも第2トレンチ出土。6・7ではごく短く外

反する口縁部が特徴である。また7では4方1段の長方形透かし孔がみられる。8は口縁部が多少長く外反も弱いが、中間段に比べ口縁部は短い。

第12図1～4は円筒埴輪中位部片である。1では各段で互い違いに5方の長方形透かし孔が配されている。3・4も配置関係は不詳ながらやはり長方形透かしが観察できる。5・6は底部片である。いずれも自重で底部付近が多少潰れるが、底部調査はおこなっていない。6は第2トレンチで樹立状態で検出した資料である。最下段突帯の高さは一応の目安として図上推定したものである。

いずれも小片のため円筒埴輪の段数などは明らかにしにくいが、底径は30cm強とほぼ揃っている。また詳細は実測図に譲るが、明らかに突帯形状や内外面の調整手法には一定のバリエイションが認められる。色調や砂粒混和状況も一様ではないが、それらと形態上のバリエイションとの対応関係についてはまだ充分な検討を行えていない。

以上・今次調査で採集した代表的な遺物を図示・説明した。円筒埴輪・壺形埴輪と少数の土師器小型器種が存在する。朝顔形円筒埴輪や形象埴輪、更に前回調査で採集されたような小型土製品は確認できていない。現時点での確認できるこのような組成は石清尾山姫塚古墳・同石船古墳と基本的に共通しそうだ。また円筒埴輪の形状、特に短口縁部形態や多方透かし孔配置は、形象埴輪を伴う段階の岩崎山4号墳、中間西井坪遺跡、今岡古墳よりも古い様相といえるだろう。



第12図 出土遺物実測図2 (S=1/4)





図版1 第5トレンチ後円部南(南から)



図版2 第3トレンチ：後円部西(西から)

写真1



図版3 第1トレンチ落ち込み部埴輪出土状態(北から)



図版4 第1トレンチ落ち込み(西から)



図版5 第1トレンチ落ち込み(北から)



図版6 第6トレンチ(西から)



図版7 第2トレンチ葛石(西から)



図版8 第2トレンチ埴輪樹立状態(南から)



図版9 第2トレンチ葛石と埴輪(南から)



図版10 第4トレンチ傾斜交換点(東から)

写真2

## 第5章 平成14年度快天山古墳確認調査概要

調査期間 平成14年4月2日～平成15年3月25日  
調査面積 142m<sup>2</sup>

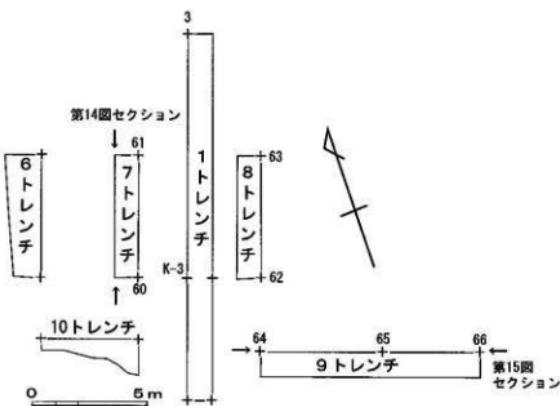
### 第1節 各調査区の概要

#### 1. 7トレンチ：前方部前端（第13・14図）

設定の意図：先年の調査で前方部前端ラインを確認するために第1トレンチと第6トレンチを設定した。これらのトレンチから墳端位置について一定の推測をおこなったが、擾乱が甚だしく確証を得るには至らなかった。そのため前端ラインの再確認を目的として設定した調査区である。

設定位置：昨夏に設定した墳丘主軸上の1トレンチと並行して、西側で農道に接する6トレンチの中間、K3杭西3mを南西隅とする南北延長5m、幅1mのトレンチである。

成果：前方部前端を画すると見られる、主軸に直交して東西に伸びる浅い落ち込みを検出した。落ち込みは幅3.4m深さ0.4mを測り、底面の標高は73.1m前後となる。落ち込みの南肩はトレンチ南端から1.2mに位置し、ほぼ平坦な底面は幅2.4m程と

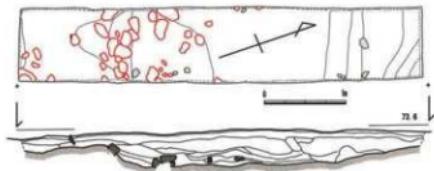


第13図 前方部前面調査区配置図

なる。落ち込みの北肩に比べ、南肩つまり墳丘側の勾配が僅かにきつい。南肩から底面にかけて地山面直上に暗褐色～黒褐色のシルト・細砂が堆積し、北に向けて次第に薄くなり落ち込み中央付近で途切れる。同層が広がるおよそ幅1.5m程の範囲、とくにその南肩寄りでは掌大～小兒頭大の亜円礫が比較的まとまってみられ、その間に埴輪片も多いが、

須恵器などより新しい時期の遺物は含まない。こうした点から、この落ち込みは快天山古墳前方部前端を区画する溝と考える。南肩付近に包含される礫は葺石材であろうが、それらの間には明らかに埴輪片を噛み込んでおり、また規則的な配列も見出せないので、いずれも上方から転落したものと推測する。この理解が正しければ葺石は全面の区画溝基底まで葺き下ろしていないことになる。また原位置ではないがある程度の埴輪片が出土していることから前方部前端部分に埴輪列が巡る可能性は高いであろう。

さて、この区画溝が褐色砂などではほぼ埋没した後に中央から北半部にかけてあらためて幅1m弱の東西方向の掘り込みが設けられ、この部分には須恵器などより新しい時期の遺物ごく少數が含まれる。1950年調査時の平面図に記された前方部前面を横切る小径ないしはその前身の可能性がある。



第14図 7トレンチ平・断面図 ( $S=1/60$ )

出土した埴輪はいずれも円筒埴輪で大部分が細片化し全形を窺えるものはないが、破片各部の形状や製作技法などは快天山古墳他地点出土埴輪と異なるところはない。また壺型埴輪・土師器類と判断できる資料は本調査区では見出せない。

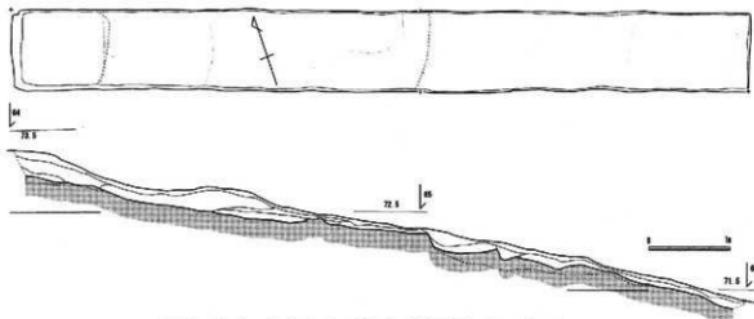
## 2. 8トレンチ：前方部前端（第13図）

**設定の意図：**7トレンチと同様に前方部前端ラインの追求とする調査区である。  
**設定位置：**昨夏に設定した墳丘主軸上の1トレンチと並行に、1mの間隔を空けて東側に設定した。これより東寄りでは地形的に緩やかに東に下り始めかつ畠地の造成痕跡が見て取れるので、墳丘前端線が既に消失している可能性が高いと考え、あえて1トレンチに近接した地点を選んだ。K3杭東2mを南西隅として南北延長5m幅1mの調査区となる。  
**成果：**昨年の1トレンチと同様に一面に擾乱が重複する。錯綜する擾乱部分の間に先行する浅い落ち込みが存在するようにも見えるが確定的ではない。トレンチ中央の幅2m余りの範囲では、南北に比べ全体に地山面が不規則に窪む。この上部の堆積層の観察で断定することは難しいが、底面は凸凹が著しくこれ自体擾乱の累積である可能性は高い。しかしこの窪みでは周囲より多めに埴輪小片が出土していることは注意しておきたい。度重なる擾乱によって旧状の把握が困難であるが7トレンチから続く前端区画溝の残欠か、少なくともそれがこの地点まで連続することを間接的に反映する可能性がある。こうした状況も昨年度調査の1トレンチと全く同じである。なお本トレンチ中央部の擾乱もしくは区画溝残欠の可能性がある窪み底面は最深部でも標高73.2mを測り、7トレンチ区画溝底面よりわずかに高い。この典も区画溝による前方部前面の遮断が、相当に簡略的であることを示唆するであろう。若干の埴輪片と破碎された葺石材が出土したが、形状を詳細に観察できる資料はない。

### 3. 9トレンチ：前方部前面付近の東側面（第13・15図）

設定の意図：1・6～8トレンチで前方部前端ラインを確認したことを承けて、前端寄りの前方部側面遺存状況を確認することを目的とした。前方部西面は農道によって削平されるか残土を積み上げているため、とりあえず前方部東面の残存状況の確認を先行した。この部分も標高71m以下は農道と鶴舎の設置で大きく削られるが、比較的旧状をとどめると見られた頂部寄りの高い位置で、側面施設の残存、および前面区画溝との関係追求を期待した。

設定位置：8トレンチ南端から南2m、1トレンチから東2mを北西隅としてそこから両トレンチと直交して東に延長9m幅1mで設定した。この地点では前方部頂の平坦面東縁から緩やかに下降する東斜面部に相当する。トレンチの東端は斜面中位を巡る農道にほぼ接する。



第15図 9トレンチ平・断面図 (S=1/60)

成果：地表面観察でも畑地区画と見られる低い段が確認できたが、表土下の深い位置で階段状に整えられた地山面を検出し本地点は比較的近年に畑地に開墾されていることが判明したが、その形状から大幅な地形変化は蒙っていないことが推測される。遺物は遊離状態の埴輪片少數が出土したにとどまる。

墳丘測量図に照らせば明瞭であるが、7トレンチ他の所見から推測される前方部前端と、11トレンチ他で確認した前方部東側面墳裾ラインを結べば、本トレンチ設定位置が前方部墳丘の西側面に該当することは明らかであるが、この部分で前方部の形状を直接的に反映する材料は得られなかった。しかしこの地点で検出した地山面レベルが予想以上に高く、かつその勾配が緩やかであったこと、つまり東にやや張り出した形状であることを確認できた点は、前方部前端付近の形態復元に一定の示唆を与える。11～13トレンチで確認したくびれ部より前方部東側面の形態とこの点を整合的に捉ようとすれば、一つは、前方

部前半少なくとも東側面は外に強く開く、いわゆる櫛形を呈する可能性を示すことになる。あるいは逆に東側面の加工が前端付近では大幅に省略されて自然地形の張り出しをそのまま残していると推測することも可能であろう。今回の調査成果からはいずれとも決しがたいが、少なくとも前方部前端がシンメトリーな柄錐形を呈する可能性は排除できるであろう。

#### 4. 10 トレンチ：前方部前面付近頂部（第13図）

**設定の意図：**この地点は農道の東面に接して前方部頂の高まりを不規則に抉った部分の北面にあたる。大幅な改変が予測されたが、7トレンチの成果を承けて前端部付近頂部から西側面に至る部分の遺存状況を確認するために設定した。

**設定位置：**7トレンチの南2m、1トレンチの西2mを起点に西に東西延長4m、最大幅1.5mで設定した。

**成果：**トレンチ東半部では表土直下にごく薄い間層を介して地山面を検出したが、西寄り1.5m部分では地山面が一段下がり、その上部には攪拌された花崗岩ばい乱土などがきつく突き固められブロック上に堆積する。地山上面で鉄釘が出土したことなどから地山面の削り込みとブロック土の堆積は明らかに近年の所産である。位置関係からみて6トレンチ前面に及んだ攪乱部と後述する14トレンチ上部の客土層に連続するものである。したがって残念ながら、農道周辺つまり前方部前半部の頂部西縁へ上半部は比較的近年の攪乱によって見た目以上に損なわれていることが推測される。

#### 5. 11 トレンチ：前方部東面（第16・17・18・19図）

**設定の意図：**前方部東斜面の墳丘構造の確認を目的としてほぼ前方部頂から墳丘外に向けて設定した。立木により1mほど設置地点をずらしたが、墳丘中軸を挟んで、先年度調査で葺石・埴輪列を検出した2トレンチを折り返した位置にあたる。

**設定位置：**農道切断部の南約10mで前方部東斜面標の方形壇の南側に接する位置にあたる。墳丘主軸ラインの東5m、K5杭南3mを起点に幅1mで主軸ラインと直交して設定。前方部墳丘頂部平坦面東縁から墳端傾斜変換点に至る東西延長1.5m幅1mの調査区である。なお調査区東端付近では、後述するように検出した平安後期火葬墓を確認するために若干調査区を拡張した。また夏期調査では13トレンチの設定にあたり本トレンチを再掘削して一部を拡張した。そのため調査面積は全体で17.4m<sup>2</sup>となる。

**成果：**当初予想したほどに墳丘外表設備の遺存状態は良好ではなかったが、葺石残部や埴輪樹立状況から、墳丘斜面に二段のテラスを設けていること、つまりこの部分が見かけ上二段に整えられていることが確認できた。なおこの部分では墳丘は頂部に至るまで大部分を地山削り出しで整形し、若干の置き土を盛ってテラス部分を整えている。ただし置き土部分は大部分崩壊し、葺石も基底石の一部が残るにすぎなかった。

#### 第一段（墳端）石列

標高6.7.4m、主軸から1.5.9mの位置で墳丘規定を両する小段を検出した。掌大もしくは小児頭大のやや扁平な円礎を立て、あるいは2~3段で横積みする。積み方は揃

わざ使用礫のサイズに合わせて任意に積み上げて高さ 20 cm 内外の低い段をこしらえる。段基底ラインは厳密には墳丘主軸に並行せず、南に開き気味に延びている。なお 12 トレンチ拡張区南端付近で石列が屈折している。肝心の部分で 1 ~ 2 石が脱落しているが、後で述べる 12 トレンチの所見と合わせて、この部分がくびれ部に相当すると見られる。ただし屈折角度は非常に緩い。

石組は地表面を浅く削って据えられ、裏面に若干の置き土を詰める。これより外方は緩やかに自然地形に連なり古墳築造に伴う整形痕跡は認められない。この石列を墳丘基底とすれば本地点で前方部墳丘高は 5 m となる。この小段の上面が下段テラスとなるが、その勾配から推測して本来的には上部にもう 1 ~ 2 段配されていたものと見られる。

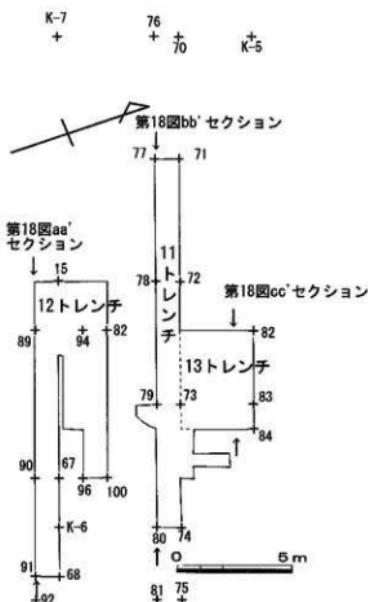
石列外方では葺石材と共に比較的多量の円筒埴輪・壺形埴輪片が出土したが、いずれも上方からの転落と見られ、石列にそれらを立て並べた形跡は乏しい。

#### 第二段葺石（葺石）

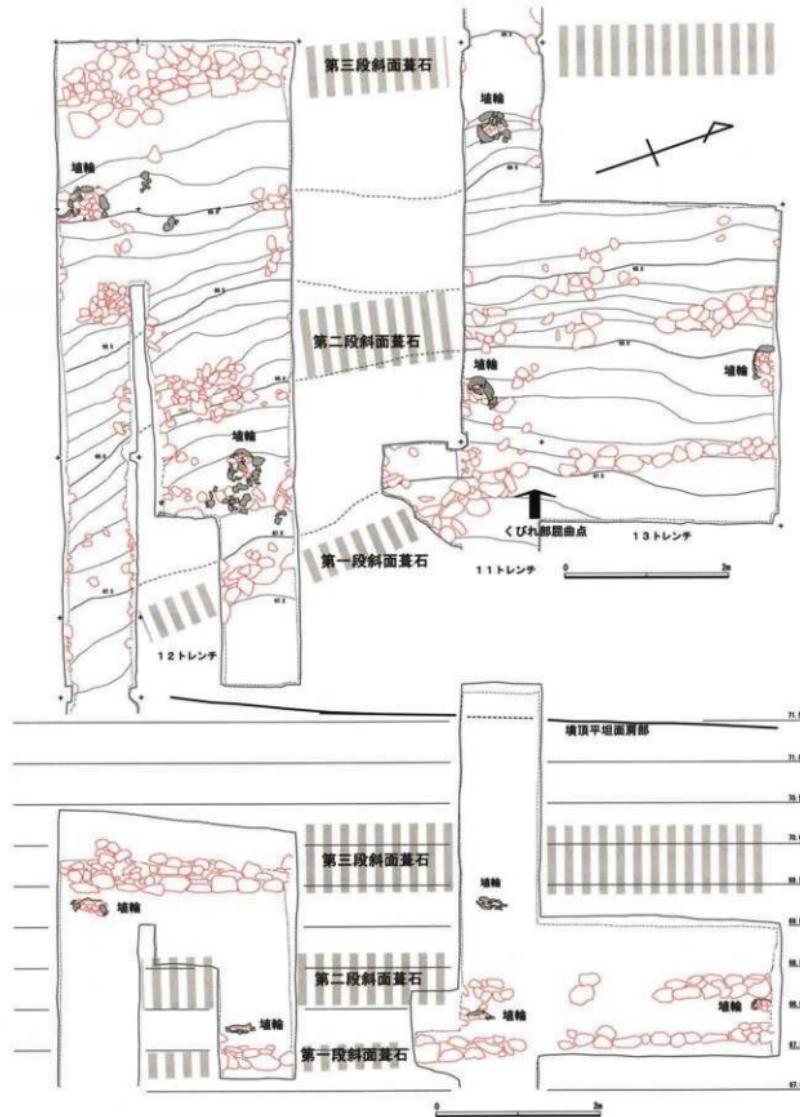
標高 6.8. 1 m、主軸から 13.8 m の位置で第二段斜面葺石の基底残部を検出した。墳丘第一段との比高 0.7 m、前方部頂との比高は 4.3 m となる。拳大かそれよりも小さな円礫を使用して墳丘表層の若干の置き土に差し込むようにして据えるが特に面を描えるわけでもなくやや乱雑な配置となる。第二段斜面は後述する上段テラスとの関係から比高 1.2 m、斜面長 2.5 m 前後と推測されるが、やはり地山を削り出して若干の置き土で整えたものと見られる。なお墳丘西面の 2 トレンチで検出した葺石下端が標高 6.7.9 m、主軸から 14.8 m を測り、東面の第二段斜面葺石とほぼ対応する関係にある。

#### 下段テラス

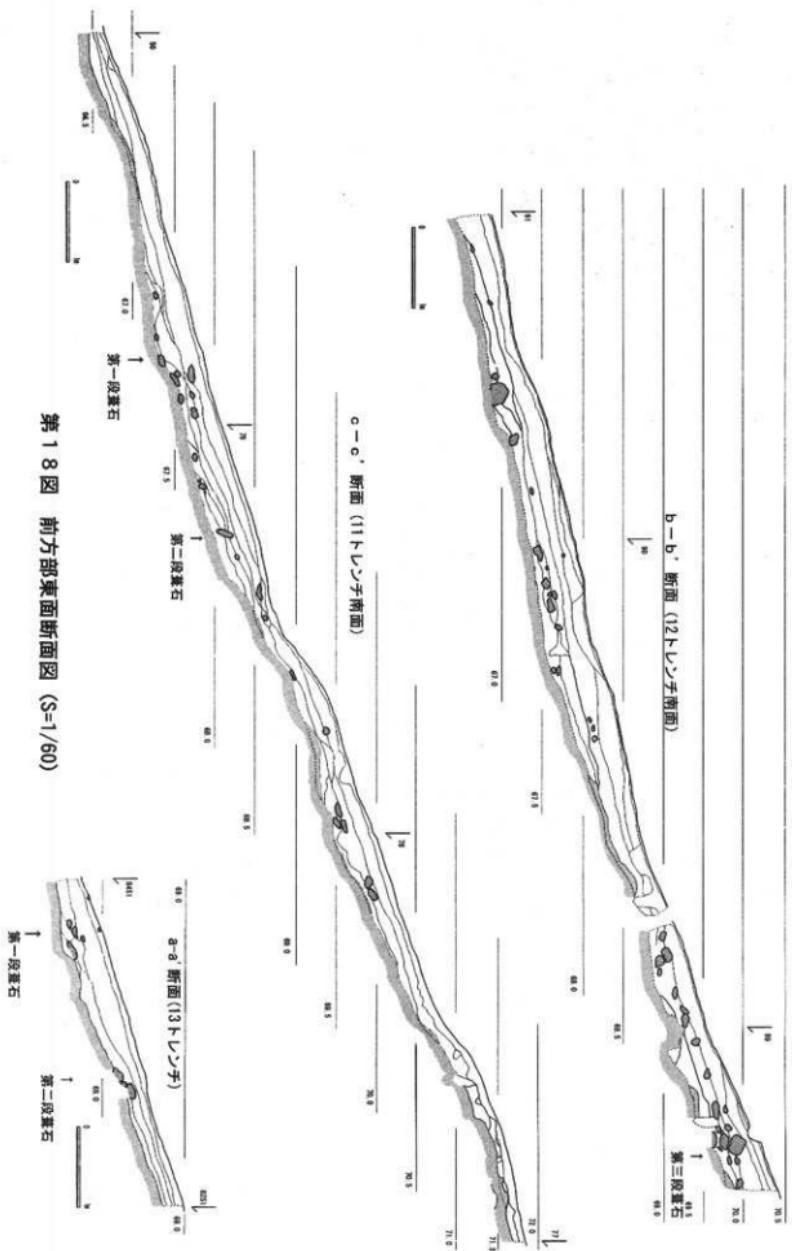
第一段・第二段斜面間の標高 6.7.6 ~ 6.8.1 m 比高 0.5 m 弱の緩斜面部分が下段テラスとなる。地山削り出し整形の上、うすい置き土で整えるが、上面は流出していると見られる。テラス面のやや奥寄りで第二段葺石基底から 0.4 m 離れて円筒埴輪 1 基の樹立を確認した。テラス上面の置き土に基底部を埋め込み内部に小礫を詰めて安定を図っている。



第 16 図 前方部東面調査区配置図



第17図 前方部東面調査区（11～13トレンチ）平・立面図 (S=1/60)



第18図 前方部東面断面図 ( $S=1/60$ )

### 上段テラス

地山面の傾斜変化と、半ばずり落ちた状態で検出した円筒埴輪基底部の存在から第一段テラス同様に若干の置き土で整形したテラス面の存在を推定したが、現状ではほぼ流出している。標高6.9.3~4m前後、主軸ラインから1.1m前後をはかる。規模・形状の詳細は不明である。円筒埴輪はテラス上面の置き土ごと第二段斜面に半ばずれ込んだ状態で検出した。やはり置き土に基底部を埋め込み内部に小礫を充填したものと見られる。

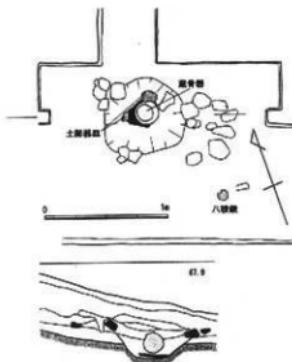
### 第三段斜面

上段テラスから墳頂までの間が第三段斜面に相当する。比高3m前後となる。上段テラスに転落した石材の存在から葺石施行は推定してよいだろうが、原位置にとどまるものではなく、どの程度充実していたかは不詳である。

### 火葬墓（第19図）

調査開始直後、トレンチ東部（東端から約2.5m）の表土直下で八稜鏡一面が裏返しで出土した。墳端の第一段石列の外約2mの地点で墳丘から転落した埴輪・石材が多く含まれる層序の上面付近であった。周囲を精査したが、土坑など八稜鏡が何らかの遺構に伴う徵証は見いだせず、全く遊離した状態であることが推測された。

その後、八稜鏡出土地点の北西0.5m付近で半ば1.1トレンチ南壁にかかるように須恵器壺を藏骨器とする火葬墓を検出した。墳丘東裾野の方形壇の南側面に近接する位置である。この周辺を拡張して墓壙の検出を進めた。墓壙は墳裾に堆積した流入土を切り込んで穿たれ平面形は東西0.65m南北0.6mのいびつな梢円形で、深さ0.2mのボウル状を呈する。底面中央に安山岩板石を据え、その上に口頭部を打ち欠いた須恵器壺を倒置して、掘り込み内に炭細粒を充填する。藏骨器内には碎いた焼骨を詰める。少なくとも歯・頭骨・指骨や大型の四肢骨骨幹部が認められる。調査範囲では周囲に被熱痕跡や骨片の散乱はみられない。また掘り込み内の中位に土師器杯4枚を伏せて配列する。逆位で据えられた須恵器底部は土坑上面から突き出す。これを覆うように若干の炭片を交える層が掘り込みより一回り大きく堆積する。また掘り込みの周囲には拳大の円礫が配されるようにも見えるが、もとより墳裾で転落石材が多く確証はつかめないがこれらの点から墓壙上部に若干のマウンドが存在した可能性は高いであろう。本火葬墓の年代は遺物の項で後述するように、藏骨器と共に伴する土師器杯の型式から平安後期11世紀前半とと考えられる。



第19図 火葬墓平・断面図(11トレンチ)

### 6. 12トレンチ（第16・17・19図）

設定の意図：11トレンチで検出した二重の葺石・石列が後円部に向けてどのように展開するのかを確認するためにくびれ部寄りの部分に調査区を設定した。

**設定位置：**当初は 11 レンチの北 4 m、主軸の東 12 m を起点に幅 1 m 延長 10 m で東西方向に設定したが、遺存状況が思わしくなく、11・13 レンチからの連続を理解しにくかったため、木立を避けつつ南・西方向に順次拡張して、延長最大 12 m 幅最大 3 m 調査面積 26 m<sup>2</sup> となった。

**成果：**11 レンチ同様に上下二段の狭いテラスを挟んで三段に整えられた墳丘斜面を検出した。第二段斜面葺石はほとんど流出していたが、第一・第三段斜面では比較的旧状を保っていた。この地点では第二・第三段斜面は墳丘主軸とほぼ平行して前方部から直線的に延びるが、墳丘基底を画する第一段は 11 レンチ部分から緩く弧を描いて連続することが確認された。また上下二段のテラスでは各々円筒埴輪の樹立を検出した。

#### 第一段石列

12 レンチ拡張部東端で 11 レンチから連続する第1段石列を検出した。基底に人頭大以上の大型の石材を置き、その上には小砾を 1~3 段積む。石の据え方は不揃いだが 30 cm ほどの高さを保つ。やはり地表面を多少削り込んで石材を据え裏面に置き土充當するようだ。11 レンチ部分の基底石よりも大型の石材を使用しているようだが、狭い範囲での検出のため、そのまま後円部と前方部の差異とは言い切れない。緩やかに弧を描きながら南東一北西に延び、拡張区南壁で主軸との水平距離は 1.8 m となる。基底レベルは標高 6.7. 2~6.7. 3 m で北に向かってわずかに上がる。11 レンチ拡張部と 1.5 m の間隔が開くがこの間で基底レベルは 1.0~2.0 cm ほど低くなる。

#### 第二段斜面・葺石

後述する上下二段のテラス面の間で、散漫に葺石材が残存する部分が墳丘第二段斜面であるが、葺石はほとんど原位置をとどめず脱落している。またこの部分では第一・第三段斜面のように葺石基底に大型石材を据えた形跡はない。検出した葺石材はいずれも拳人の小振りなものばかりである。墳丘表層もかなり流出しているため正確な規模は復元できないが、上下のテラス面残部から推し量て第二段斜面は標高 6.7. 9~6.9 m、主軸から 1.2. 5~1.5 m のあたりとなるだろう。

#### 第三段斜面・葺石

本レンチでは第二段斜面が大部分流出していたのとは対照的に第三段斜面葺石はかなり良好な状態で検出できた。人頭大以上のやや横長で枕状の亞円礫を横向きに並べて基底とし、それより上には拳大~小児頭大のやや小振りな礫を斜めに差し込むように積み上げる。幅最大 1.2 m 高さ 50 cm ほど、およそ 5~6 段分を検出している。基底は標高 6.9. 4 m を測り、前方部頂（K7付近）との比高 3.4 m となる。葺石基底ラインは厳密には墳丘主軸方向よりわずかに南南東一北北西に斜行し、主軸からの水平距離は 1.1. 2~1.0. 6 m となる。

#### 下段テラス

上述のように第二段斜面基底が確定的ではないのでテラス幅の計測は困難だが、先の推測に照らせば、幅 2 m 弱程度と見られる。原状では 0.5 m 内外の比高をもった緩斜面であるが本来的には地山整形の後に若干の置き土でテラス面を整えたものと見られる。基底部を置き土に埋めて据えた円筒埴輪 1 基を検出した。やはり基底内部に小円礫を詰めて安定を図っている。これに隣接して壺形埴輪の口頭部および体部片がまとまって検出された。

一部は上段テラスからの転落片と見られるが、下段テラスで円筒埴輪と共に壺形埴輪を併用した可能性が高い。

#### 上段テラス

やはり第二段斜面の流出が著しいため規模の推測は難しいが、第三段斜面葺石基底と樹立埴輪基部の検出によって存在が推測できる。およそ幅1.5~2m程度と復元できる。円筒埴輪の樹立状況からテラス面は地山整形の上若干の置き土を盛って整えられたと推測される。円筒埴輪の樹立状況は本トレンチ下段テラスや11トレンチの状況と異ならない。円筒埴輪片に伴って一定の壺形埴輪片を確認している点も下段テラスと同様である。

#### 7. 13トレンチ（第16・17・19図）

設定の意図：11・12トレンチの成果を承けて、11・12トレンチで検出した石列・葺石が前方部方向にどのように展開するか確認するために設定した調査区である。11トレンチの所見から、この部分では第三段斜面の良好な遺存を期待できないと判断して第一段～第二段斜面の追求を主目的とした。

設定位置：11トレンチの南側に連続して主軸から東1.2mを起点に東西延長4m幅3mで前方部墳丘東側面下部に調査区を設けた。

成果：本調査区では隣接地点よりは多少良好な状態で墳丘第一段・第二段斜面葺石・石列と下段テラスを確認している。

#### 第一段斜面

13トレンチの南端で一部が脱落しているが、11トレンチ拡張部までほぼ連続して、墳端を画する第一段斜面石列を検出した。全体で延長約4.5mに達する。基底石としてやや大型の亜円礫を多くは横積みするが、北端部では拳大の小振りな礫で代用している。現状では部分的に2段、小型礫を使用した部分では3段分の高さ20cm内外が残る。13トレンチ範囲では基底レベルは標高6.7.55~6.7.6mとほぼ水平に延びる。主軸からの水平距離は1.5.2~4mでほぼ並行するが厳密にはごくわずかだけ西に振れる。もっとも基底ラインは必ずしも直線的ではなく中途にわずかな曲折が見られるので、このズレを積極的に評価することは難しい。

肝心な部分が脱落しているが、基底ラインを11・12トレンチから追いかけると、どうやら本トレンチ南端以南では緩く弧を描いて続いているが、これより北ではほぼ直線的に延び、ちょうど脱落部位あたりで緩く屈折するものと見られる。屈折角度はおよそ150°とひどく鈍いがこの部分を墳端くびれ部に相当する箇所と推測しておく。

#### 第二段斜面

13トレンチ北端から約1.5mでは比較的良好な状態で第二段葺石基底部を検出できた。本トレンチ南半部では流出が著しく、若干の石材が遺存するものの明瞭な基底ラインを連續的に追うことは難しい。基底レベルは6.8.1mでほぼ揃い、11トレンチの所見と合致する。前方部頂との比高は4.3mとなる。主軸から水平距離で1.3.5~6mで主軸ラインとはほぼ並行するが、厳密にはやや北北西に振れるようにも見える。検出範囲では基底に人頭大のやや大振りな亜円礫の横に据え、その上にはやや小振りの礫を多く横積

みするが、この地点でもさほど整ったものではない。葺石は地山削り出し面を薄く被覆する盛土に差し込まれるよう配されたか、あるいは石積みと並行して裏面に土砂を充填したものと推測できる。他の地点と同様である。ただし 1.1・1.2 トレンチでは第二斜面葺石基底にこのような大型礫の使用は認められない。このように葺石施行は地点によって非常にむらがある。確實に原位置をとどめる葺石は基底から 2~3 段分高さ 3.0 cm 程度にすぎないが、少なくとも標高 6.8. 6 m、主軸から 1.2. 5 m までの幅 1 m 比高 0.5 m の範囲には散漫に拳大~小兒頭大の亜円礫が認められる。これらの多くは多少滑落したものと推測するが、第二段斜面の葺石をある程度は反映するであろう。

#### 下段テラス

1.2 トレンチでは他と違い第一・二段斜面の石列・葺石が比較的残るのでテラス幅の推測が可能である。現状で幅 1.5 m 弱、比高 0.3 m ほどの緩斜面をなすが、やはり表層は多少流出していると思われる。トレンチ北壁に接してテラス奥寄り部分（第二段基底石から 0.3 m）で樹立状態の円筒埴輪基底部を検出した。他地点と同様に内に小礫を詰め基底部を置き土に埋め込む。

下段テラス面から第 1 段石列外方にかけて円筒埴輪・壺形埴輪片多数を検出したが、第一段石列の外側に埴輪を樹立した形跡はない。

#### 8.3 トレンチ拡張部（第 2 図）

設定の意図：後円部墳丘の構造と外表設備の状態を確認するために、比較的後世の畠地開墾の影響が少ないと見られた後円部西斜面で設定した調査区である。

設定位置：後円部横断軸に沿って、昨年度に設定した 3 トレンチ東端から墳頂平坦面西縁までの間（3.2 杉~1.1.2 杉間）に、東西延長 1.5 m 幅 2 m で 3 トレンチ拡張区を設定した。

成果：残念ながら葺石やテラス面などの墳丘外表施設はほぼ完全に流出していたが、裁ち割り調査によって墳丘上半部が非常に堅密に突き固められた盛土により形作られていることが確認できた。

現況でも 3 トレンチ拡張区を設定した後円部西斜面は部分的な墳丘崩壊もしくは後世の小規模な改変によると見られる凸凹が著しいが、この状況はそのまま墳丘遺存状態に反映している。トレンチ東半部つまり墳丘上半部では表層腐食土層の直下で堅密な盛土面が検出できたが、墳丘下半では表土下で厚い褐色細砂礫の水性堆積層が認められた。盛土層はトレンチ東端から 10.8m（中心点から 17.8m）まで標高 7.0 m 以上で確認できる。したがって後円部頂に向かって多少地山面が隆起することを見込んでも後円部墳丘では 4 m 内外の盛土厚を想定することができるだろう。現状ではこの地点で盛土末端が後世の改変もしくは墳丘の部分的な崩壊によって断ち切られているように見えるが、本来的には今少しある盛土部分が広がる可能性がある。これ以下の部分は本来的に地山整形により墳丘を整えているが、現状では上記したように局部的な抉れが連続し、その具体的な様相を復元することは困難だ。またトレンチ西半部で流土下層からややまとまって転落葺石材や円筒埴輪片を検出したが、その量は前方部各トレンチに比べ多くない。確實に原位置をとどめるか否かは全くなく後円部墳丘の外表設備に関する知見は得られなかった。

さて確認した盛土層の大部分では、a 炭片を多く混入する砂礫混じり黒灰色粘土、b 明橙色粘土、c 多量の砂礫を混じえる明褐色粘土の3者を薄く互層状に積み上げている。部分的に地山の花崗岩バイ乱土をそのまま積み上げる箇所も見られるが、ごく局部的でしかない。盛土の各単位は短くあまり整然としていないが、いずれも非常に堅密に突き固めており寺院基壇などのいわゆる版築土に硬度の点ではひけを取らない。こうした点で後円部墳丘上半部を構成する盛土は前方部の墳丘テラス面などの表層にしかれた置き度とは全く異なっている。

なお、昨年度の3トレンチ東端において地山直上で盛土層の可能性がある層序の存在を指摘したが、今回の調査でその部分を地山層の風化部分と理解することが適当と判断できたので訂正しておきたい。

#### 9. 1 4 トレンチ（第2図）

設定の意図：農道切断部以北の前方部前半部分は改変が著しく現状では墳丘形態の観察は困難である。特に墳丘東側面の基底部付近は鶏舎設置時に完全に削り込まれて残存していない。西側面も分厚く建設残土を積み上げ現況で観察は困難であるが、その下部に墳丘基底部が残存することを期待して、前方部前半部の墳丘形態および外表設備を確認するために設定した調査区である。

設定位置：見かけ上のくびれ部と7トレンチで確認した前方部前端区画溝との中間地点にはほぼ相当する主軸上に設定した118杭の西9mを南東隅として幅2m東西延長12mの調査区を設定した。昨年度設定した2トレンチと18mの間隔で並行し、トレンチ北壁は前方部前端区画溝から約12.5m南に位置することになる。調査区設置に先立ち、建設重機で農道部分を含めて墳丘西斜面に厚く盛られた建設残土・客土を4m幅で完全にはぎ取り旧表土層を露出させたが、残念ながら前方部前半部ではおおよそ標高6.9.5m以上の墳丘上半部の西半が一端完全に削平されていることがこの段階で判明した。

成果：したがってこの地点で旧状をとどめているのは標高6.9.5m以下の墳丘基底部付近に限られるわけであるが、幸い墳丘第一段石列と第二段斜面葺石基底部、およびその間の下段テラス面を確認することができた。

#### 第一段石列

主軸から水平距離16.4mではほぼ並行して第一段石列を検出した。トレンチ南端から1.5mほどが遺存する。基底レベルは6.8.0~6.8.1mとわずかに北に向かって迫り上がる。基底には幅50cm大の大型石材を横に並べ部分的にその上部に拳大の礫を重ね20~30cm大の段を作れる。

#### 第二段斜面葺石

主軸から水平距離14.4~5mではほぼ並行して第二段斜面葺石基底列を検出した。トレンチ南端から約1.2mほど遺存し基底レベルは6.8.6.5~6.8.7.5mと、第一段石列と同程度にわずかに北に向かって迫り上がる。基底石は第一段石列よりやや小振りな人頭大の大型石材を概ね横向きに並べ、その上には小児頭大~拳大の礫を斜めに差し込むように重ねる。最大5段分幅60cmほどが残存する。なおこの地点では第一段石列を含め

使用石材は安山岩自然礫ばかりであった。

#### 下段テラス

第一段石列と第二段斜面葺石の間、幅1.5m比高0.4mほどの緩斜面が下段テラスとなる。他地点で確認した下段テラスに比べかなり狭くなっている。やはり地山整形の後に若干の置き土で上面を整えたものと見られる。トレーナー北半で第二段葺石基底と20cmの間隔で据えられた円筒埴輪基底部を検出した。他地点のテラス面に樹立された円筒埴輪とは異なり、地山面を浅く掘り深めて埴輪基底を据え付けている。また他地点のように内部に小砾を詰めていない点も相違している。

円筒埴輪片の他、壺形埴輪体部片などが出土しているが量は多くない。

### 第2節 出土遺物の概要

#### 1. 快天山古墳関係遺物（第20～22図）

今年度調査で確認した快天山古墳に直接伴う遺物には円筒埴輪・壺形埴輪および若干の土器類小形器種がある。昨年度の調査所見で存在を否定的に捉えた朝顔形円筒埴輪については後述するように判断を保留する必要が生じてきた。ただし器財形埴輪は今回も確認していない。

#### 円筒埴輪（第20・21図）

##### （第20図1）

最上段（口縁部）から最上段突帶片。口径28cmを測る。淡橙色を呈し1～2mm大の比較的細かい石英・長石粒を含む。長さ約6cmのやや短い口縁部は鈍く外反して端部内面をわずかにつまむ。やや低めの突帶は上端を強くつまみ出す。外面一次タテハケ調整の後、口縁部は横ナデで仕上げる。内面は第二段相当部上端付近まで横ケズリ。最上段部はヨコハケ調整の後、軽く横ナデを加えるが、粘土帶接合痕を顯著に残す。

##### （第20図2）

突帶は剥落するが最上段（口縁部）から第二段に至る破片。口径39cmを測る。明橙色を呈し、口縁部外面に黒斑がある。約1/6周を残す。3～5mm大の粗粒の石英・長石粒の他、細かな赤色粒含む。突帶剥落位置から測って最上段幅は約9cmと本墳出土資料の中では長めの部類といえる。鈍く外反して端部内面を鈍く摘む。突帶貼付位置には約1.2cmの間隔で浅い方形刺突2ヶ所が確認できる。外面は一次タテハケ調整後、最上段には丁寧な横ナデを加える。内面は横方向の指ナデの後に、最上段部分には細かなヨコハケ調整を施す。

##### （第20図3）

最上段突帶部片。突帶部分で径38cmを測る。黄白色を呈し2～4mm大の石英・長石粒を比較的多めに含む。突帶は単純な台形を呈し、下端の貼付がやや甘い。第二段では突帶から2cm離れて方形透かしが穿たれる。外面一次タテハケ後、最上段は丁寧な横ナデ調整を加える。内面は第二段相当部分まで横ケズリ、最上段はヨコハケで仕上げる。

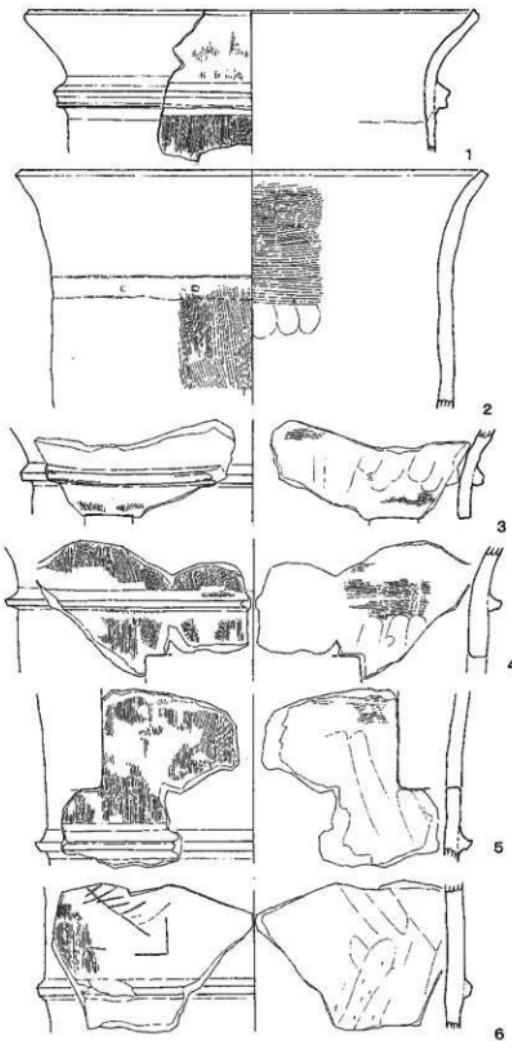
##### （第20図4）

最上段から第二段片であるが、口縁部を欠く。突帶部分で径41cmを測る。赤橙色を呈し2～4mm大の石英・長石粒とやや細かい赤色粒を多く含む。細身で突出度の高い台形突

帶を付す。器壁はやや肉厚となる。第二段部に突帯から3.5cm離れて方形透かしを穿つ。外面は一次調整タテハケの後、最上段を含め二次タテハケ調整を施す。内面は指ナデ調整の後、最上段部はヨコハケ調整を加える。(第20図5)

中間段片であるが、内面調整から勘案して上方第二段・第二段突帯部片であろう。突帯部で計3.6cmを測る。明褐色を呈し突帯部分に黒斑が付く。突帯はさほど突出しないが上端を強く張り出す形状となる。突帯から約3cm離れて方形透かしを穿つ。外面は一次調整タテハケ仕上げ、内面は縦方向の指ナデ仕上げの後上端にはヨコハケ調整が及んでいる。(第20図6)

中間段片。透かし孔と内面調整から見て中位以下の部位であろう。黄白色を呈し細粗粒の石英・長石粒を多く含む。台形を呈する突帯は小振りで突出度も弱い。外面には二次タテハケ調整が認められる。内面は斜位の指ナデ調整の後に粗く縱に削るが器壁はやや肉厚である。さて本品



第20図 円筒埴輪 (S = 1/4)

には範描の細沈線によるやや複雑な記号的表現が認められる。上に開く「へ」字状の刻線一条と、それに交差する5~6条の不揃いな短刻線が見られる。いずれも銳利な刀子状の工具で刻まれる。半ば以上を欠損するため全体の構図は不明であるが、線刻文と重なるように穿たれた透かし孔の一部が残存する点が注意される。

(第21図1)

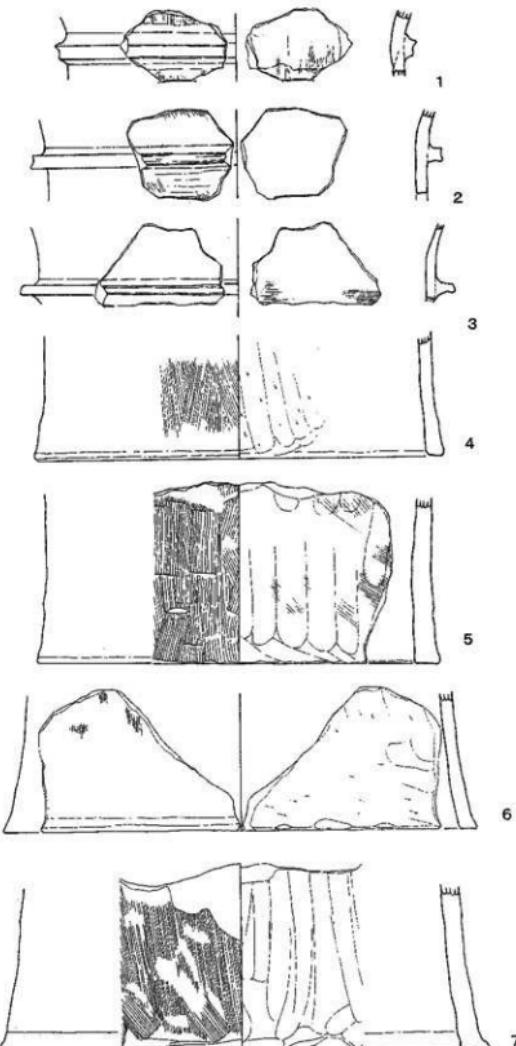
最上段突帯部片。復元計測では突帯部径30cmとなるが小片のため不安が残る。明橙色を呈し1~4mm大の石英粒を少量含む。やや低めの台形突帯は上端を強くつまみ出す。第二段部に突帯から2cm弱離して方形透かしを穿つ。外面一次調整タテハケ。最上段部の下端付近では二次調整の横ナデが認められない。内面は突帯部分まで軽く縦ヶれを施す。上端にヨコハケ調整が僅かに見える。

(第21図2)

最上段突帯部片。外面黄橙色、内面鮮橙色を呈し、3~4mm大の粗粒の石英粒を多めに含む。外面に赤色顔料(ベンガラ)の塗布を認める。復元計測では突帯部径34cmとなるが、小片のため不安が残る。矩形で突出度の高い突帯は下端をやや強くつまみ出す。第二段に突帯から約2cm離して方形透かしを穿つ。一次タテハケ調整の後、最上段は丁寧な横ナデ仕上げ、第二段ではヨコハケ調整が確認できる。外面ヨコハケ調整を確認した資料は現時点ではこの一点のみである。内面は丁寧なナデ仕上げとなる。

(第21図3)

最上段突帯部片か。相當に薄く仕上げると共に突出度の高い鉄状突帯をもつことから通有の円筒埴輪と見なすには躊躇する資料である。突帯部分で径3.5cmを測る。橙色を呈し2~3mm大の石英粒・



第21図 円筒埴輪 ( $S = 1/4$ )

赤色粒を多量に含む。突帯は細身ながら鉄上に強く突出し下端を引き延ばす。外面は磨耗のため調整不明、内面横ナデ仕上げとなる。

(第21図4)

基底段片。基底部径3.4cmを測る。黄白色を呈し、2~4mm大の石英・長石粒を多く含む。外面に黒斑をとどめる。内面ヘラ削りにより器壁は厚さ1cm内外と薄く仕上がる。外面はタテハケ調整。やや内傾気味に立ち上がるが、やはり自重で下端が潰れ内外に粘土がはみ出した形跡がある。内面は下端まで及ぶ縦ケズリ調整時にその部分も搔き取り、外面は最終段階に板状工具で押さえつけている。

(第21図5)

基底段片。基底部径3.4cmを測る。また本片では基底段は少なくとも1.9cmの高さを持つことが判る。全体に橙色を呈し1~3mm大の石英・長石粒を含む。器壁は厚く最大2cmを越える。ほぼ垂直に立ち上がるが自重で下端がやや潰れ、内外に不規則に粘土がはみ出す。そうした部分の処理は特に行っていない。外面はタテハケ調整、内面は粗く縦方向に指ナデする。基底面の観察から、幅広の粘土板を二重に巻き付けて基底部を整形したことかがわれる。

(第21図6)

基底段片。淡黄色を呈し2~4mm大の石英・長石粒を比較的多めに含む。基底部径は約4.0cmを測る。自重で下端が潰れた形跡があるが、外にはみ出した粘土を板状工具で器壁に押さえつけているようだ。僅かに内傾気味に立ち上がる。外面はかなり磨耗しているがタテハケ調整が読みとれる。上記の「底部調整」はハケ仕上げ後と見られる。内面は丁寧に横ケズリを施し、この結果器壁は厚さ1cm内外とかなり薄く仕上がっている。

(第21図7)

基底段片。黄橙色~明橙色を呈し2~4mm大の石英・長石粒少量と赤色細粒を多量に含む。基底部径は4.1cmを測る。自重で下端は潰れ外方に粘土が不規則にはみ出したままとなる。僅かに内傾気味に立ち上がり器壁は2cm前後と厚い。外面タテハケ調整、内面は粗い縦方向の指ナデ仕上げとなる。

今年度の調査でも円筒埴輪の全形を推測しうる資料を得ることはできなかった。樹立状態のまま検出した基底部の一部を除き全周する資料ではなく、透かし孔配置の詳細や段構成の復元は今後の課題となる。しかし今までの資料を通して円筒埴輪の基本形状にはさほど差異はない。昨年度報告で紹介した点を含めてあらためて全体に共通する特徴を以下にまとめておこう。

①口縁部は最上段基底段や中間段に比べ短めとなる。多くは中間段の1/2以下の高さとかなり短いが、まれに2/3程度に達するものも含まれるが、この部分でかなり外反することには変わりがない。

②口径は概ね3.5cm前後、基底部径は3.0~3.3cmでかなり揃っている。

③透かし孔は口縁部(最上段)と基底段を除く中間段全てに穿たれる可能性が高い。

④透かし孔の圧倒的大部分は縦長の長方形を示し、縦方向はほぼ段幅一杯となる。昨年度調査資料では三角形透かし孔の可能性をもつ細片若干が認められたが、今年度資料では今のところ三角形、その他の長方形以外の透かし孔形状は確認していない。

⑤透かし孔の間隔から配置をある程度推測しうる若干の資料では、各段に四方~五方を穿つものと見られる。また透かし孔位置は縦方向に揃っている。もっともこうした状況を

確認できる資料が限られるので、全体に共通するとは断定できない。

⑥突帯は概ね突出度が高く貼付は非常に念入りであるが形状は一律ではない。また突帯貼付位置の器壁に一定間隔で浅い方形刺突痕が連続する例がある。

⑦少數の資料では赤色顔料（おそらくベンガラ）の塗布が確認できる。また基底段にそれが及ぶ資料も存在する。

これまで確認した快天山古墳出土円筒埴輪では、一部は上記した①～⑦の共通点を持つが、その全体は発色及び胎土の特徴から二群に大別することができるし、この区別はある程度整形技法の差異とも関連している。まず発色では黄白色系統を呈するグループ（a群）と橙色系統を呈するグループ（b群）がある。前者a群では3mm前後の粗粒の長石粒、石英粒が目につくが、混入度合いはさほど多くない。後者b群ではa群と同様の胎土が観察されるグループ（b-1群）と、全体に混入砂粒がひどく多いグループ（b-2群）が見られ、その一部では加えて2～3mm大の摩滅した赤色粒を多く含むものがある。b群、とくにb-2群は今少し細分できる余地があるが、現時点ではこの程度に大まかに捉えておきたい。さて黄白色系統のa群では例外なく最上段を除く内面の大部分にケズリ調整を施し、その結果器壁は薄く仕上がっている。外面は突帯貼付前に全体をタテハケで整え、後に口縁部（最上段）に限り丁寧な横ナデでそれを消す。口縁部内面にはヨコハケ調整を加えている。また快天山出土の円筒埴輪はいずれも正位置に据えて基底部から順次粘土帯を積み上げていくとみられるが、その結果、自重で基底部が潰れ不規則に粘土がはみ出したものが多い。しかしa群の一部では最終段階でそうした部分を板状工具で器壁に押しつけ整形する例がある。

さてb群のうち、b-2群と一緒に括ったグループのもっとも目に付く特徴は内面のケズリ調整を全く欠く点にある。中間段で内面第二段以下は指ナデで仕上げている。この結果、器壁はa群より厚く全体に鈍重な感を与える。底部整形を除く外面調整と口縁部内面のヨコハケ調整は多くの場合共通するが、一部では突帯貼付後にあらためて外面に二次タテハケを加えるものがある。

一方b-1群では調整技法の点で全くa群と一致するものが多い。実際同一固体で部位により明確に発色を違え縞模様を呈する固体もまれに認められ、両者の緊密な関係を示している。少數例では外面に二次ヨコハケ調整が認められるが、小片のためその充実の度合は不詳である。

#### 壺形埴輪（第22図）

（第22図1）

口径4.1cmを測る大型の二重口縁壺口縁部片。約1/3周を残す。黄白色を呈し口縁端に黒斑が見える。4mm以上の粗粒石英粒を少量含む。やや丸みをもって開く受け部を持ち、立ち上がり部は強く外反して開く。端部はごく僅か肥厚した面を持つ。屈曲部には断面蒲鉾形の小突起が巡る。器面は荒れているが内外面横ナデ仕上げと見られる。二重口縁壺の中では一際大型の固体で、同時期の日常的な壺形態をそのまま埴輪化したと見られる他個体とは様相を異なるものである。

（第22図2）

口径約3.2cmを測るやや小振りの二重口縁壺口縁部片。淡黄色を呈し2～3mm大の石英

粒少量を含む。強く折り返して大きく開く口縁部は薄手。上端付近でやや屈曲して端部は小さくつまみ出す。内外面横ナデ仕上げ。

(第22図3)

二重口縁壺口径部片だが、口縁立ち上がり部を欠く。黃白色を呈し2~3mm大の石英粒をやや多めに含む。推定口径は30~35cm程度であろう。短めの直立する頸部から強く折り返して口縁受け部は水平に開く。立ち上がり部は薄手で強く外反するようだ。屈曲部は強く張り出す。頸部外面に斜位のハケ調整をとどめる他は横ナデ仕上げ。

(第22図4)

口縁端が磨耗しているため厳密には二重口縁壺の疑いも捨てきれないが、單口縁広口形態と見た方が素直であろう。その場合口径は21cmとなる。

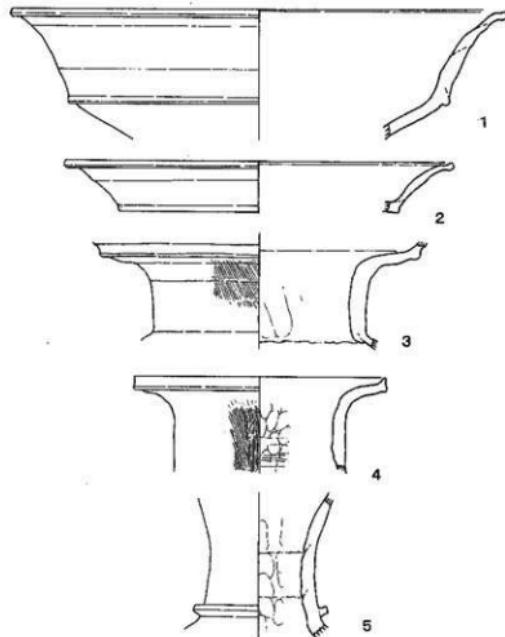
約1/6周強を残す。淡黄色を呈し2~3mm大の石英粒を少量含む。直立する頸部から緩やかに折り返して口縁部は短い。端部は小さく垂直につまみ上げ、下端も小さく張る。口縁部内外面は横ナデ仕上げだが、頸部外面には緻密なタテハケ調整をとどめる。頸部内面には指爪さえ痕をよく残し下端は粗い横ナデが加わる。

(第22図5)

他の中大形壺とは胎土・形状を異にし、壺形埴輪に分類することには躊躇する資料である。暗橙色を呈し2~3mm大の石英粒を多量に含む。外反気味に立ち上がる頸部片で基部に突出度の高い細身の矩形突帯一条が巡る。外面横ナデ仕上げで内面は指爪さえ痕を残す。こうした特徴の中形壺は兵庫県西条52号墓や香川県尾崎西ST24号墓、弁天島積石塚などどちらかといえば播磨灘沿岸地域で見られるが、製作地を細かく限定することは困難だ。また奈良県箸墓古墳にも類例がある。ただし以上の諸例は弥生後期後葉~古墳前期前葉に位置付けられ、本墳の年代観には合致しない。

その他土師器

いずれも細片のため、図化できなかったが、埴輪類とは区別できる少数の土師器類が出土している。うち少なくとも一点は、直立する頸部から口縁折り返し部にさしかかる部分



第22図 壺形埴輪 (S = 1/4)

と推測しうるので、小形の広口壺と見られる。他の多くは細片化した体部片であるが、比較的張りが強くかつ薄手で外面ハケ調整、内面はケズりないしは顯著な指押さえ痕が観察できるものが多い。小形の壺もしくは壺であろう。今のところ高杯・鉢類など飲食器類は確認していない。

以上の資料は、昨年度提示した編年観=集成編年3期と矛盾するものではない。

## 2. 火葬墓間連遺物他（第23図他）

### 八稜鏡（図版55）

面径8.3mmを測り、内区厚2mm、外区厚2.5mmと小形かつ薄手の八稜鏡である。「へ」字に折れ曲がり外区・外縁の一部を欠損する。多くの亀裂が走り相当に劣化が進んでいる。また鋳造が進行し表面に細かな砂粒が多く固着させているが、繊維あるいは木質痕などは観察できない。

外縁では鈍く断面三角形に隆起するが、頂部はやや丸みを帯び、この部分で厚さ4mmを測る。外郭は八角形を呈するが長3.2～3.3mmを測る各辺は僅かばかり弧を描き、稜部の突出は強くない。後間（各辺）中央では外縁隆起部がごく鈍く内側に突出する。幅8mmの外区は厚2.5mm、素文で厚2mmを測る内区との境に僅かな段を持つ。劣化のため不鮮明であるが内区には鉢を巡り対抗する位置で外向きに飛翔する二鳥と、その間に藤状の草花が肉彫り風に表現される。鉢は長8mm幅6mm厚5mmの梢円形を呈し長辺に直交して鉢孔を穿つ。鉢座の表現はない。

片桐孝浩氏のご教示によれば、本鏡は外縁の形状等から平安中期に編年される可能性が高い。

### 藏骨器（第23図3）

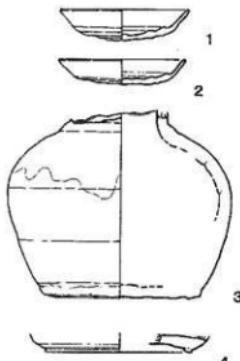
比較的寸詰まりな体部でやや肩を張る。体部高13.4cm、最大径18.4cm、底部径13cmを測る。器壁は全体に1cm内外の厚みを持つ。口頸部は基部から打ち欠く。焼成は堅密で全体に明灰色を呈する。器表全体に薄く釉がかかり光沢を帯び、さらに肩から濃緑色の釉が厚く垂れる。砂粒は目立たない。外面全体は回転ナデで整えるが基底部に一条の

接合痕を残す。内面では同様の接合痕を三段以上留める。

佐藤竜馬氏のご教示によれば、形態・焼成など総合的に見て本品は十瓶産須恵器壺で11世紀代に位置づけられる可能性が高い。

墓壙内出土土師器4点のうち2点である。他2点も法量・形態などこれらと同巧である。

細粒の混入はきわめて少ない。21図1は口径10.4cm深さ2cm、第23図2は口径10.7cm深さ2.5cmを測る。底部はやや肉厚で口縁部は強く外傾して比較的まっすぐ延び、端部は丸く收める。底部外面には回転鏡切り痕を留める他は回転ナデで仕上げる。これらは法量・形態から、11世紀後半と推定される杯と皿の器種土師器杯両者とも黄灰色を呈し、分化以前の過渡的な形態と評価され



第23図 火葬墓間連資料他 (S=1/4)

る土師器杯C類に相当すると見られる。その点から10世紀後半～11世紀前半に位置付けられる。以上の編年観は佐藤竜馬氏のご教示に拠った。

### 3. その他

この他、火葬墓周辺の11～13トレンチの墳丘裾部あたりから今回図示していないが杯類および鍋もしくは長胴甕と見られる土師器片若干が出土している。今年度検出した火葬墓の共伴資料に近い年代を推測しうるものであるが、こうした資料の散布範囲からこの時期の他の遺構が所在する可能性を示唆するものである。

また前方部前端付近の7～10トレンチでは昨年度の1・6トレンチ同様に8世紀代後葉に位置づけうる須恵器高台付杯3～4個体分の破片が出土している。うち一点を図化掲載した。(第23図4) 他地点でも同時期と見られる須恵器片ごく少数が見られるが、今のところこの時期の資料は前方部前端付近にまとまる傾向を指摘できる。



図版11 第7～9トレンチ全景（北から）



図版12 第9トレンチ全景（東から）



図版13 第7トレンチ全景（北から）



図版14 第7トレンチ前端区画溝南肩（西から）



図版15 第12トレンチ第三段斜面葺石（東から）



図版16 第11～13トレンチ全景（南から）

### 写真3 前方部前端調査区・前方部東面調査区1



図版17 第12トレンチ第一段斜面葺石（東から）



図版18 第11・13トレンチ第一・二段斜面葺石（東から）



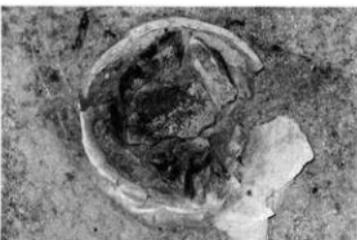
図版19 第11・12トレンチ第一・二段斜面葺石（北から）



図版20 第一段斜面葺石（北から）



図版21 第11トレンチ第一段斜面葺石屈折部



図版22 第13トレンチ第一段テラス埴輪設置状況

#### 写真4 前方部東面調査区2



図版23 火葬墓塚半裁状況



図版24 火葬墓塚掘下状況



図版25 火葬墓塚完掘状況



図版26 火葬墓塚完掘状況



図版27 第11トレンチ火葬墓検出位置（丸印の部分）

写真5 前方部東面 火葬墓

### 第3トレンチ拡張区



図版28 第3トレンチ拡張区全景（西から）



図版29 第3トレンチ拡張区盛土断面状況（東から）



図版30 第3トレンチ拡張区填丘上半部の盛土

### 第14トレンチ



図版31 第14トレンチ全景（西から）



図版32 第14トレンチ第二段斜面葺石・樹立埴輪（南から）



図版33 埋輪設置状況

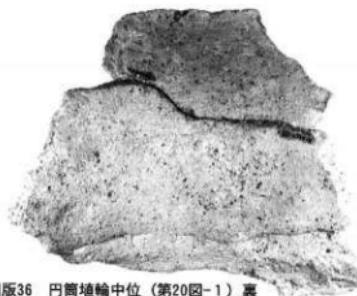


図版34 第14トレンチ第一・二段斜面葺石（西から）

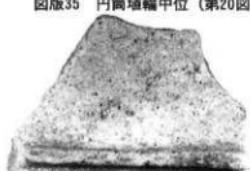
### 写真6 第3トレンチ拡張区・第14トレンチ



図版35 円筒埴輪中位（第20図-1）表



図版36 円筒埴輪中位（第20図-1）裏



図版37 円筒埴輪中位（第21図-3）表



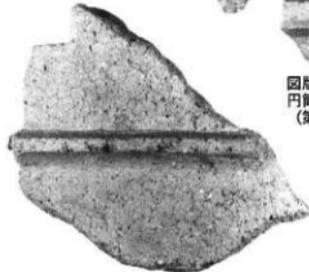
図版38 円筒埴輪中位（第20図-3）表



図版39 円筒埴輪中位 表

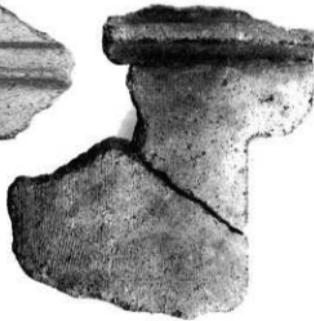


図版40 円筒埴輪中位 表



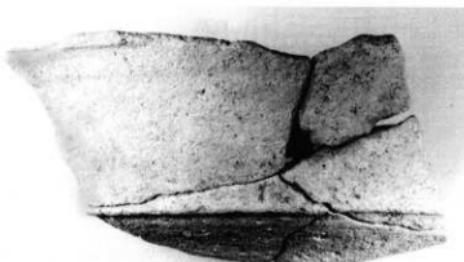
図版42 円筒埴輪中位（第20図-4）表

図版41  
円筒埴輪中位  
(第21図-1) 表

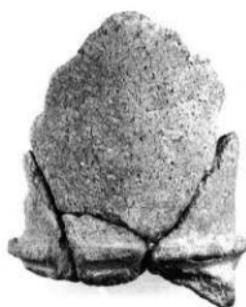


図版43 円筒埴輪中位（第20図-5）表

写真7 出土遺物1：円筒埴輪



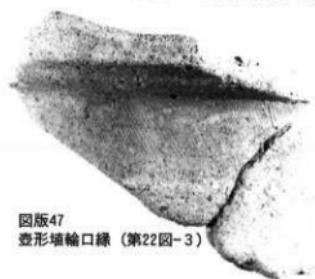
図版44 壺形埴輪口縁（第22図-1）



図版45 壺形埴輪頭部（第22図-5）



図版46 壺形埴輪口縁（第22図-4）



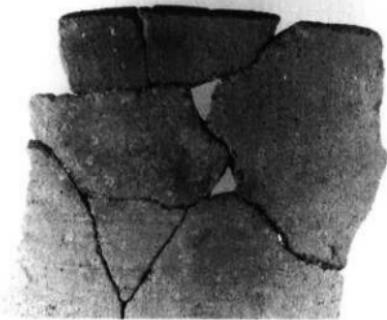
図版47 壺形埴輪口縁（第22図-3）



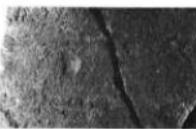
図版48 壺形埴輪口縁（第22図-2）



図版49 壺形埴輪底部（第21図-5）



図版50 円筒埴輪口縁（第20図-2）

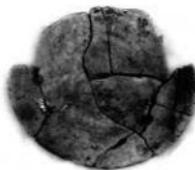


図版51 円筒埴輪口縁（第20図-2）拡大

### 写真8 出土遺物2：壺形、円筒埴輪



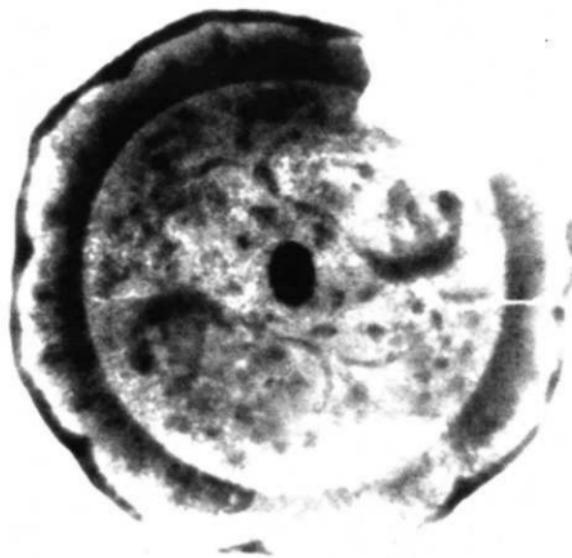
図版52 藏骨器（第23図-3）



図版53 墓壇内出土土師器皿（第23図-2）表



図版54 墓壇内出土土師器皿（第23図-2）裏



図版55 八稜鏡

### 写真9 火葬墓関連遺物

## 第6章 平成15年度快天山古墳確認調査概要

調査期間 平成15年6月23日～平成15年8月31日

調査面積 79.4 m<sup>2</sup>

### 第1節 くびれ部調査区の概要

#### 1. 15トレンチ：くびれ部西面（第24図 写真10）

設定の意図：一昨年調査の2トレンチおよび昨年調査の14トレンチで検出していた前方部西側面の段築・葺石との関係に留意しつつ、くびれ部西面の構造を確認することを目的として設定し、調査を行った。

設定位置：2トレンチの推定第二段斜面葺石基底ライン、14トレンチの第一・第二段斜面葺石基底ラインの検出位置を考慮し、かつ現状の見かけ上のくびれ部位置と東面11・12・13トレンチの所見を勘案して設定した。くびれ部における第一・第二段斜面基底ライン屈折部の確認を期待したものである。地点と規模は墳丘主軸想定ラインと直行方向、すなわち2・14トレンチに併行して主軸推定ライン上のK7杭の西9m南1mを東北隅として東西延長11mとなる。当初幅2mで設定したが、調査進行中に葺石などの検出状況に応じて東半5m部分については幅3mに拡張した。このため、本トレンチの最終的な調査面積は27m<sup>2</sup>となる。なおもっとも後円部頂に近いトレンチ南東隅の地表高71m弱、西北隅では約66mと調査区全体で5mの比高がある。

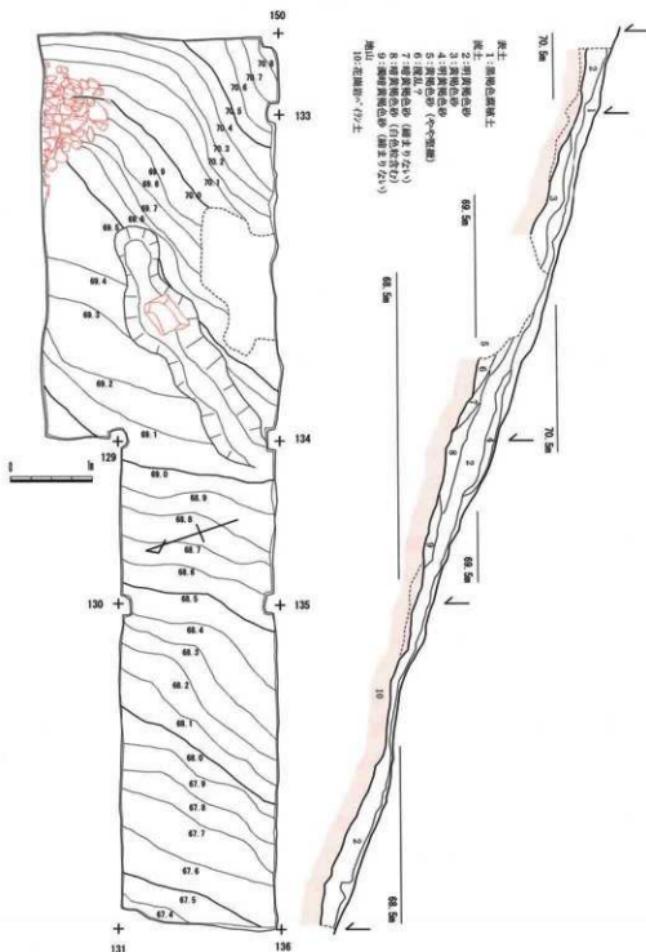
成果：トレンチ西半部の延長6m分、標高6.9m以下の部分は1950年調査の報告で埴輪列の存在を指摘している地点に接するが、すでに緩やかに連続する斜面に均されている。形状から畠地に開墾されたものと見られる。このため、期待した第一・第二段斜面葺石や下段テラスはすでに削平され、痕跡もとどめない。この部分では地山直上まで比較的近年に堆積したと見られる縮まりのない粗砂が続き、その間に若干の埴輪片と葺石材を検出しただけである。したがってこの地点で墳丘裾を確認することはできなかった。

調査区東半部では上段テラスの一部と、第三段斜面くびれ部の屈曲点と思われる部位を確認した。上段テラスは現状では標高6.9～6.9、4mに位置し最大幅1.4mが残存する。しかしその下端は上に述べた変改部に接するので、本来の規模を示すとは言いけれない。テラスは後円部墳丘に沿うように緩く弧を描きながら北東～南西にトレンチを斜行しつつ延びる。テラス上面には第三段斜面から崩落した葺石材が分厚く堆積し、比較的大型の埴輪片多数が混在する。一部は上段テラスに樹立されたものであろうが、転落石の上位に折り重なる破片も多いので後円部頂部・上位を含めて斜面上方から流入した破片も混在すると推測する。この地点で原位置に樹立された円筒埴輪の痕跡は確認していない。

さて、第三段斜面葺石は調査区北縁から延長0.9m最大幅1mがかろうじて残存していた。配列と位置関係から前方部斜面側の葺石と推測されるものである。周辺の形状からちょうどこの残存葺石が欠落する箇所が後円部との屈折部に相当するだろう。連続する後円部斜面側では葺石はほぼ完全に脱落していた。なお葺石の脱落した上段テラスと後円部

斜面の境に緩く弧を描いて連続する不定形で浅い掘り込みを検出した。樹根攪乱の可能性も完全には否定できないが、検出した落ち込みの中程に、葺石基底石に似つかわしい辺50cm大の大型石材がはまり込む。これを原位置と見なせば連続する浅い掘り込みは葺石基底列の堀方と推測することも可能である。

前方部側斜面に残存する葺石は高さ0.7m分最大8段分が観察される。上位部分が位置をとどめながらもテラスに接する基底部は脱落している。残部は標高6.9.5m～7.0.2mの位置にある。拳大～人頭大の亜円礫を不揃いに組み、現状の勾配は3.3度と他



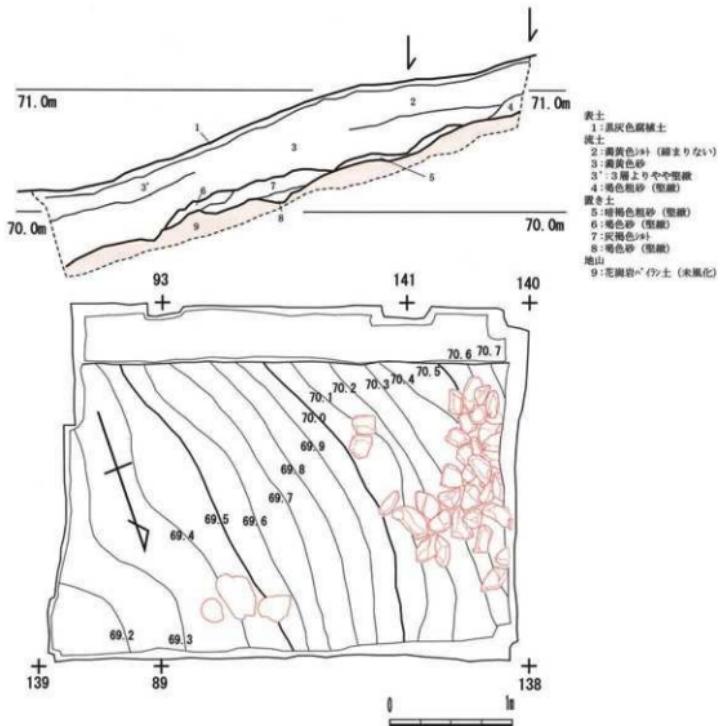
第24図 15トレンチ平・断面図 ( $S=1/60$ )

部位よりかなり傾斜がきつい。もっとも局所的な検出であるのでこの勾配を積極的に評価することは難しいだろう。

以上から、西面くびれ部（第三段斜面基底）の位置は後円部中心点の南19.8m、墳丘主軸ラインの西10.8m付近と推測する。またこれにしたがえば後円部中心点からの直線距離は22.5mを測ることになる。なお本トレンチで検出した墳丘は完全に地山を削り出し整形したものである。後円部頂に最も近いトレンチ東南隅で中心点から水平距離約19.5m、標高70.9mを測るが、ここまで盛土は広がっていないものと判断する。

## 2. 16 トレンチ：くびれ部東面（第25図 写真11）

設定の意図：昨年の11・12・13トレンチでは断片的ではあるが、前方部東面の第一・第二・第三段斜面葺石基底部およびその間に設定された上下二段の平坦面を検出することができた。さらに後者では計5本の樹立埴輪基底部を確認した。また墳丘基底ラインに限っては11・12トレンチ東寄りで、相当に緩やかではあるが曲折部分を検出した。本トレンチは、こうした成果を承けて墳丘東面におけるくびれ部の構造を確認する目的で設定し



第25図 16トレンチ平・断面図 (S=1/40)

たものである。特に第二・第三段斜面基底ライン屈折部の検出を期待した。

設定位置：上記の目的にそって11トレンチの南に連続して、墳丘主軸想定ラインの東9mを西縁に東西4m南北3mで設定した。トレンチ西南隅は墳丘中心点K10杭の東9m北17mとなる。

成果：当初予想に反して、外表施設を含めた墳丘表層の流出は著しく、明瞭な形で東面第三段斜面の屈折部を確認することができなかった。しかし先年の12トレンチなどの調査所見と本トレンチで検出した墳丘面の形状とから、おおよそ調査区南西隅から北辺中位に斜交する形で本来の第三段斜面屈折部位置を推測することができる。また非常に残りが悪く不明瞭だが、調査区東北隅に上方に比べかなり傾斜の緩い部分がある。隣接調査区の所見と併せて、この部分が上段テラスを反映するものと思われる。後円部墳丘に規制されて緩く弧を描き北西-南東に延びるように見える。この緩斜面部分（推定上段テラス部分）には転落石材・大型埴輪片が夥しく堆積する。この部分の標高は6.9. 2m～6.9. 4mを測る。以上から墳丘勾配や傾斜方向、さらに前年度の所見を合わせ、一応東面くびれ部位置（第三段斜面基底）は後円部中心点の南20m、墳丘主軸の東11. 2mと推定しておきたい。また墳丘中心点からの直線距離は20mとなる。ちなみにこの数値は、標高値を含め、前節で推測した15トレンチ検出西面くびれ部位置（第三段斜面基底）とかなり整合的なものである。

これより上位の第三段斜面部と推測する墳丘（後円部側）の斜面勾配は25度を測る。また斜面中位に設定した調査区でありながら、墳丘面は現地表下0.4～0.6mに埋没している。堆積土量の多さは墳丘崩落の甚だしさを反映するものといえるだろう。この点と関連して流土中に包含される葺石材はテラス上部の堆積を除けば全体として多くないことが気に掛かる。墳丘あるいは周辺の再利用と関連して古い時期に除去された可能性も考慮すべきではあろうが、後円部斜面を含め墳丘上位部分の葺石被覆の充実度を検討する材料の一つである。

さて、本調査区に隣接する12トレンチでかなり良好に第三段斜面葺石の遺存を確認したが、ここではほとんどが脱落している。わずかに調査区西辺中央部に接するように局所的に残存する。南北最大1.7m東西1mで三角形状に残り、人頭大以上のやや大振りの円礫を主体とする。配列はかなり粗雑であるが、残存状況からみてもすでに多少ずれ込んでいるかもしれない。標高7.0. 1～7.0. 7m 高さ0.6m最大五段分となる。この他推定テラス部に接する位置に1.2の大型石材がある。葺石基底石の可能性がある。

17トレンチの所見を承けて本調査区でも南辺に断ち割り区を設定して墳丘築成状況を追跡した。明瞭な花崗岩バイラン土壤の地山面直上に、肌理が細かく堅緻で多少の炭灰細粒の混入を推測させる暗色土が層厚5～15cmで断続的に広がる。上部の締まりのない明らかな流土層とは区分できる土質である。細片を含め本層には全く遺物を混入しない。17トレンチ他で検出した盛土層の様態と異なるし確認位置もかなり低くなるが、墳丘斜面の形状補正や葺石配列に伴う置土の可能性を考慮しておきたい。

### 3. 17トレンチ：後円部北東斜面上位（第26図 写真12）

設定の意図：昨年の3トレンチ拡張区では後円部頂から西面の墳丘築成状況、とくに盛土

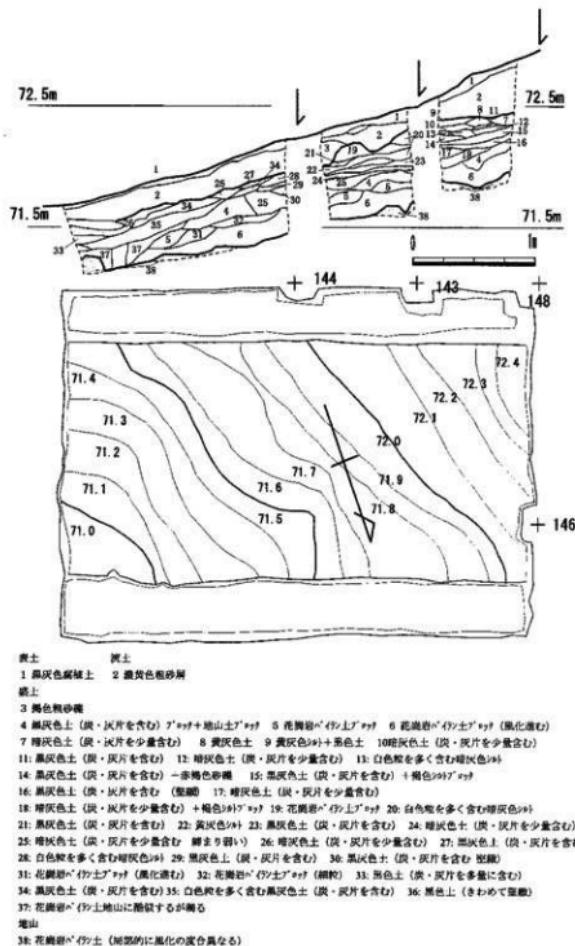
範囲とその様態を把握することことができた。本トレンチでは後円部東北面方向、つまりくびれ部に向かう盛土の広がりを確認することを第一の目的とした。さらに地表面観察などから望み薄ではあったが、西面の3トレンチ拡張部を含めてこれまで確認できていなかつた後円部斜面外表施設の痕跡を検出することをも期待した。

**設定位置：前方部頂平坦面の標高とほぼ等しい後円部東北斜面の上位に位置する。16トレンチの南に併行して2mの間隔で南北（主軸方向）3m、東西4mの調査区を設定**

した。墳丘主軸想定ラインの東8mを西辺とし、K7杭の東8m南6mが本トレンチ西北隅となる。

調査区は後円部東北斜面の傾斜方向に斜交する形となるので、南西隅が最も高く、東北隅は1.5mほど低くなる。

**成果：**本調査区周辺の地表面観察では後円部墳丘南半部と異なり、明瞭な畑地開墾の形跡が読み取れなかったにもかかわらず、テラス、葺石などの外表施設は全く検出できなかつた。また埴輪などの遺物もほとんど出土しない。残存墳丘面の上部に薄く堆積する流土層



第26図 17トレンチ平・断面図 (S=1/40)

にもほとんど転落石材などを含まない。

本トレンチの調査では表層付近の明らかな流土を除去した段階でトレンチ南西部、つまりより後円部頂に近い斜面上方より部分で地山土とは多少異なる上質の広がりが見出されたため、トレンチの南北辺に小規模な断ち割りくを設定して詳細確認を試みた。その結果、トレンチ南半では0.4～0.5mの厚さで盛土を確認した。しかし前方部寄りで低い北辺までは及んでいない。トレンチ西南隅で標高7.2m以高、東南隅で7.1.1m以高が盛土となる。つまり先年の3トレンチと同様に旧地形の上面を大きく均すことなく、自然的な起伏をとどめたままその上部に盛土を積み上げる。この所見に基づけば、後円部墳丘東北方向では盛土の範囲は中心点から1.7m以上2.0m未満となる。

盛土層は後円部西斜面3トレンチの構成と同様に、風化花崗岩片を多く含む地山土ブロック、肌理が細かく比較的堅密な淡黄色土、炭灰を練り込んだと見られるきわめて堅密な黒灰色土の三者を概ね互層に積む。各層は厚さ5cm内外と薄く層長も0.5～0.8mと比較的細かい単位となる。もっともトレンチ西半部、斜面上方部分ではこの中でも各単位は比較的細かく交互にかつ緻密に積むが、東半部では単位がやや大きくやや粗雑な感がある。こうした地点による盛土築成状況の微妙な差異は先の3トレンチでも観察した点である。なお検出した盛土上面の勾配は約2.4度を測る。

## 第2節 くびれ部調査区出土遺物の概要

### 1. 快天山古墳関係遺物（第27～33図 表1 写真13～17）

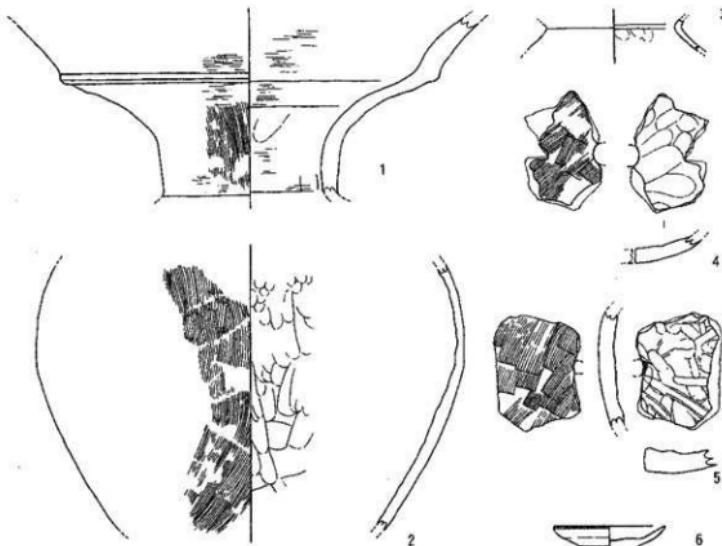
今年度の調査では180コンテナで約8箱分の遺物が出土した。ただし樹立状態をとどめた資料もなく全体が細片化しているため、接合作業で旧状の復元を試みたが部位・寸法などの判明した資料は多くない。以下ではこれらのうち、1.5トレンチ16点 1.6トレンチ1.7点を中心に報告する。わずかな細片の出土にとどまった1.7トレンチ他の資料は掲載していない。随って今回報告資料の大多数は東西両くびれ部の上段テラスに流入・堆積した資料群と言うことになる。上段テラスに本来樹立・配列された埴輪などに加え、後円部上方から転落した資料を相当数含むものと思われる。

また詳細な破片数の比較は行っていないが、隣接地点でありながら昨年度の前方部東面資料に比べて壺形埴輪がやや少ない印象を受ける。埴輪以外では小型甕などの小片若干を見るだけで既往調査と同様に土師器各種はごく微量である。また後世混入資料では平安期に下るものと思われる土師質小皿がある。これまで各所から奈良時代後期～平安期の土器細片出土。昨年度検出した火葬墓をはじめとする古代における再利用の一端を示すものといえよう。

### 壺形埴輪（第27図）

一昨年度調査で出土した壺形重口縁部片に比べかなり大型厚手の口縁部片が目立ったことから、昨年度概報では朝顔形埴輪の存在について再検討すべきことを示唆した。しかし今年度調査でもその確証が得られなかった。またこのことに加えて既出土資料よりかなり厚手で、曲面の具合などから口縁部に見合った大型の体部を想定しうる破片が新たに出土した点を重視すれば、やはり朝顔形埴輪の存在は認めがたいと考える。この点昨年度概報で示した見通しを撤回しておきたい。

大型二重口縁部片の第8図1は頸部上半から外反を強めて緩やかに口縁部に至る。口縁立ち上がり部は強く外反して分厚い。端部を欠失するがさほど長く延びないように見える。体部片第27図2は最大径位置の高いやや長胴に復元したが、小片のため傾き・体径は確定的ではない。外面に赤色顔料の付着を見る。第27図4・5は径10~15mm大の焼成前穿孔の一部を残すので壺形埴輪底部片と推定した。穿孔手法と形状は昨年度調査資料と同様である。しかし器厚と曲面の具合から大型の体部を想定しうるものである。1・2は黄白色系の色調・胎土を有するが、4・5は粗砂粒の目立つ橙色ないし褐色系の色調を呈する。



第27図 壺形埴輪 ( $S=1/4$ )

#### 小型壺（第27図）

小片のため詳細は不明であるが、小型の土師器壺と推測する。この他にこうした埴輪以外の小型器種細片若干が出土しているがいずれも器種などは特定できない。焼成・胎土から快天山古墳築造時期の所産と推測する。

#### 土師質小皿（第27図）

15トレンチの上段テラスに流入堆積した埴輪片・葺石材に混在して出土した小片である。立ち上がりはわずかに内溝気味に長く延びるので、土師質小皿としては古相のものであろう。底部外面に回転箝切り痕を残す。

#### 円筒埴輪（第28~33図）

今次調査では口縁部資料を比較的まとまって得ることができた。また中位段の大型片で透かし孔配置や突帯間隔に関するデータを多少補強することができたが、以前として円筒埴輪の全形を復元することは困難である。

円筒埴輪の諸要素については、少數例ではあるがこれまでの長方形透かし孔と相違する形状を確認した他は、概ね既知データと異なる部分はない。ただし、今回報告する東西両くびれ部（概ね上段テラス以上の埴丘上部）出土資料では、これまでとは異なり、黄白色系の胎土・色調を有し内面籠ケズリを多用する個体が目立つて少ない。この点は今後の詳細な検討を要するが、今回報告資料に後円部埴丘転落資料が少なからず含まれると推測されることを重視すれば、興味深い傾向といえるだろう。

#### 口縁部（第28図）

円筒埴輪の最上段口縁部の口径は4.0cm弱～4.5cm前後を測る。大小2タイプがありそうだが現状では断定しがたい。先端部はいずれも強く外反して短く延びる。多くは最上段高5cm内外と短いが第28図6はやや長い。この部分に透かし孔を穿つものはない。口縁端の内外いすれかをわずかにつまみ出す傾向があるが目立ったものではない。外面は一次縦ハケの後に横ナデを加えるがその充実度は差異が大きい。もっとも第28図5のように外面横ナデを欠くものは今のところ例外的である。また第28図2のように調整横ナデが第二段以下に及ぶ例も少ない。口縁部内面には横けを加える。中位段資料でも同様であるが、突帯の断面形状は見かけ上変化に富む。しかしいずれも上下側面および頂面を強くなでつけて器体との密着を図っており、微妙な力加減で突出度や細部形状に差異が生じているようだ。第28図5では最上段突帯が剥落するが、貼付部分に刺突痕とおぼしき不定形な小さい凹みが観察される。

#### 中位段（第29～32図）

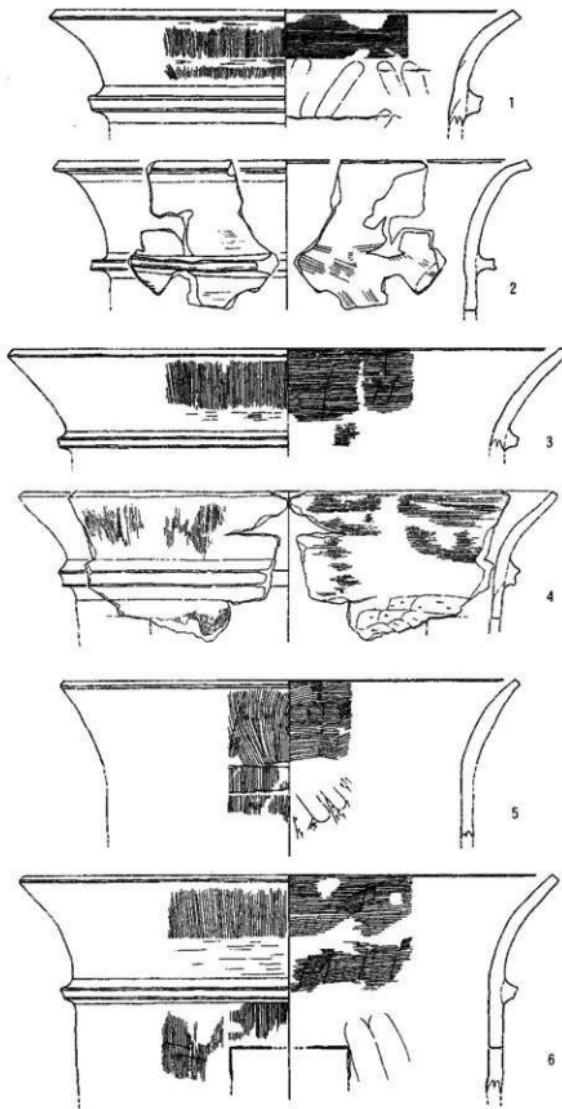
突帯間隔、つまり一段の高さを計測できた若干例では1.1～1.3cmとかなり規格的である。また円筒埴輪中位部の径（突帯部分で計測）は3.3～4.3cmまでの幅があるが、部位による変異を考慮すれば口径や底径と矛盾するものではない。

透かし孔は長方形を基調とするが、第29図3、第32図5では長方形と三角形透かし孔が共存する。これまでの調査でも小片でハケ調整の方向などから三角形透かし孔の可能性がうかがわれる資料若干が存在したが、明確な三角形透かし孔例は今次調査資料ではじめて確認した。現状では詳細な分析を行っていないが9割以上は長方形透かし孔であろう。また第31図4では円弧の1/3弱をとどめた透かし孔を見る。半円形の可能性が高い。今次調査資料でも透かし孔は四方/段が多そうである。また一昨年の調査資料では交互配置を確認しており、今次資料でも第29図4、第30図4、第31図1などは同様であるが、第29図3・4、第32図5では明らかに縦列配置となる。交互配置と縦列配置の比率は確認例数が乏しく明らかではない。

突帯の形状は口縁部で述べたように一定の差異を含むが概ね台形様で器体との接合は丁寧である。第31図1のように小型のものや、第32図1のように細身で突出度の高いものは多くはない。なお第31図4では突帯貼付位置に明瞭な方形刺突を見る。

中位段の外面調整は一次調整の縦ハケばかりで横ナデ他の二次調整はない。また概ね5条/cm前後の比較的細かなハケ調整が多い。一方、内面調整は今次資料では縦方向あるいは斜位の指ナデ調整が多く、籠ケズリを施す例は少ない。また第30図1のように局部的に内面に横ハケ調整を施す例も多くはない。

第32図5では細い籠描沈線で表現した線刻文がある。二ないし三条の平行線から構成

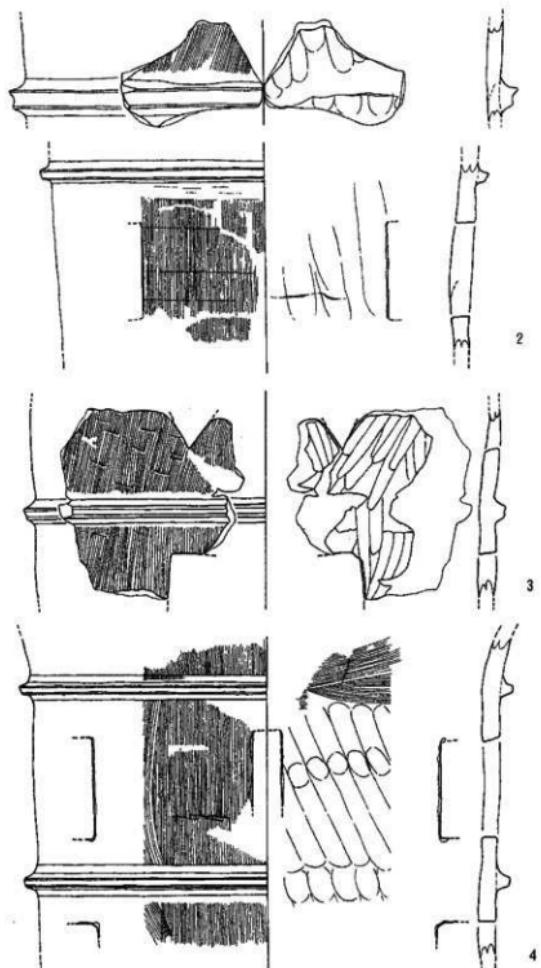


第28図 円筒埴輪1 ( $S=1/4$ )

される弧帶文の一部とも見えるが全体の構図は不詳であるし、表現もかなり粗雑である。昨年度資料に続き円筒埴輪線刻文は二例目となる。

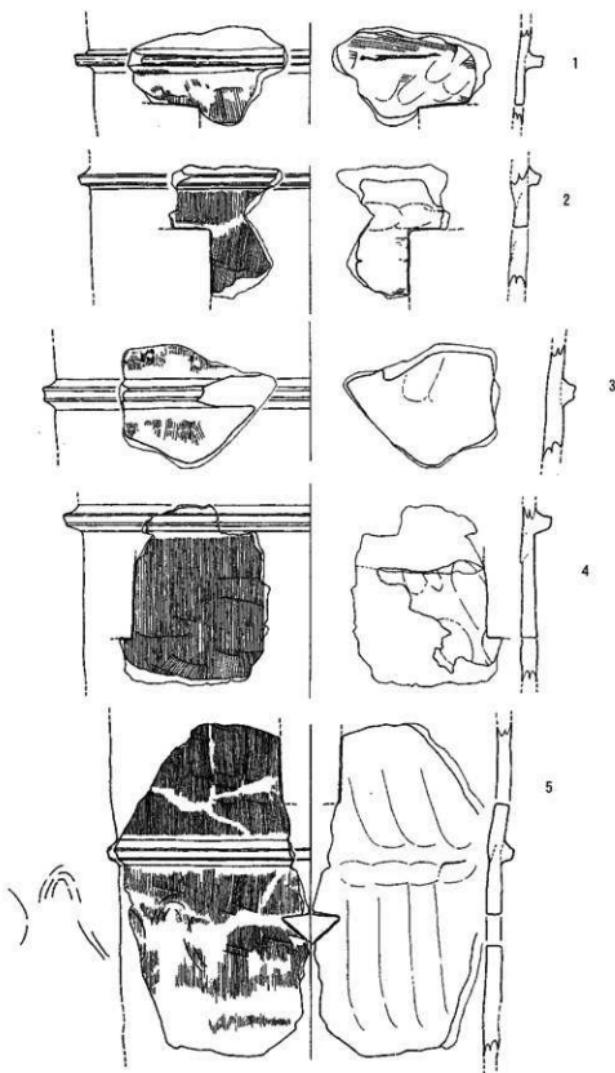
底部（第33図）

計測した底径データでは24~42cm大と他部位よりも差異が大きいが、計測例数が少なく積極的な評価は難しい。また以下に述べるように、おそらく自重の負荷による歪みが



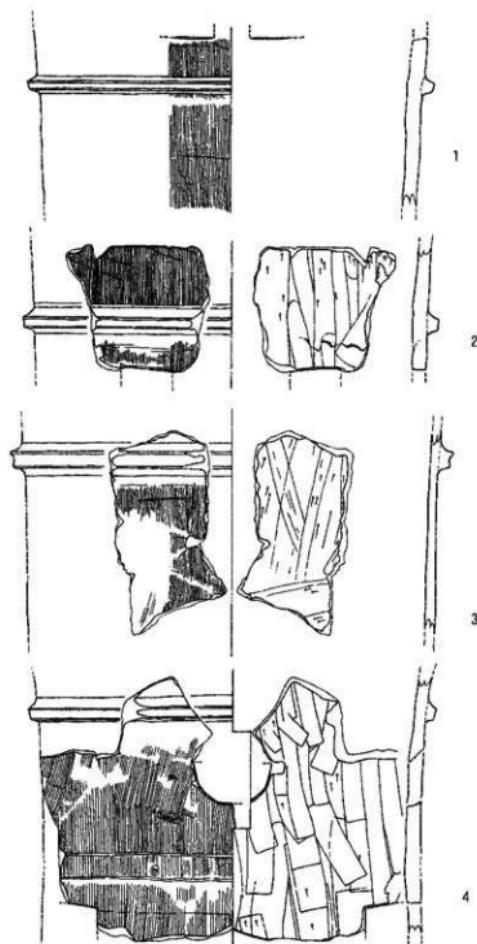
第29図 円筒埴輪2 (S=1/4)

個体差を増幅しているものと推測する。また最下段高は計測し得た唯一例では17cmを測り、他にも15cm以上と推測しうる例が認められるので、中位段の1.5倍内外の高さを

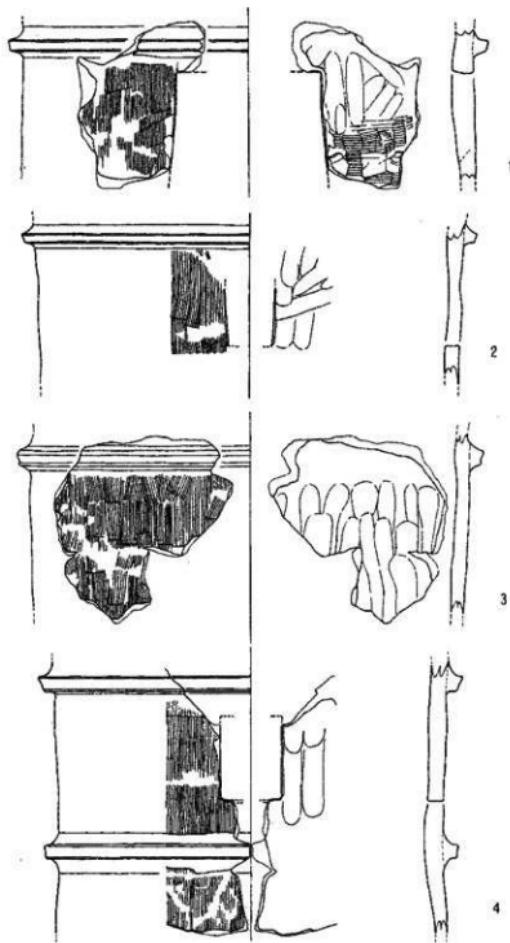


第30図 円筒埴輪3 ( $S=1/4$ )

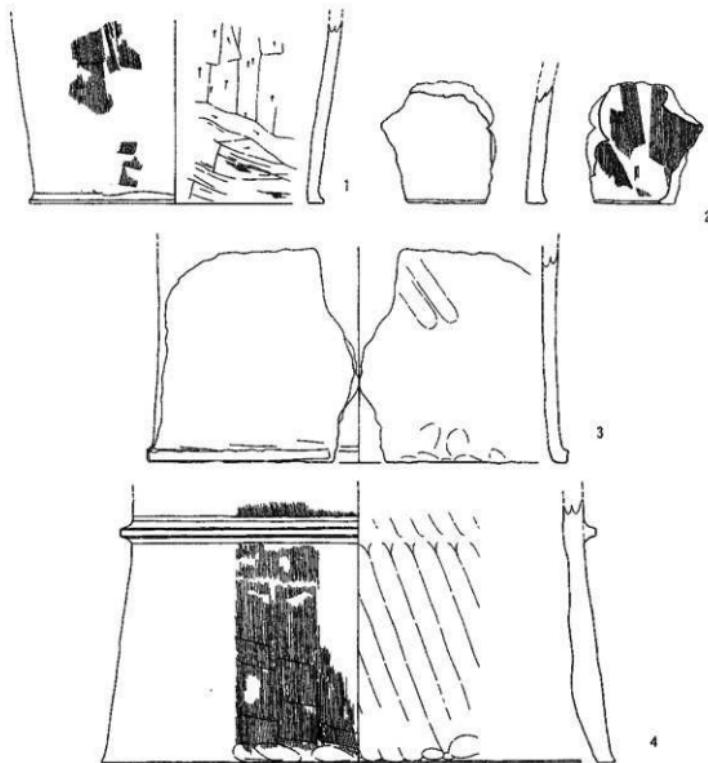
持つものと思われる。下端は自重で潰れることが多い。外面は縦位調整を基調とし、内面は斜位もしくは縦位の指ナデが多い。内面にケズリ調整を加えるものは第33図1だけである。また同資料では内面下端に横ケズリを加え、同図4では外面下端に連続的な指押さえ痕を観察するが、裾部の変形・歪みの補正を意図したものであろうか。



第31図 円筒埴輪4 ( $S=1/4$ )



第32図 円筒埴輪5 (S=1/4)



第33図 円筒埴輪6 (S=1/4)

### 第3節 平成14年度調査成果補遺

平成14年度の3トレンチ拡張部（後円部西面）および、14トレンチ（前方部北半西面）については、すでに同年度概報で概要を示したが、調査実施時期との関係上、成果を詳細に図示する余裕がなかった。ここで3・14トレンチ成果を図示すると共に、該当部分の概要報告を再掲しておきたい。

#### 1. 3トレンチ拡張部（第34図）

設定の意図：後円部墳丘の構造と外表設備の状態を確認するために、比較的後世の畠地開

墳の影響が少ないと見られた後円部西斜面で設定した調査区である。

設定位置：後円部横断軸に沿って、昨年度に設定した3トレンチ東端から墳頂平坦面西線までの間（32杭～112杭間）に、東西延長15m幅2mで3トレンチ拡張区を設定した。

成果：残念ながら葺石やテラス面などの墳丘外表施設はほぼ完全に流出していたが、裁ち割り調査によって墳丘上半部が非常に堅緻に突き固められた盛土により形作られていることが確認できた。

現況でも3トレンチ拡張区を設定した後円部西斜面は部分的な墳丘崩壊もしくは後世の小規模な改変によると見られる凹凸が著しいが、この状況はそのまま墳丘遺存状態に反映している。トレンチ東半部つまり墳丘上半部では表層腐食土層の直下で堅緻な盛土面が検出されたが、墳丘下半では表土下で厚い褐色細砂礫の水性堆積層が認められた。盛土層はトレンチ東端から10.8m（中心点から17.8m）まで標高7.0m以上で確認できる。したがって後円部頂に向かって多少地山面が隆起することを見込んでも後円部墳丘では4m内外の盛土厚を想定することができるだろう。現状ではこの地点で盛土末端が後世の改変もしくは墳丘の部分的な崩壊によって断ち切られているように見えるが、本来的には今少しは盛土部分が広がる可能性がある。これ以下の部分は本来的に地山整形により墳丘を整えているが、現状では上記したように局部的な抉れが連続し、その具体的な様相を復元することは困難だ。またトレンチ西半部で流土下層からやまとまって転落葺石材や円筒埴輪片を検出したが、その量は前方部各トレンチに比べ多くない。確実に原位置をとどめると判断されるものが全くなく後円部墳丘の外表設備に関する知見は得られなかった。

さて確認した盛土層の大部分ではa炭片が多く混入する砂礫混じり黒灰色粘土、b明橙色粘土、c多量の砂礫を混じえる明褐色粘土の3者を薄く互層状に積み上げている。部分的に地山の花崗岩バイ乱土をそのまま積み上げる箇所も見られるが、ごく局部的でしかない。盛土の各単位は短くあまり整然としていないが、いずれも非常に堅緻に突き固めており寺院基壇などのいわゆる版築土に硬度の点ではひけを取らない。こうした点で後円部墳丘上半部を構成する盛土は前方部の墳丘テラス面などの表層に敷かれた置き土とは全く異なっている。

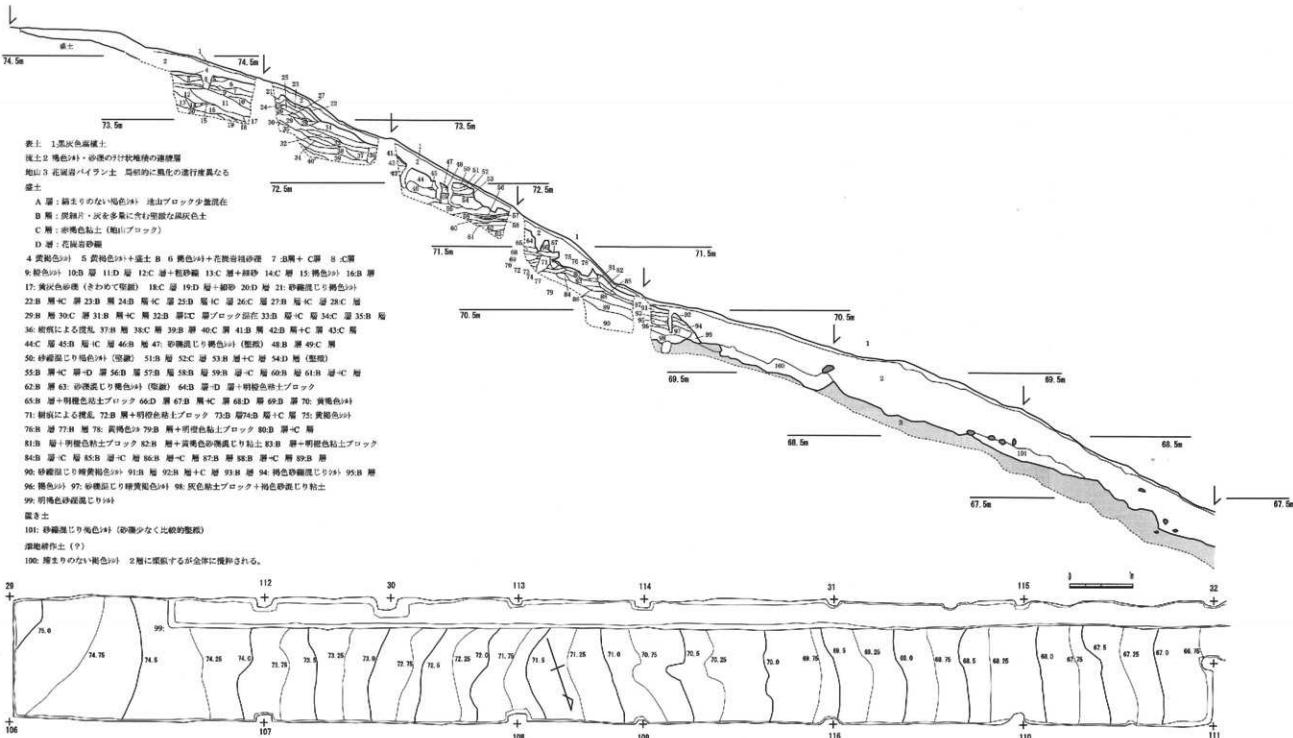
なお、昨年度の3トレンチ東端で地山直上で盛土層の可能性がある層序の存在を指摘したが、今回の調査でその部分を地山層の風化部分と理解することが適当と判断できたので、訂正しておきたい。

## 2. 14トレンチ（第35図）

設定の意図：農道切断部以北の前方部前半部分は改変が著しく現状では墳丘形態の観察は困難である。特に墳丘東側面の基底部付近は鶏舎設置時に完全に削り込まれて残存していない。西側面も分厚く建設残土を積み上げ現況で観察は困難であるが、その下部に墳丘基底部が残存すること期待して、前方部前半部の墳丘形態および外表設備を確認するために設定した調査区である。

設定位置：見かけ上のくびれ部と7トレンチで確認した前方部前端区画溝との中间地点にはほぼ相当する主軸上に設定した118杭の西9mを南東隅として幅2m東西延長12mの





第34図 3トレンチ平・断面図 (S1/60)

調査区を設定した。昨年度設定した2トレンチと18mの間隔で並行し、トレンチ北壁は前方部前端区画溝から約12.5m南に位置することになる。調査区設置に先立ち、建設重機で農道部分を含めて墳丘西斜面に厚く盛られた建設残土・客土を4m幅で完全にはぎ取り旧表土層を露出させたが、残念ながら前方部前半部ではおよそ標高69.5m以高の墳丘上半部の西半が一端完全に削平されていることがこの段階で判明した。

**成果：**したがってこの地点で旧状をとどめているのは標高69.5m以下の墳丘基底部付近に限られるわけであるが、幸い墳丘第一段石列と第二段斜面葺石基底部、およびその間の下段テラス面を確認することができた。

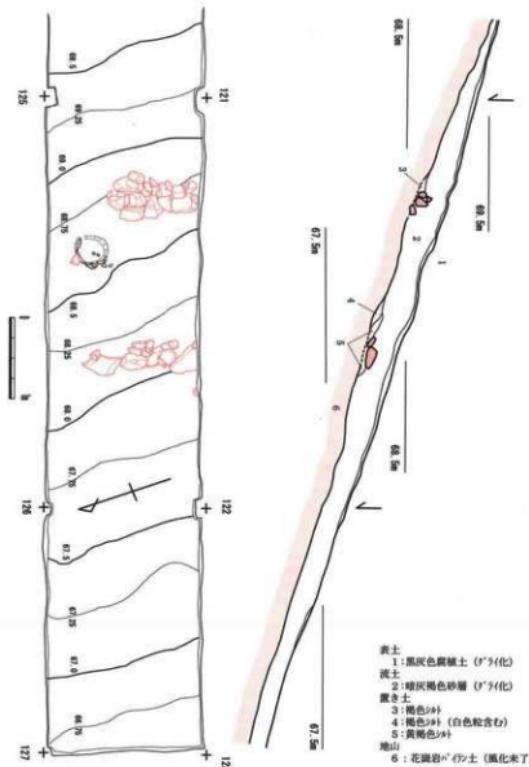
#### 第一段石列

主軸から水平距離16.4mでほぼ並行して第一段石列を検出した。トレンチ南端から1.5mほどが遺存する。基底レベルは68.0~68.1mとわずかに北に向かって迫り上がる。基底には幅50cm大の大型石材を横に並べ部分的にその上部に拳大の礫を重ね

20~30cm大の段  
を形作る。

#### 第二段斜面葺石

主軸から水平距離14.4~5mで  
ほぼ並行して第二段斜面葺石基底列を検出  
した。トレンチ南端  
から約1.2mほど  
遺存し基底レベルは  
68.65~68.75mと、第一段石  
列と同程度にわずか  
に北に向かって迫り  
上がる。基底石は第  
一段石列よりやや小  
振りり人頭大の大型  
石材を概ね横向きに  
並べ、その上には小  
児頭大~拳大の礫を  
斜めに差し込むよう  
に重ねる。最大5段  
分幅60cmほどが残  
存する。なおこの地  
点では第一段石列を  
含め使用石材は安山  
岩自然礫ばかりであっ



第35図 14トレンチ平・断面図 (S=1/60)

た。

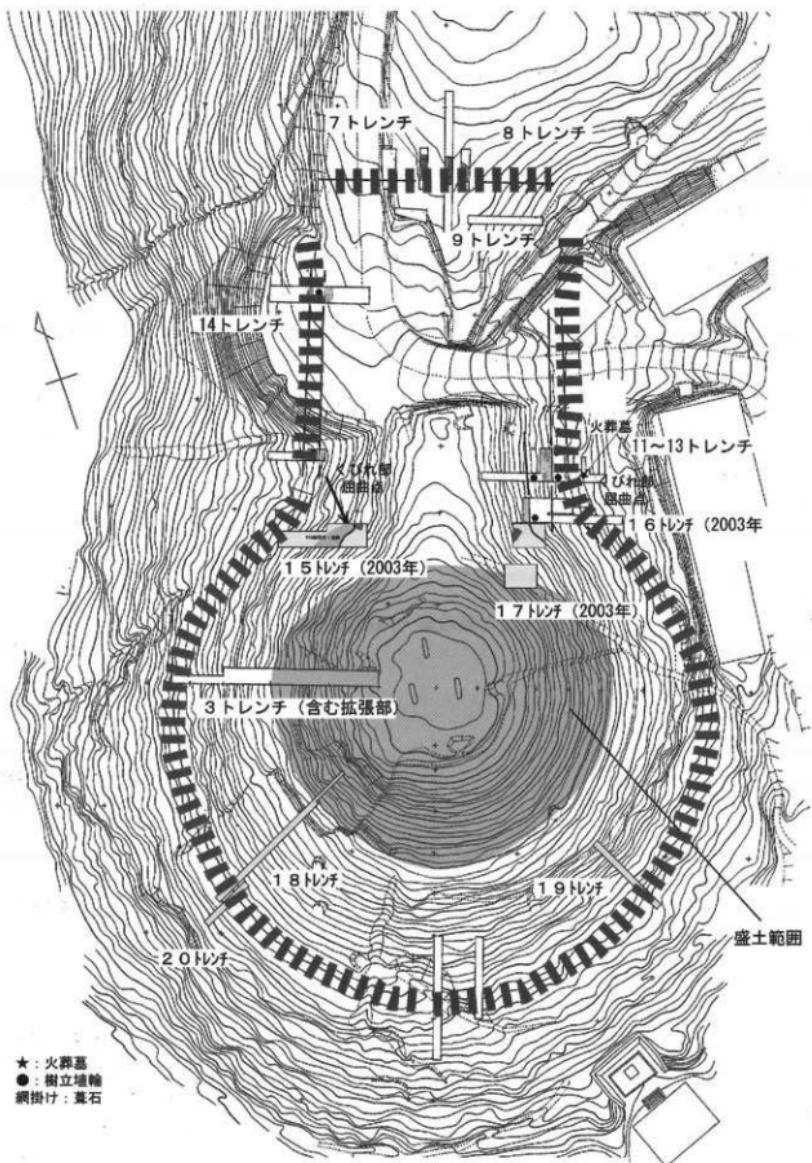
## 下段テラス

第一段石列と第二段斜面葺石の間、幅1.5m比高0.4mほどの緩斜面が下段テラスとなる。他地点で確認した下段テラスに比べかなり狭くなっている。やはり地山整形の後に若干の置き土で上面を整えたものと見られる。トレーナー北半で第二段葺石基底と20cmの間隔で据えられた円筒埴輪基底部を検出した。他地点のテラス面に樹立された円筒埴輪とは異なり、地山面を浅く掘り窪めて埴輪基底を据え付けている。また他地点のように内部に小槻を詰めていない点も相違している。

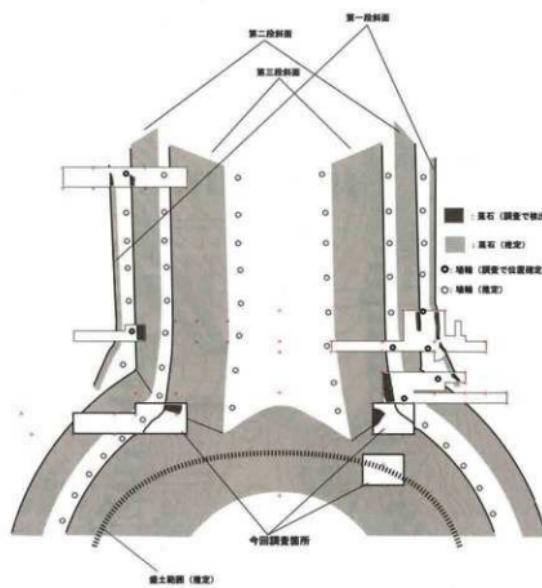
円筒埴輪片の他、壺形埴輪部片などが出土しているが量は多くない。

遺物 番号	遺物 名	出土 場所	器種	推定 埋蔵部位	径	段高	透かし丸 形状	透かし丸 記号	外箱調査	内箱調査	色調		胎土	備考
											外箱	内箱		
5 1157	円筒埴輪	口面部	□:3cm+0						透かし丸口面側の後 側面打丁	透かし丸口面側の後 側面打丁	黄褐色	黄褐色	2~3mmの穴が多い	
5 2157	壺形埴輪	体部							透かし丸口面側の後 側面打丁	透かし丸口面側の後 側面打丁	黄褐色	黄褐色	2~3mmの穴が多い	赤色調跡を有?
5 3167	小型壺?	肩~腹部	□:10cm						透かし丸口面側の後 側面打丁	透かし丸口面側の後 側面打丁	黄褐色	黄褐色	2~3mmの穴が多い	
5 4157	壺形埴輪	底部							透かし丸口面側の後 側面打丁	透かし丸口面側の後 側面打丁	黄褐色	黄褐色	2~4mmの穴が多い	造成痕跡孔径15mm
5 5167	壺形埴輪	底部							透かし丸口面側の後 側面打丁	透かし丸口面側の後 側面打丁	黄褐色	黄褐色	2~4mmの穴が多い	造成痕跡孔径10mm?
5 6157	土師小皿	底部~口縁	□:4cm						透かし丸口面側の後 側面打丁	透かし丸口面側の後 側面打丁	黄褐色	深褐色	木刷し跡土	
6 1167	円筒埴輪	肩上段~第二段	□:3.5cm	8.2cm	?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色	明褐色	1~4mmの穴多い 少し、赤色調有	
6 2157	円筒埴輪	肩上段~第二段	□:3cm	8.3cm	長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	明褐色	褐色	1~2mmの穴多い 多少、赤色調有	
6 3167	内筒埴輪	肩上段~第二段	□:4cm	8.8cm	?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	明褐色(表面?)	淡褐色(裏面?)	2~3mmの穴が多い 多少、赤色調有	
4 4167	円筒埴輪	肩上段~第二段	□:4cm	8.8cm	長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	黄褐色~朱褐色	黄褐色(裏面)	1~2mmの穴多い 多少、赤色調有	
6 5157	円筒埴輪	肩上段~第二段	□:4.5cm	8.2cm	?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色	明褐色	1~2mmの穴多い 多少、赤色調有	
6 6167	円筒埴輪	肩上段~第二段	□:4.1cm	14cm	長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	暗褐色	暗褐色	2~3mmの穴が多い 少し、赤色調有	
7 1167	円筒埴輪	中位段	体:4cm		?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	黄白色~淡褐色	黄白色~淡褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
7 2167	円筒埴輪	中位段	体:3.6cm		長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色	褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
7 3167	円筒埴輪	中位段	体:30.2cm		長方形~三角形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	淡褐色	淡褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
7 4157	内筒埴輪	肩上段~第三段	体:40.2cm	11.2cm	長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	明褐色(裏面)	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
8 1157	円筒埴輪	中位段	体:30cm		長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色	明褐色	1~2mmの穴多い 多少、赤色調有	
8 2157	内筒埴輪	中位段	体:37.8cm		長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
8 3167	円筒埴輪	中位段	体:38.2cm		?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	黄褐色(裏面)	褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
8 4167	円筒埴輪	中位段	体:35cm	11.4cm	長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	淡褐色	淡褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
9 1167	内筒埴輪	中位段	体:33.4cm		長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色(裏面)	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
9 2157	内筒埴輪	中位段	体:34.2cm		長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色	明褐色	1~2mmの穴多い 多少、赤色調有	
9 3167	円筒埴輪	中位段	体:36.4cm		?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色(裏面)	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
9 4157	内筒埴輪	中位段	体:33cm	11cm	?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色(裏面)	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	構造點に位置する
10 1157	円筒埴輪	中位段	体:36.4cm		長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色(裏面)	明褐色	1~2mmの穴多い 多少、赤色調有	
10 2167	円筒埴輪	中位段	体:37.8cm		長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色(裏面)	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
10 3167	内筒埴輪	中位段	体:43.4cm		?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色(裏面)	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
10 4167	円筒埴輪	中位段	体:39.4cm		長方形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	2~2~3個体の可能性
10 5167	内筒埴輪	中位段	体:33cm	11.2cm	長方形~三角形	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色	明褐色	1~2mmの穴多い 多少、赤色調有	構造點に位置する
11 1157	内筒埴輪	腰下段	身:24.2cm		?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	透かし丸~斜面打丁 斜面打丁	明褐色	褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
11 2167	内筒埴輪	腰下段	身:24.2cm		?	?	?	?	外蓋剥落	外蓋剥落	明褐色	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
11 3157	内筒埴輪	腰下段	身:34.2cm		?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	
11 4157	内筒埴輪	腰下段	身:42.2cm	17cm	?	?	?	?	透かし丸~斜面打丁	透かし丸~斜面打丁	明褐色	明褐色	2~3mmの穴多い 多少、赤色調有	

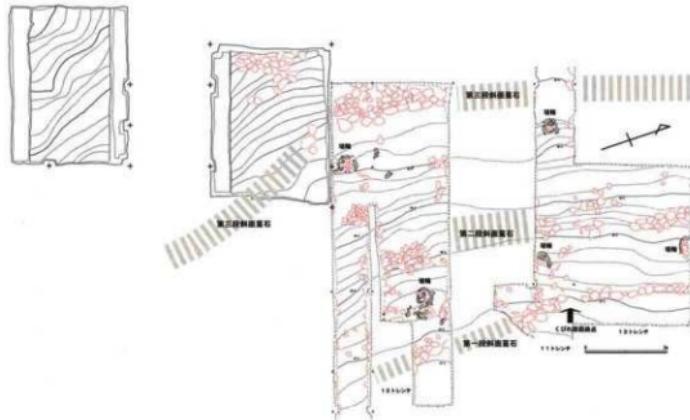
表1 遺物観察表



第36図 快天山古墳調査区配置図



第37図 快天山古墳段築・埴輪復元推定図（前方部）



第38図 前方部東面調査区平面図

#### 第4節 後円部調査区の概要

##### 1. 18トレンチ：後円部南西面（第39図 写真18）

設定の意図：快天山古墳の後円部は、主体部のある後円頂部を中心に南半部は畠地として利用されていた。また、かつては葺石として葺かれていたと思われる石材が、現地表上に散在していたり、用悪水路の縁石として利用されていることもあります。墳丘施設の残存については、あまり期待できないと考えていた。一昨年度の調査で墳丘南端に4・5トレンチを設定したが思わしい成果があがっていなかった。これは墳丘主軸上で設定したもので、地形測量図からも判るように後円部でも特に変更を受けていることが予想される箇所であった。そこで、後円部南半部の中でも比較的の残りが良いと思われる部位で再度墳端及び墳丘構造等についての確認調査を実施することにした。

設定位置：一昨年度の調査で3・4・5トレンチを後円部に設定し、施設や墳丘基底部を特定でき得る成果は確認できなかったが、傾斜変換点を検討することによっておおよその墳端ラインについて推定することが可能となった。

そこで、検討を重ねた結果、後円部墳頂のK10杭から墳丘主軸ラインを南から西に45度振ったラインに調査区を設定することにした。

設定箇所は、推定される墳端ラインを2m程度越す辺りから内側へ10m余りとした。しかし、墳端と推定されるポイントに巨木があったことから、下部は、その巨木までとし、後述する20トレンチを、巨木を避けるように南側に平行に設定することになる。

当初は、A14杭からA4杭までの11mの延長であったが、調査の進行に伴い上端部をA3杭まで5m延長し、その後トレンチ幅を半分にして更にA2杭までの5mを延長した。

結果的に18トレンチは、後円部中心のK10杭から15m～36m地点の延長21m、地表標高で7.2、3.2m～6.4、8.9mの比高7.43mとなった。トレンチ幅は、0.8mを基本とした。総面積は14.8m<sup>2</sup>であった。

成果：調査を進めた順を追って状況を述べると、まずA4杭～A14杭の11m区間であるが、地表観察で分かることおり、従来畠地として利用されていたことに伴う歎の痕跡をA11杭より上部でくっきりと残している。この歎形状はそのまま地山に現れており、畠地への開墾が墳丘にまで及んでいることが確認できた。

地山の直上には、A4杭～A6杭まではやや暗い灰黄色の粘性を帯びた土の堆積が見られた。その上部は同色系ではあるが濁りの強い土が20cm程度の厚みで地表面まで堆積していた。これは、畠地として使用されていた当時の耕作土であると読み取ることができる。この耕作土はA14杭のところまで同様の堆積を見せる。また、その下層の暗灰黄色粘質土も同様に堆積を見せているが、トレンチ中程のA6杭～A9杭の間で様相を変える。

A7杭を中心にして近世以降の掘削痕が見られるが、丁度それを挟むような土層が確認できた。これは、黄褐色の地山に程近いものであるが、白色砂粒を多く含んでおり上述している縮まりのない堆積層とは明らかに性質を異にするもので、かなりの縮まりを見せていることから盛土として考えた方が相応しい。同様のものは昨年度調査した3トレンチでも確認されている。これは地山を削り出して造形した墳丘の部分的に旧地形が不足する部分や細かい整形段階に置土として用いられたものと考えることができる。そう考えるとこの部

位に何らかの施設のための造作が成されたことが想定できるが、皮肉にもその中央に近世以降の掘削が及んでいることや、その上部や周辺部が開墾によって旧地形を留めていないことが考えられることによって、それが何であるのかをこの部位だけで判断するまでには至らない。

A 10 杭より下部では開墾以前の堆積層が確認できる。特にその各堆積に遺構が伴うものでもなく、どの時代にどのような堆積をしたのかは判断できない。

旧地形を比較的留めていると考えられる A 10 杭～A 14 杭間の地山傾斜を観察すると、A 12 杭の下部で傾斜角が 19 度から 34 度へときつくなっていることから外表施設の痕跡の可能性を残す。

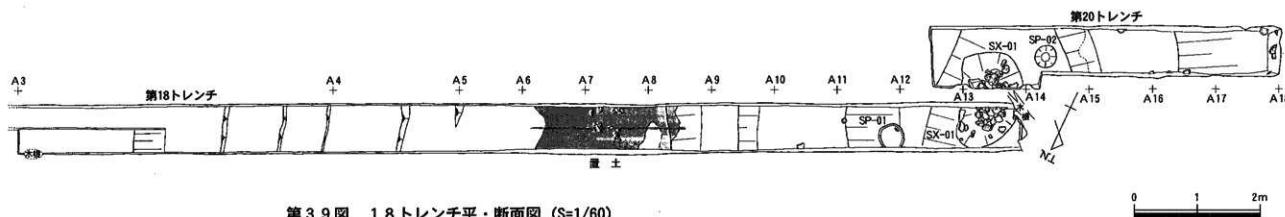
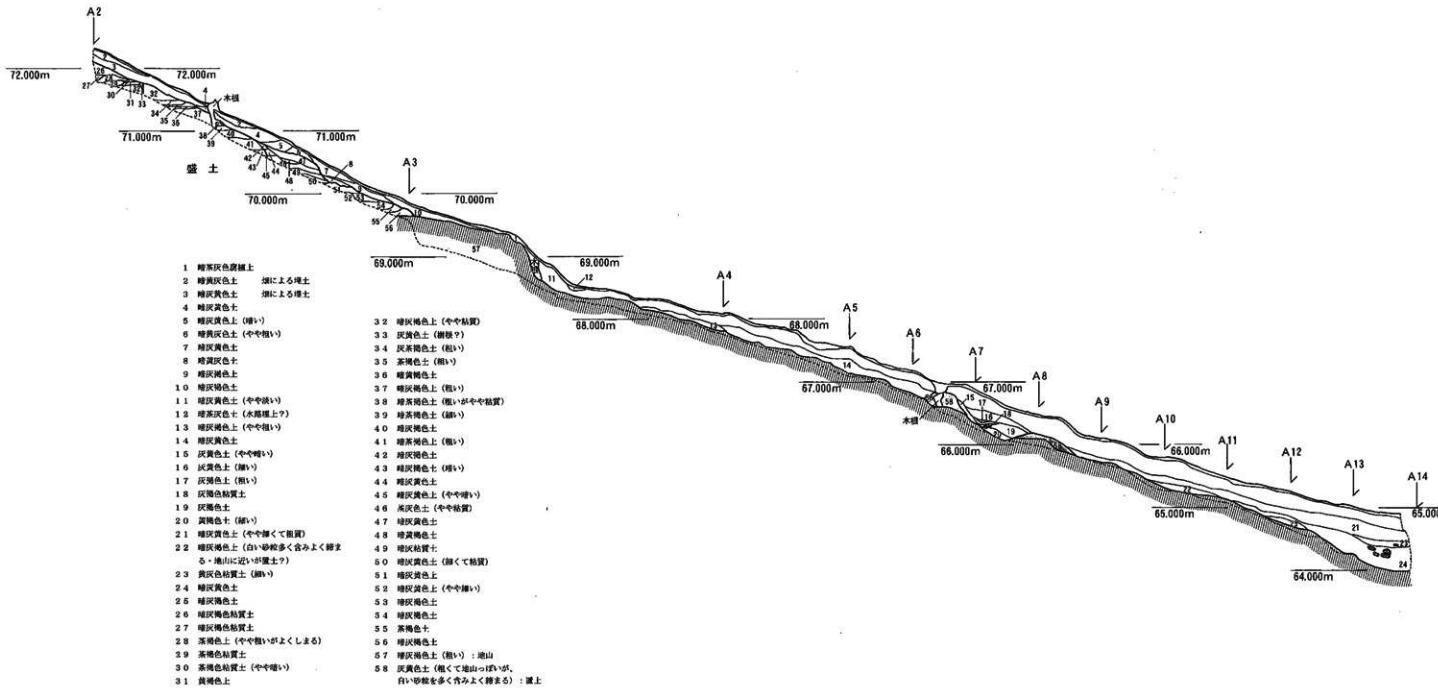
また、A 13 杭～A 14 杭の間には土壌状の窪みがあり埴輪片を含む礫が堆積していた。埋土の中に埴輪片を含んでいることから快天山古墳築造当時のものではなく後世のものと考えることができるが、遺物は埴輪片と礫のみであることから時期の特定はできない。

唯一遺構と捉えることができるものは、上述した傾斜変換点から 50 cm 内側のポイントを中心に浅いピットを検出した。埋土はやや淡い灰黄色土で僅かに 1 点であるが円筒埴輪片（第 42 図 1）が混入している。このことから、この遺構は円筒埴輪の据付塙である可能性を考えることができる。

このトレンチで検出した出土遺物は、全てが A 6 杭より下部でのものであり、耕作土下の堆積層に含まれていることから、開墾以前に元位置から流出していたものと考えられる。また、そのほとんどが碎片化しているが形状を留めているものも含んでいることから元位置に近いところでの散在と考えられる。また、これらの遺物は数箇所に集中して出土している。A 7 杭周辺の置土付近と A 12 杭のピット周辺及び A 13 杭～A 14 杭間の土壌部に集中していることからその付近で遺物を伴う外表施設（テラス面・円筒埴輪列）の存在が予想される。

A 3 杭と A 4 杭の中間に大きく段になっている箇所があるが、これは掘削によってできたものと考えることができるが、地形測量図を観察するとその段下の平坦部が後円部斜面で円弧を描くように延びていることからトレンチを A 3 杭まで拡張した。この結果、この平坦部も下部同様耕作土直下が地山となっており、墳丘の施設を想定させるものは見つかなかった。更に段上は、地山直上に堆積土が無い状況となっており、この掘削がそれ程古くないことが明らかになった。

ここで注目するのがトレンチ先端の A 3 杭直下である。この部分ではほんの僅かであるが、盛土状の比較的縮まった土層を地山直上で検出した。これを受けてトレンチを上部に 5 m、A 2 杭まで拡張した。この結果、標高 6.9、6.4 m から上部は盛土で構築されていることが判った。この盛土は、その全てが水平に盛られており、3 トレンチで確認されたものと同様に粘性の強いものや比較的粗いもの、また炭や灰を多く練り込んで強化したものを交互に敷き詰めていたもので非常に堅緻な盛土である。制約上、地山まで掘り下げる広い範囲での調査が不可能であったため、どのような単位で盛土が構築されていったのかまで確認することはできなかった。



## 2. 19トレンチ：後円部南東面（第40図 写真19）

設定の意図：18トレンチの設定と同様に畠地として利用されていた快犬山古墳の後円南半部において、墳端及び墳丘構造を解明するための調査区として19トレンチを設定した。これについても地形測量図の検討や現地での検討を踏まえて、比較的残存状況が良好であると考えられるポイントに設定することとした。

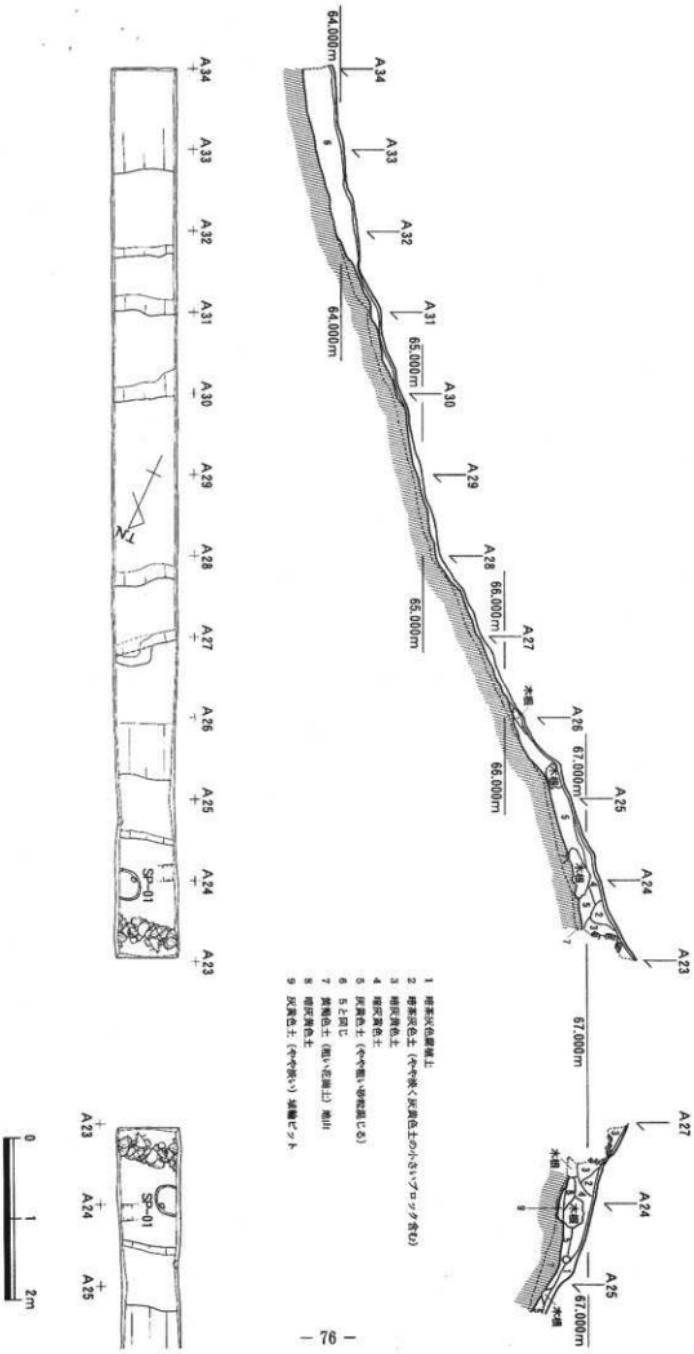
設定位置：18トレンチ同様に後円部における墳端及び墳丘構造を確認するための調査区であるので、後円部の南半部、墳端部付近での調査区設定とした。検討の結果、墳丘主軸に対して18トレンチと対象となるよう後円部中心のK10杭から墳丘主軸ラインを南から東に45度振ったラインでの調査区設定とした。

設定箇所は、これまでに検討してきた推定墳端ラインの2m外側から9m内側までの延長11mとした。後円部中心のK10杭からは、27m～38mの位置で、地表標高は67.62m～62.90mの比高4.72mとなった。トレンチ幅は0.8mとしたので面積は8.8m<sup>2</sup>となった。

成果：19トレンチの地表形状を大まかに見ると最上部のA23杭付近は、用悪水路が設置されている。そのすぐ下に道がありA25杭を越す辺りまで少し平坦（20度）になる。そこからA28杭までの間が急勾配（26度）になりA28杭からA31杭までが再度平坦（14度）になる。そこで僅かに急勾配（30度）の箇所があり、その後は緩い勾配（8度）で特に変化は見られない。

地山まで掘り下げた結果、現在の地表形状に整形されたのが古くないことがわかった。細かく見ると、A26杭～A30杭間については、腐植土直下が地山で堆積土が皆無の状態であった。A31杭より下部には堆積層が見られるが厚みが30cm前後ある割には分層できないことから、何らかの要因で一気に堆積したものと考えられる。その最下部すなわち地山直上からは瓦器塊が出土しておりそれ以降の遺物は含まれないことから、少なくともこの部位は、中世期以降は旧状が保たれているものと考えられる。この堆積層下の地山形状を観察すると、高さ35cm程度の段が確認できるA32杭を基底部としてA31杭までの区間が26度の勾配を持ちそのまま上部が12度と緩やかになる。この平坦部の途中から地山上部の堆積層が無くなり当時の状況を探ることはできないが、同様の勾配でA28杭まで3m程続く。A28杭からA25杭辺りまでが再び勾配がきつくなり角度で示すと33度ということになる。その上部は、トレンチ東面の土層を見ると勾配が7度と平坦になる。ここで注目するのは、この平坦部に埴輪片を包含する径40cm程度の浅いビットを検出したことである。この辺りは、上述したように用悪水路や道で改変を受けているが、その改変した下部に僅かながら堆積土が残存しており、その下部に包蔵されていたのである。

ビット内の埋土はやや淡い灰黄色土で先に述べた18トレンチで検出した埴輪据付穴の痕跡の可能性を持つ遺構のものと同系統のものである。このことからこの平坦部は墳丘テラス面である可能性が考えられる。本来であればこのまま上部にトレンチを掘り進めばよいのであるが、A23杭の下にある用悪水路に石材が積み上げられており、これを取り外すことによってその機能が失われることが予想できたので拡張はしなかった。調査中も雨天後には、この辺りで水が多量に染み出てくるという状況であったため一刻も早く現状に復する必要性もあった。



第40図 19トレーナー平・断面図 (S=1/60)

なお、一瞬葺石と思われる用悪水路に用いられている多量の石材については、安山岩で拳大～やや大きいものがほとんどであり、くびれ部の調査で検出した葺石のものと酷似している。本来的には葺石として使われていたものであると思われる。

この用悪水路で石積みが成されている範囲は、後円部南東部で、後円部を4分の1周程の区間で、西から東へ下る勾配で敷設されている。

### 3. 20トレンチ：後円部南西面（第41図 写真20）

設定の意図：後円部南西方向に18トレンチを設定したが、墳端付近と想定される箇所に巨木がありトレンチを延ばすことが妨げられる状況にあった。しかしながら、当所については墳丘規模を考えるうえで重要なポイントであるため、18トレンチに並行するトレンチを設定し、墳端確認調査を継続する必要性があった。そこで状況を検討した結果、18トレンチの南側に、新たなトレンチを設定することが適当と判断し、調査区を設けた。

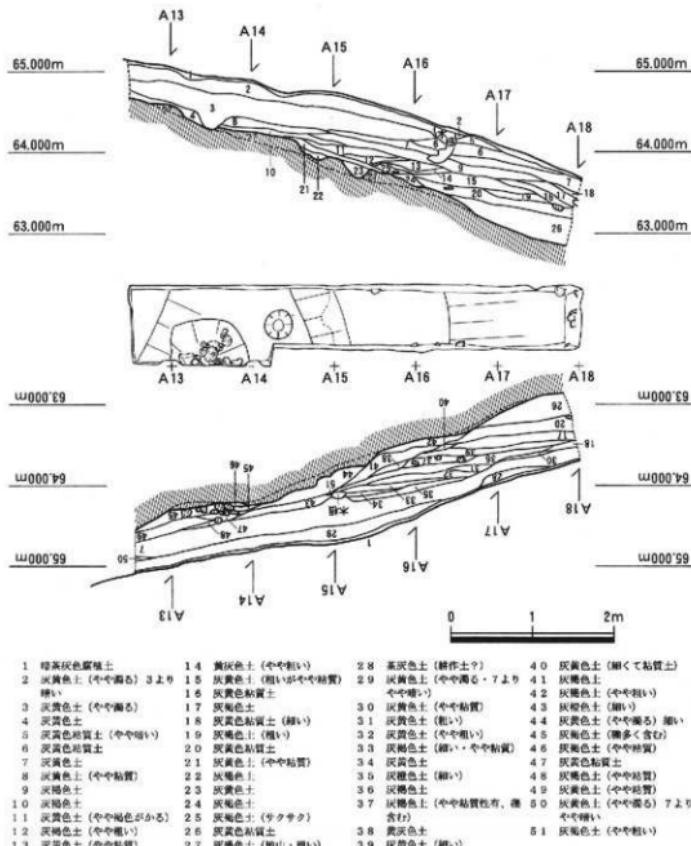
設定位置：18トレンチが、後円部中心K10杭から36mのA14杭で巨木にあたることから、その南側に並行して設定した。A13杭～A14杭間は18トレンチと重なるようになり、A18杭までの5mの延長であったが後に内側に0.5m拡張した。

結果的に後円部中心のK10杭から34.5m～40m、地表標高で6.5.15m～63.69mの比高1.46mであった。トレンチ幅は、18・19トレンチと同様に0.8mとし、面積は4.8m<sup>2</sup>であった。

成果：18トレンチの裾部付近の拡張トレンチとして設定した調査区で、18トレンチの裾部付近と併せた結果として、まず18トレンチA12杭～A13杭間で見られた地山の傾斜変換点が同様にA13杭より上部で見られる。また、この急傾斜になった部分を更に掘削する土壤(SX-01)が確認できた。これは、18トレンチで確認できたものと併せると南北1.5m×東西1.0m程の不定形のもので、中央部付近に集中して拳大の礫が堆積している。その殆どが地山に到達していないことから何らかの要因によって埋土と同時に堆積したものと考えられる。また、18トレンチ側同様、この埋土中には埴輪片も含まれており、堆積している礫も本来葺石として利用されていたものとして考えると、この土壤は快天山古墳以降に作られたものと推察できる。

快天山古墳の施設について明確にできる成果は、他の調査区同様見られないが、トレンチ両側壁及び底面の観察において不定形の浅い落ち込みを確認することができる。遺物が伴わないことから、それが何であるのかの判断はできないが、今回くびれ部で実施した15トレンチで確認できた不定形の浅い落ち込みと類似するものと考えると、葺石基底部付近の人頭大よりやや大きめの礫を据え付けるための痕跡と推察することもできる。検討してきた中でもこの地点が後円部墳端付近に該当することについて強く否定することもできないと思われる。

また、このトレンチにおいても出土遺物に集中性が見られる。まず一箇所は、快天山古墳以降に作られたと思われる土壤(SX-01)である。これは礫と一緒に埋土と共に包含されたものと考えられる。もう一箇所は、このトレンチにおける堆積層は前述した浅い落ち込みを挟んで60～70cmから90～100cmへと厚くなるが、その深くなる辺りから各土層が薄く幾重にも堆積を見せる土層のうち、その上半層である。また、平面的な分



第41図 20トレンチ平・断面図 (S=1/60)

布範囲も A 1 5 杭～A 1 6 杭間に集中している。これは前述した不定形な浅い落ち込み付近ということになり、何らかの関係があるのかも知れない。また、遺物は殆どが円筒埴輪片で葺石に使用されていたと思われる疊も、多量に同層中に含まれる。

## 第5節 後円部調査区出土遺物の概要

### 1. 快天山古墳関係遺物 (第42図 写真21)

この調査区では 28ℓコンテナで1箱の遺物が出土した。今回調査したくびれ部調査区と比較すると対称的な少なさである。また、その殆どが細片しており原形を留めているも

のは1割にも満たない。また、元位置に残されていたものもなく、流出した後のものであるため接合できるものもなかった。

以下では、数少ない資料のうち18トレンチ5点、19トレンチ1点、20トレンチ1点についての報告をする。

また、直接快天山古墳に関係するものではないが、近世まで各時代を通じてこの土地が利用されてきたことを窺わせる土師質土器片、須恵器片、瓦器片等も少量ではあるが出土している。

#### 壺形埴輪（第42図5）

18トレンチA11杭～A12杭間の埴輪据付壙（？）直上で出土しており、本壙の出土遺物の大半を占める円筒埴輪片に比べると極端に少ない壺形埴輪片の一つである。二重口縁で頸部及び端部は欠失しており詳細は掴めないが、頸部から強く外反し、強く立ち上がり口縁部に至ると思われる。口縁中間部で径17cm、焼成は良好、色調は淡茶褐色、胎土には0.5～1mm程度の砂粒を含む。また、調整は外面・内面共に横ナデである。

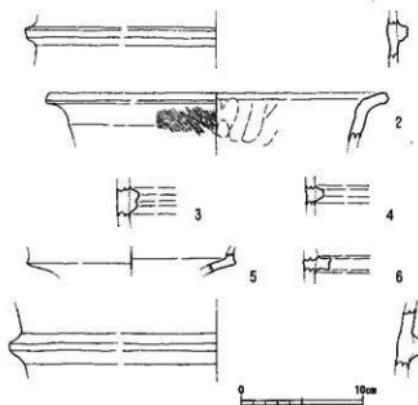
#### 円筒埴輪（第42図1～4・6・7）

今回の調査で出土した遺物のうち形状を留めているものほとんどが円筒埴輪の突帯部分であった。

1は、18トレンチA11杭～A12杭間の埴輪据付壙（？）の埋土中に含まれる本トレンチ唯一の遺構に伴う遺物である。

体部で径31.4cmとくびれ部で出土したものと比較すると少々小振りである。焼成は良好、色調は淡橙黄色、胎土には2～4mmの長石を含む。また、調整は外面・内面共に強い横ナデであり突帯取付け時に接着点を内外から強く圧着させているよう突帯上部下部共に円筒部が薄くなっている。

2・3は、でA6杭～A9杭間の置土上で出土している円筒埴輪片である。2は、口縁



第42図 壺形・円筒埴輪 (S = 1/4)

部で径28cm、焼成は良好、色調は淡茶褐色、胎土には0.5～1mm程度の砂粒や1～2mmの長石を含む。また、調整は、内面は強い縦ナデ、先端部は内外共にナデ整形、湾曲部は縦ハケで、一部横ナデで消されている。体部は縦ハケ後横ナデである。

3は、体部で径は不明、焼成は良好、色調は淡茶色、胎土には0.5～1mm程度の砂粒を含む。調整は、内面は摩滅により不明だが外面は横ナデである。

4は、18トレンチ最下部で検出した土壙上の地表に程近い耕作土からの出土である。耕作

土に含まれることから位置的には元位置から大きく動かされている可能性も否めないが、形状を留める貴重な資料である。円筒埴輪の体部のタガ部分であり、焼成は良好、色調は淡茶褐色、胎土には0.5～1mm程度の砂粒や1～2mmの長石を含む。調整は、1同様に内面・外面共に強い横ナデで突堤接着時に強く圧着させられている。

6は、19トレンチ最下部、A33杭～A34杭間の地山直上で出土した円筒埴輪片体部タガ部分である。地山直上ということから、最も近接する施設（テラス面・円筒埴輪列）からの流入と考えられる。焼成は良好、色調は淡橙色、胎土には0.5～1mm程度の砂粒を含む。調整は、内面は残存部分が非常に少なく不明であるが、外面は18トレンチの遺物と同様に突堤の上部下部共に体部に接合する際の、強い横ナデとなっている。

7は20トレンチA13杭～A14杭間の土壤（SX-01）の石溜中に同胞された円筒埴輪体部で残存部分で径34cmである。焼成は良好、色調は淡灰黄色、胎土には0.5～3mm程度の砂粒を多く含む。調整は、内面・外面共に摩滅が激しく不明である。



図版 5-6 推定第二段テラス遺物出土状態（西から）



図版 5-7 推定第二段テラス遺物出土状態（東から）



図版 5-8 第二段テラス遺物出土状態（西から）



図版 5-9 第三段斜面葺石遺存状態（西から）



図版 6-0 第二段斜面葺石（西から）



図版 6-1 第二段斜面葺石と基底石塁方？



図版 6-2 第二段斜面葺石（南から）



図版 6-3 第二段斜面葺石（上から）

#### 写真 10 15トレンチ



図版 6.4 第三段斜面葺石残存状況（東から）



図版 6.5 第三段斜面葺石（北から）



図版 6.6 第三段斜面葺石（東から）



図版 6.7 第三段斜面葺石（南から）



図版 6.8 推定第二段テラス遺物出土状況（東から）



図版 6.9 第二段テラス遺物出土状況（西から）



図版 7.0 第二段テラス遺物出土状況（東から）



図版 7.1 第二段テラス遺物出土状況（南から）

### 写真 11 16 トレンチ



図版7-2 17トレンチ全景（東から）



図版7-3 17トレンチ南壁土層全景（北東から）



図版7-4 南壁土層：中央部（北から）



図版7-5 南壁土層：西部（北から）



図版7-6 南壁土層：東部（北から）



図版7-7 17トレンチ遺物検出作業



図版7-8 17トレンチ石実測作業



図版7-9 調査説明会風景

## 写真12 17トレンチおよび調査風景



図版 8.0 叠形埴輪（第27図-1）



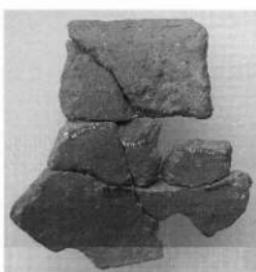
図版 8.1  
疊形埴輪（第27図-2）表



図版 8.2  
疊形埴輪（第27図-2）裏



図版 8.3 円筒埴輪口縁部（第28図-2）表



図版 8.4 円筒埴輪口縁部（第28図-2）裏



図版 8.5 円筒埴輪口縁部（第28図-5）表



図版 8.6 円筒埴輪口縁部（第28図-5）裏



図版 8.7 円筒埴輪中位（第31図-2）表



図版 8.8 円筒埴輪中位（第31図-2）裏

写真 13 15 レンチ出土埴輪



図版 9-9 円筒埴輪中位（第32図-1）表



図版 9-10 円筒埴輪中位（第32図-1）裏



図版 9-11 円筒埴輪中位（第30図-3）表



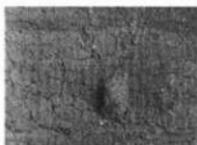
図版 9-12 円筒埴輪中位（第30図-3）裏



図版 9-13 円筒埴輪中位（第31図-4）表



図版 9-14 円筒埴輪中位（第31図-4）裏



図版 9-15 円筒埴輪中位（第31図-4）拡大

写真 14 15 ドレンチ出土埴輪 2